

松嶋夜話 卷之上 13

〔原文〕松島夜話卷之上

〔訓読〕松島夜話 卷の上

〔原文〕松島瑞巖沙門天嶺著

〔訓読〕松島瑞巖の沙門天嶺著

※天嶺…天嶺性空（一六七〇～一七四〇）。通玄法達禪師に幼少期より師事。父は安積伊東氏十九代の伊東重良である。伊東重良は、伊達騒動で斬首の刑に処された伊東重孝（親戚）に
関与した罪で島流しにあい、伊東家は事実上断絶した。

〔原文〕家語曰

〔訓読〕家語曰く

〔原文〕與善人居如入芝蘭之室

〔訓読〕善人と居すれば芝蘭の室に入るが如し

※芝蘭之室 香草のある室。善人の喩。「孔子家語、六本」與善人居、如入〇〇〇〇、久而不聞其香、即與之化矣。

〔原文〕久而不聞其香與之俱化也

〔訓読〕久しく其の香を聞かざるも之と俱に化するなり

※久そ？

〔原文〕吾在福浦亦然

〔訓読〕吾が福浦に在も亦然り

〔原文〕心性全雖曰不住薩婆海

〔訓読〕心性全く薩婆海に住まぜずと曰くと雖も

※薩婆海…薩婆若海（さばにゃかい）？一切を知る仏の智慧（薩婆若）を海に喩えた語。天台法華
宗義集 教門一乗義 「於十地位事理既融、自在流入薩婆若海」

〔原文〕而身識已與海水澄而已

〔訓読〕身識已に海水と澄めるのみ

〔原文〕松島江干有福浦島

〔訓読〕松島の江干に福浦島有り

※江干…かはばた。江のふち。「蘇頌、長樂花賦」賓遠鴻於沙塞、叫離鶴於〇〇。

※福浦島…宮城郡松島町松島にある島。直径三三〇メートル。

〔原文〕島中有毒龍庵

〔訓読〕島中に毒龍庵有り

〔原文〕庵前有坐禪石鍔字松

〔訓読〕庵前に坐禪石、鍔(ばん)字松有り

※鍔(ばん)字松？

〔原文〕庵外有月見濱三神峯

〔訓読〕庵外に月見濱、三神峯有り

※月見濱：宮城県東松島市にある。松島湾の宮戸島の南端に位置する浜。

※三神峯：宮城県仙台市太白区に位置する地名。

〔原文〕原斯地洞水祖翁最初修行地

〔訓読〕原(も)と斯の地は洞水祖翁最初の修行の地なり

※洞水祖翁：洞水東初和尚のこと。臨済宗妙心寺派の僧侶で、現在の宮城県松島町にある瑞巖寺の再興に尽力した。

〔原文〕厥后通玄先師之来掩關

〔訓読〕厥の後、通玄先師之(ここ)に來りて關を掩ふ

※通玄先師：通玄法達禪師(勅諭大照智光禪師・妙心寺二百六十五世・瑞巖寺一〇三世)。瑞巖寺のある松島に生まれ、禪傑雲居希膺禪師から直接教えを受け、更に瑞巖寺百世洞水東初(大機円応禪師)に参禅し、全国を行脚してひたすら修行し、大本山妙心寺を歴住し、元禄十六年(一七〇三年)に瑞巖寺の住職になる。

〔原文〕有口占偈

〔訓読〕口占の偈有り

※口占：口ずさむこと。また、詩文などを即席に口ずさむこと。南海先生文集、三・湘雲居六題并序「平居凡百無蓄、庭中惟有六物、亦未經題詠、今春伏枕人事寂絶、遂〇〇成六律云」

〔原文〕自遣曰

〔訓読〕自ら遣って曰く

※自の読みの「ミ」？

〔原文〕幻幻時離幻世

〔訓読〕幻幻幻の時、幻世を離れ

〔原文〕空空空處卜空齋

〔訓読〕空空空の處、空齋を卜す

〔原文〕松根月下坐禅影

〔訓読〕松根月下坐禅の影

〔原文〕寫出巖中須菩提

〔訓読〕寫し出す巖中の須菩提

※須菩提：Sudhanuの音写。善現・空生とも。釈迦十大弟子の一人。無諍第一、空の理解の深かったことから解空第一と称された。スプーティ。

〔原文〕偈聿零鼓社

〔訓読〕偈聿に鼓社に零（お）つ

〔原文〕偶有誦者

〔訓読〕偶たま誦する者有り

〔原文〕復此島有不運尊

〔訓読〕復た此の島に不運尊有り

※「運」は「動」の古字

〔原文〕智證大師手彫

〔訓読〕智證大師の手彫なり

※智證大師：円珍。平安時代の天台宗の僧。天台寺門宗（寺門派）の宗祖。諡号は智証大師（智證大師）。宝号は「南無大師智慧金剛」。唐で学んだ入唐八家（最澄、空海、常晓、円行、円仁、恵運、円珍、宗叡）の一人。

〔原文〕傳言源氏義経從臣

〔訓読〕傳に源氏義経の從臣と言う

〔原文〕辨慶守護尊也

〔訓読〕辨慶が守護尊なり

〔原文〕且島奥有三神山

〔訓読〕且つ島の奥に三神山有り

※「三神山」は三神峯？三つの神の山（仙台の西の戸神山と女戸神山ともうひとつ）？

〔原文〕鎮熊野三社

〔訓読〕熊野三社を鎮す

〔原文〕法身開禪時天台衆徒籠茲調伏副將軍時頼

〔訓読〕法身禪を開く時、天台の衆徒茲に籠り、副將軍時頼を調伏す

※時頼…北条時頼（一二二七～一二六三） 鎌倉幕府第五代執権。泰時の孫。一二四六年に執権となり、北条氏の独裁体制の基礎をかためた。また、禪宗を深く信じ、蘭溪道隆を宋からまねいて建長寺を建てた。

〔原文〕從是曰調伏壇

〔訓読〕是れより調伏壇と曰ふ

〔原文〕復土宜有櫟木檀木數十章

〔訓読〕復た土宜に櫟木、檀木數十章有り

※土宜…土地に適する農作物。〔周禮、夏官、土方氏〕辨土宜・土化之法。〔注〕土宜、謂九穀植穉所宜也。

※「章」？

〔原文〕又有梅有椿有櫟有榲

〔訓読〕又梅有り、椿有り、櫟（しきみ）有り、榲（かや）有り

〔原文〕春風蜚香

〔訓読〕春風香を蜚（と）ばす

※「蜚」は「飛」に通じる

〔原文〕且竹龍千萬竿翠密鬱乎

〔訓読〕且つ竹龍千萬竿、翠密鬱乎たり

※竹龍…水を引く竹で出来た筒。〔舒亶有詩曰、門前屏嶂繞潺湲、付與林僧夜定還。松蓋作雲連十里、竹龍行雨出千山〕

※翠密（すいみつ）…青々と茂る。又、其の草木。〔王勃、遊廟山賦〕菌軒丹絢、芝場翠密。〔宇文虛、中夏詩〕翠密圍窗竹、青圓貼水荷。

※鬱乎（うつこ）…草木のしげるさま。〔蘇軾、前赤壁賦〕山川相繆、鬱乎蒼蒼。

〔原文〕而今星移庵廢

〔訓読〕而今、星移り庵廢す

〔原文〕近頃余悛之

〔訓読〕近頃余之を悛（あら）たむ

〔原文〕因此秋款待太守藤公

〔訓読〕因りて此の秋、太守藤公を款待す

※藤公：不明

〔原文〕公席上召畫師

〔訓読〕公、席上に畫師を召す

〔原文〕展素絹

〔訓読〕素絹を展（のべ）て

〔原文〕圖出洞祖坐禪石之樣體泊福浦景致

〔訓読〕洞祖坐禪石の樣體泊（およ）び福浦の景致を圖出す

〔原文〕乞賛于余惠賜矣

〔訓読〕賛を余に乞て惠賜（けいし）せらる

〔原文〕又賦和歌乙篇

〔訓読〕又和歌乙篇を賦し

〔原文〕稱松島島中第一風致

〔訓読〕松島島中第一の風致と稱す

〔原文〕此島此時改觀云

〔訓読〕此の島此の時、觀を改むと云う

松嶋夜話 卷之上 4

〔原文〕誓願寺如来、佛工稽文會稽主薰者造之

〔訓読〕誓願寺の如来、佛工稽文會、稽主薰といふ者造る

※稽文会…奈良時代の仏師。神亀四年（七二七）供養がおこなわれた大和（奈良県）長谷寺の十一面観音像をとともにつくったとされる。

※稽主勲…奈良時代の仏師。神亀二年（七二五）四月八日、大和長谷寺の十一面観音像を稽文会とともに造ったと伝えられる仏師であるが、信をおきがたい。

※之

〔原文〕二工河内春日邑人也

〔訓読〕二工は河内春日の邑の人なり

〔原文〕半陶堯八百餘歳春日明神所作云

〔訓読〕半陶堯、八百餘歳、春日明神の作る所と云う

※半陶堯…半陶堯？ 彦竜周興の文集。

彦竜周興（一四五八―一四九二）…室町時代中期の禅僧（臨済宗夢窓派）。諱周興、字彦竜、別に半陶子・陶庵と称す。

〔原文〕振古轉誤矣

〔訓読〕振古轉誤す

※振古…昔より、いにしえ

松嶋夜話 卷之上 5

〔原文〕有夜話者曰

〔訓読〕夜話の者有り曰く

〔原文〕本朝巫家有神保行法

〔訓読〕本朝の巫家に神保の行法有り

〔原文〕此事有耶

〔訓読〕此の事有りや

〔原文〕曰古曰

〔訓読〕曰く、古に曰く

〔原文〕至誠感神、豈無此事

〔訓読〕至誠神を感じずと、豈に此の事無らんや

〔原文〕泥物理者疑之

〔訓読〕物理に泥(なづ)む者は之を疑ふ

〔原文〕国語民之精爽不攜貳者神明降之

〔訓読〕民の精爽にして憎貳あらざる者は神明之に降る

※『国語』卷第十八・楚語下「民之精爽不攜貳者、而又能齊肅衷正、其智能上下比義、其聖能光遠宣朗、其明能光照之、其聰能聽徹之、如是則明神降之」(民の精爽にして憎貳あらざる者にして、又た能く齊肅衷正にして、其の智は能く上下に比義し、其の聖は能く光遠宣朗にして、其の明は能く之を光照し、其の聰は能く之を聽徹す。是の如くならば則ち明神之に降る)

〔原文〕復佛説有阿尾舎之法

〔訓読〕復た佛の説に阿尾舎の法有り

※阿尾捨…梵語のアーヴェーシャ(avesa)の音訳。阿尾捨は一種の降神術を意味する語。

〔原文〕降神之修法也

〔訓読〕降神の修法なり

〔原文〕然而巫能得法降神者其言不爽

〔訓読〕然り而して巫能く法を得て神を降す者は、其の言爽(たが)はず

〔原文〕有爽者不巫之巫女之所謂也不信

〔訓読〕爽(たが)ふこと有る者は巫ならずの巫の謂ふ所なり、信ならず

松嶋夜話 卷之上 6

〔原文〕客話次問

〔訓読〕客話次で問ふ

〔原文〕梵書權輿套曰

〔訓読〕梵書、權輿の套に曰く

〔原文〕提婆尊者祈願大自在天

〔訓読〕提婆尊なる者、大自在天を祈願す

※提婆尊…提婆達多(だいはだつた Devadatta の音訳。略して「提婆」、意識して「天授」とも)。

釈迦のいところ。出家前の釈迦の競争相手で、釈迦が出家し悟りを開いて以後、その弟子となったが、のち離反。

〔原文〕聞摩醯首羅元藥叉種也

〔訓読〕聞く、摩醯首羅は元と藥叉の種なり

※摩醯首羅(まけいしゅら)…仏語。色界の頂上に位置して、仏法を守護する神。もと、インドバラ

モン教で世界創造と破壊の最高神であるシバ神の異名。大自在天。

摩醯首羅王。摩醯首羅天。摩醯首羅天王。

※藥叉…夜叉のこと

〔原文〕尊者因甚歸信此天

〔訓読〕尊者、甚に因て此の天に歸信す

〔原文〕余曰摩醯首羅

〔訓読〕余曰く摩醯首羅と

※「余」の下に「カ」とあるので、「余」の読みが不明

〔原文〕此天有二天

〔訓読〕此の天、二天有り

〔原文〕又有尊卑高下之分有

〔訓読〕又尊卑高下の分有り

〔原文〕因華嚴疏

〔訓読〕華嚴の疏に因るに

〔原文〕自在天在十住菩薩住處

〔訓読〕自在天、十住菩薩の住處に在て

※十住菩薩…十住の位の菩薩。

〔原文〕住色頂天

〔訓読〕色頂天に住み

〔原文〕號大自在天王

〔訓読〕大自在天と號す

〔原文〕然以大千世界為統攝境

〔訓読〕然して大千世界を以て統攝の境と為す

※統攝…まとめて、一括すること。

〔原文〕其形三目八臂

〔訓読〕其の形三目八臂

〔原文〕騎白牛執白拂

〔訓読〕白牛に騎り、白拂を執ると

〔原文〕曰是尊者歸信大自在梵天王也

〔訓読〕曰く、是れ尊者の歸信する大自在梵天なり

〔原文〕又一天有夜叉種摩醯首羅

〔訓読〕又一天夜叉の種の摩醯首羅有り

〔原文〕孔雀經中曰摩醯首藥叉

〔訓読〕孔雀經の中に摩醯首藥叉と曰ふ

〔原文〕止羅多國住云

〔訓読〕羅多國に止まり住すと云う

〔原文〕是天非先色頂天主

〔訓読〕是の天は先きの色頂天の主にあらず

〔原文〕下品藥叉種也

〔訓読〕下品の藥叉なり

※「種」の下の子が不明

〔原文〕此二天名同有三目

〔訓読〕此の二天名同ふして三目有り

〔原文〕是故人轉誤

〔訓読〕是の故に人轉誤す

〔原文〕仍告圖此像者疏可作兩樣

〔訓読〕仍ち此の像を圖する者は疏（わ）けて兩樣を作るべし

〔原文〕尊者歸向象相作菩薩之相

〔訓読〕尊者歸向の象相は菩薩の相を作す

〔原文〕三目八臂

〔訓読〕三目八臂

〔原文〕執拂持鈴杵并尺

〔訓読〕拂を執り鈴、杵并（とも）に尺を持ち

〔原文〕結印合掌

〔訓読〕結印合掌せしめよ

〔原文〕是紀譚所謂之造書梵天王也

〔訓読〕是れ紀譚に謂う所の造書の梵天なり

〔原文〕孔雀經相作藥叉神之形

〔訓読〕孔雀經の説相は藥叉神の形を作す

〔原文〕赤髮鬢起

〔訓読〕赤髮鬢起し

〔原文〕三目八臂

〔訓読〕三目八臂

〔原文〕手執弓箭等者下品夜叉種也

〔訓読〕手に弓箭等を執る者は下品の夜叉の種なり

〔原文〕非尊者歸向梵天王之謂也

〔訓読〕尊者歸向の梵天王の謂にあらざるなり

〔原文〕蓋人有言其言不信

〔訓読〕蓋し人言うこと有りて、其の言信ぜずば

〔原文〕則空言空施也

〔訓読〕則ち空言空く施すなり

※「施」の下文字が不明

〔原文〕為人師者之愧也

〔訓読〕人の師為る者の愧なり

〔原文〕故易曰

〔訓読〕故に易に曰く

〔原文〕有言不信尚口説也

〔訓読〕言ふこと有りて信ぜられざるは、口説を尚へばなり

〔原文〕尊者之意在于此

〔訓読〕尊者の意は此に在り

松嶋夜話 卷之上 7

〔原文〕香積下有浄人夢宅者

〔訓読〕香積の下に浄人夢宅なるもの有り

※夢宅…人名？

〔原文〕先年發心祝髮松島

〔訓読〕先年發心髮を松島に祝(き)る

〔原文〕先師憫之為今之名

〔訓読〕先師之を憫んで今の名を為す

〔原文〕今茲春秋八旬眼耳手脚不昇壯年

〔訓読〕今茲春秋八旬、眼耳手脚壯年に昇ならず

〔原文〕朝暮喋喋、高談活話

〔訓読〕朝暮喋喋として高談活話す

〔原文〕獨自愛矣

〔訓読〕獨自に愛す

〔原文〕然一言不言人長短

〔訓読〕然も一言人の長短を言はず

〔原文〕不害于人不黨於人

〔訓読〕人を害せず、人に黨せず

〔原文〕天性正直無智無能

〔訓読〕天性正直、無智無能

〔原文〕已之五十五歳之冬、依出世殺拙

〔訓読〕

※「已之」と「殺拙」がよくわかりません

〔原文〕見雇商船運漕國祖

〔訓読〕商船を雇はせ國祖を運漕す

〔原文〕達關東武城

〔訓読〕関東の武城に達し

※武城…不明

〔原文〕此冬為一船篙師

〔訓読〕此の冬一船篙師と為る

〔原文〕發帆三日前就此船架下

〔訓読〕帆を發する三日前、此の船の架下に就て

〔原文〕捻香祈念

〔訓読〕捻香祈念し

※捻香…禅宗用語。住持が香をつまんで炉にたくこと。

〔原文〕移頃假寐

〔訓読〕移頃（しばらく）假寐す

〔原文〕夢中白衣人峩冠枕頭来告曰

〔訓読〕夢中、白衣の人峩冠して枕頭に來り告して曰く

〔原文〕此船不祥、可乗他船

〔訓読〕此の船不祥なり、外の船に乗るべし

〔原文〕夢覺心不審

〔訓読〕夢覺め心審かならず

〔原文〕明晚又在架下祈念

〔訓読〕明らに晚れ又架下に在て祈念す

※「明」の送り仮名が不明

〔原文〕夜為央

〔訓読〕夜、央はらんと為す

〔原文〕少就睡

〔訓読〕少く睡に就く

〔原文〕又白衣老人来告梦如前夕

〔訓読〕又白衣の老人來りて夢を告ぐこと前夕の如し

〔原文〕夢覚心憶

〔訓読〕夢覚め心憶ふ

〔原文〕是所信當境牧山觀音

〔訓読〕是れ信する所の當境牧山の觀音ならん

※牧山：宮城県石巻市湊地区の北東方、街区の背後にそばだつ丘陵状山塊で、標高二一八・九メートル。

〔原文〕吾曷疑

〔訓読〕吾曷ぞ疑はん

〔原文〕等夜明打坐

〔訓読〕夜明るを等って打坐す

〔原文〕隣之商客伏見氏者来頼老彼篙師

〔訓読〕隣の商客伏見氏なる者来て彼れか篙師に老たるを頼み

※伏見氏…不明

〔原文〕誘掠曳去

〔訓読〕誘掠して曳き去る

〔原文〕先舶聞風發帆

〔訓読〕先きの舶風を聞（み）て帆を發し

〔原文〕泊船寒村浦

〔訓読〕船を寒村の浦に泊む

〔原文〕四面急渝高浪滔天

〔訓読〕四面急に渝（あふ）れ、高浪天に滔（あふ）れる

※急かに渝（かはり）

〔原文〕船丁牛頭擊汰轉覆矣

〔訓読〕船牛頭丁（あた）って撃ち汰（よなげ）られて転覆す

〔原文〕舟中十二人一時為海底微滓

〔訓読〕舟中の十二人一時海底の微滓と為る

〔原文〕已淨人免此厄

〔訓読〕已に淨人此の厄を免れたり

〔原文〕吁非大士冥助乎也

〔訓読〕吁、大士の冥助にあらんや

〔原文〕淨人雖卑知佛力不可昧矣

〔訓読〕淨人卑しと雖も、佛力の昧(くら)ますべからざるを知る

〔原文〕余或時召淨人令話大士梦相事

〔訓読〕余或る時淨人を召して大士の夢の相を話せしめ

〔原文〕侍僧問訊

〔訓読〕侍僧問訊す

〔原文〕無智癡頑者有得此感應奚矣

〔訓読〕無智癡頑の者此の感應得ること有るは奚ぞや

〔原文〕余曰

〔訓読〕余曰く

〔原文〕大氏無智愚魯者其志純一無雜也

〔訓読〕大氏無智愚魯の者とは其の志純一無雜なり

〔原文〕聰明有智之族其心雜而不純一

〔訓読〕聰明有智の族、其の心雜にして純一ならず

〔原文〕是以智慧攸晦

〔訓読〕智慧を以て攸晦

※攸晦…訓読がよくわかりません

〔原文〕如靈運為遠公見避

〔訓読〕靈運遠公の為に避けるるが如し

〔原文〕率其志純一合本覺

〔訓読〕率(おおむ)ね其の志純一なれば本覺に合う

〔原文〕不一背本覺

〔訓読〕一ならざれば本覺に背く

〔原文〕夫本覺衆生本性也

〔訓読〕夫れ本覺は衆生の本性なり

〔原文〕本性明則諸佛法身顯在性海

〔訓読〕本性明らかなれば則ち諸佛の法身性海に顯在す

※性海…仏語。真如の世界。仏の悟りのすべてである真如の深く広いことを海にたとえたもの。

〔原文〕是以觀無量寿經曰

〔訓読〕是れを以て觀無量寿經に曰く

〔原文〕當思佛

〔訓読〕當に佛を思ふべし

〔原文〕所以者何

〔訓読〕所以の者は何ぞ

〔原文〕諸佛如來是法界身

〔訓読〕諸佛、如來は是れ法界身

〔原文〕入一切衆生心想中

〔訓読〕一切衆生の心想の中に入る

〔原文〕余曰善應如此

〔訓読〕余曰く善く應に此の如くなるべし

〔原文〕衆生心識純一無雜而本覺妙明

〔訓読〕衆生の心識純一無雜にして本覺妙明

〔原文〕佛身充滿法界應物現形

〔訓読〕佛身法界に充滿し物に應じて形を現す

〔原文〕只系心之純一與不純一而已

〔訓読〕心の純一、純一ならざると系るのみ

〔原文〕此故先無智者感應有依怙

〔訓読〕此の故に先の無智の者には感應に依怙有り

〔原文〕有智人靈驗欠聶肩

〔訓読〕有智の人には靈驗に聶肩を欠く

〔原文〕然純一無雜而有無礙清淨智慧亦何言哉

〔訓読〕然も純一無雜にして無礙清淨の智慧有るは何をか言んや

〔原文〕僧人聞得入心理也

〔訓読〕僧人聞き得て心理に入るなり

〔原文〕余亦戲淨人云

〔訓読〕余亦淨人に戯れて云ふ

〔原文〕以我比汝智慧太殺

〔訓読〕我を以て汝の智慧を比すれば太殺（はなはだ）し

〔原文〕然不剋汝正直一片愚魯

〔訓読〕この文章はよくわかりません。

〔原文〕古曰

〔訓読〕古に曰く

〔原文〕其知可及也

〔訓読〕其の知は及ぶべきなり

〔原文〕其愚不可及也

〔訓読〕其の愚は及ぶべからざるなり

〔原文〕於汝言之淨人耳予言

〔訓読〕汝に於て之を言ふは、淨人予が言を耳（きひ）て

〔原文〕不知言何等言矣

〔訓読〕何等の言を言ふことを知らず

〔原文〕只俛首而已

〔訓読〕只だ俛首するのみ

〔原文〕亦語渠曰

〔訓読〕亦渠れに語して曰く

〔原文〕我宗族昔日知彼地

〔訓読〕我が宗族昔日彼の地を知る

〔原文〕我與汝有君臣民之意

〔訓読〕我は汝と君臣民の意有り

〔原文〕不爾雖一日不鳩吾食輪下矣

〔訓読〕爾らずんば、一日と雖も吾が食輪下に鳩（やす）まらじ

〔原文〕仍記感應口實

〔訓読〕仍て感應の口實を記して

〔原文〕為不信佛法不頼神力者俾起信心云

〔訓読〕佛法を信ぜず神力を頼まず者の為に信心を起こさしむ

松嶋夜話 卷之上 8

〔原文〕尾州長母寺上人無住者東寺末流

〔訓読〕尾州の長母寺の上人無住は東寺の末流

※長母寺…愛知県名古屋市中区矢田町。靈鷲山と号し、臨濟宗東福寺派。本尊阿弥陀如来。治承三年（一一七九）山田次郎重忠が母の菩提を弔うために觀勝坊を開山として建立し、初めは龜鏡山桃尾寺といい、天台宗の小寺であった。大永寺村（現守山区）の大永寺と小幡村（現守山区）の長慶寺は同じく重忠の創建で、前者が長父寺、後者が長兄寺にあたる。「長」は敬称であるとともに「弔」の意でもあろう。その後荒廃していたが、弘長三年（一二六三）山田道円夫婦が再興し、無住一円を新たに開山として臨濟宗に改め、靈鷲山長母寺と改称した

〔原文〕后謁見東福聖一国師

〔訓読〕后ち東福の聖一国師に謁見して

※聖一国師…円爾。鎌倉時代中期の臨濟宗の僧。諡号は聖一国師。駿河国の出身。

〔原文〕得顯密禅教律之大綱

〔訓読〕顯密の禅の教律の大綱を得て

〔原文〕竟三套編書而天下一統

〔訓読〕竟に三套編書し天下一統

〔原文〕無高下差膾炙古今之人人口

〔訓読〕高下の差無く、古今の人の人口に膾炙す

〔原文〕其鑿世手段誰有不讀者乎也

〔訓読〕其の鑿の世の手段、誰か讀まざる者有らんや

〔原文〕或時説話

〔訓読〕或る時説話す

〔原文〕有一山寺一匹犬無奚来

〔訓読〕一山寺有りて一匹の犬奚（いずこ）無くして来る

〔原文〕且圖于食輪

〔訓読〕且つ食輪に圖（か）ふ

〔原文〕檀越偶来請得其犬飼己家也

〔訓読〕檀越偶たま来りて其の犬を得て己の家に飼わんことを請ふ

〔原文〕主可之

〔訓読〕主之を可とする

〔原文〕檀越剋期歸矣

〔訓読〕檀越期を剋して歸る

〔原文〕其夜其犬告夢寺主云

〔訓読〕其の夜其の犬夢を寺主に告げて云う

〔原文〕我前世為汝之朋

〔訓読〕我前世は汝の朋為り

〔原文〕昔日借與汝於一斗米

〔訓読〕昔日、汝に一斗の米を借與す

〔原文〕為債汝之其負也

〔訓読〕汝が其の負ふを債はんか為なり

〔原文〕若斗米空

〔訓読〕若し斗米空きなば

〔原文〕曰汝留我我不尼也

〔訓読〕汝我を留むと曰ども我を尼(とど)まらざるなり

〔原文〕寺主梦醒嘆异

〔訓読〕寺主梦醒めて嘆异す

〔原文〕便出斗米嘗之

〔訓読〕便ち斗米を出し之を嘗(こころ)む

〔原文〕到米盡日犬去而不返

〔訓読〕米尋る日に到て、犬去りて返らず

〔原文〕寔如梦告矣

〔訓読〕寔に夢に告たるが如し

〔原文〕夫以我貸于人、人假于吾

〔訓読〕夫れ我を以て人に貸すか、人_レ以て吾に假すか

〔原文〕至于果到報来、如償犬之債

〔訓読〕果_レ到り報来るて犬の債_レめを償ふが如きに至る

〔原文〕必負墮勿_レ追地也

〔訓読〕必ず負墮しめ地に追_レ（の）が_レるるに勿れ

〔原文〕是今日事也、天下之事也

〔訓読〕是れ今日の事なり、天下の事なり

〔原文〕可不憶乎

〔訓読〕憶はざるべけんや

松嶋夜話 卷之上 9

〔原文〕元禄初年謁佛國廣慧國師

〔訓読〕元禄初年、佛國の廣慧國師に謁す

※高泉性澈：明の僧。崇禎六年十月八日生まれ。黄檗山の慧門如沛の法をつぐ。寛文元年（一六六一）隠元隆にまねかれ来日。山城仏国寺などをひらき、のち山城宇治の万福寺住持。黄檗宗中興の祖とされる。元禄八年十月十六日死去。六十三歳。福建省出身。法名ははじめ良偉。性敦ともかく。別号に雲外、曇華道人。諡号は大円広慧国師、仏智常照国師。著作に「扶桑禅林僧宝伝」「東国高僧伝」など。

〔原文〕茶話次語曰

〔訓読〕茶話次語しめ曰く

〔原文〕只此紫雲老白眉我家宗匠也

〔訓読〕只此の紫雲老人白眉は我が家の宗匠なり

〔原文〕昔日受瑞聖請赴江城

〔訓読〕昔日、瑞聖の請を受け江城に赴く

※瑞聖寺：東京都港区白金台三丁目にある禅宗寺院。宗派は黄檗宗系の単立。山号は紫雲山。本尊は釈迦如来。開山は木庵性瑫、開基は青木重兼である。

〔原文〕擔頭行李無冗物

〔訓読〕擔頭の行李冗物無し

〔原文〕只剩宗門類聚乙写主文一支耳

〔訓読〕只宗門の類聚乙写（巻の異体字）、主の文一支を剩（あ）ます

〔原文〕泊直上紫雲

〔訓読〕直に紫雲に上るに泊（いたり）ては

〔原文〕雄風振海

〔訓読〕雄風海を振ふ

〔原文〕我家知識也

〔訓読〕我が家の知識なり

〔原文〕余其時耳此言

〔訓読〕余其の時此の言を耳(き)く

〔原文〕今尚其言在耳

〔訓読〕今尚を其の言耳に在り

松嶋夜話 卷之上 一〇

〔原文〕松島方丈右廟有圓通院

〔訓読〕松島の方丈の右廟に圓通院有り

〔原文〕洞祖開闢五十年前有大悲閣

〔訓読〕洞祖開闢五十年前には大悲閣有り

〔原文〕今則亡矣

〔訓読〕今は則ち亡し

〔原文〕余昨夜夢中登大悲閣

〔訓読〕余昨夜夢中に大悲閣に登る

〔原文〕見於閣之正廳厝多聞天朽象其長七尺可者矣

〔訓読〕閣の正廳、多聞天の朽象、其の長さ七尺可（ばかりなる）者のを厝（おく）を見る

〔原文〕庖材雖不可材、威容儼然

〔訓読〕庖材材（はか）るべからずと雖も、威容儼然たり

〔原文〕又閱象樣如慈覺作

〔訓読〕又象樣を閱れば慈覺の作の如し

〔原文〕余意出法資

〔訓読〕余意法資を出しめ

※「意」の下の特殊文字が不明

〔原文〕思欲再興修飾之間其象自運容

〔訓読〕再興修飾せんと思欲するの間、其の象自運の容

※「自運容」がよくわかりません

〔原文〕立吾旁申右手

〔訓読〕吾が旁らに立ちて右手を申へ

〔原文〕握余之左手結於虛空蔵即身成佛_レ之種子印相

〔訓読〕余の左手を握り、虚空蔵即身成佛、_レ（タラク）の種子印相を結び

〔原文〕指示焉

〔訓読〕指示す

〔原文〕余起希有嘆

〔訓読〕余、希有の嘆きを起こす

〔原文〕象便歸本位

〔訓読〕象は便ち本位に歸す

〔原文〕余夢忽覺矣

〔訓読〕余が夢忽ち覺む

〔原文〕考時日丙辰小春十三日空藏正當縁日也

〔訓読〕時日を考ふれば、丙辰小春十三日、空藏正當の縁日なり

〔原文〕即命僧使督左右寺院

〔訓読〕即ち僧の使いに命じて左右の寺院を督（ただ）し

〔原文〕摸山間巖岩而求其象未中

〔訓読〕山間の巖岩を摸って其の象を求めれども未だ中たらず

〔原文〕以奚日得象樣有原此夢時矣

〔訓読〕以（おも）へらく、象樣を得て此の夢を原する時有る

※「原」の訓読が不明

〔原文〕聞佛身充滿法界

〔訓読〕聞く佛身法界に充滿すと

〔原文〕又經中曰

〔訓読〕又經中に曰く

〔原文〕且道此夢

〔訓読〕且く道は此の夢

※この訓読は不明

〔原文〕與舍利弗同是別

〔訓読〕舍利弗と同じか是れ別か

〔原文〕夫誰知之

〔訓読〕夫れ誰か之を知るか

松嶋夜話 卷之上 一一

〔原文〕偏袒右肩

〔訓読〕偏へに右肩を袒(ぬ)くは

〔原文〕右膝著地者天竺通禮

〔訓読〕右膝地に著く者は、天竺の通禮

〔原文〕必非佛制也

〔訓読〕必ず佛制にはあらざるなり

〔原文〕原從袒右肩露不藏刃也

〔訓読〕右肩袒(ぬ)くは刃を藏さざるを露すに従なり

〔原文〕又右膝著地男子通禮

〔訓読〕又右膝地に著くは男子の通禮

〔原文〕左右著地長跪者女子通義

〔訓読〕左右地に著き長跪する者は女子の通義

〔原文〕又史記樂書曰

〔訓読〕又史記の樂書に曰く

〔原文〕孔子問賓牟賈曰

〔訓読〕孔子賓牟賈に問ひて曰く

〔原文〕武坐致右憲左云

〔訓読〕武坐するに右を致き左を憲(あ)ぐると云う

〔原文〕觀之西申支那聖賢致禮

〔訓読〕之を觀れば西申支那の聖賢の致禮

※西申…戎狄の名

〔原文〕余誦海藏國師之隨筆欣而告從者

〔訓読〕余海藏國師の隨筆を誦し從者に告ぐ

※海藏國師…虎閑師鍊?…鎌倉・南北朝時代の臨濟宗聖一派の僧。京都の人。∞歳のとき山城京都府)三聖寺の東山湛照(1231—1291)のもとで出家し、東山の寂後は南禪寺の規庵祖円(1261—1313)に学んだ。ついで鎌倉に行き、桃溪徳悟(1240—1307)、『藏山順空(1233—1308)、『無為昭元(1245—1311)、『一山一寧などに師事し、仏

典や禅籍、儒書、詩文を学んで南宋士大夫の学芸を身につけ、初期の代表的五山文学僧として唐宋八家に比された。また一山の啓発により日本最初の総合仏教史の編纂を企て、1322年『元亨釈書』30巻を完成した。さらに東密や台密の相承も受け、自らも密法を修する兼習禅者でもあった。初め京都・河東の歓喜光寺、白河の済北庵、伊賀の本覚寺を兼帯したが、1332年（元弘2）東福寺に入院、1339年（延元4・暦応2）南禅寺に昇住、1341年に東福寺海蔵院に退居したので海蔵和尚とよばれる。翌1342年本覚国師の号を特賜された。1346年7月23日示寂。著書はほかに、『禅儀外文集』『聚分韻略』のような四六文の作法や韻書、『済北集』『十禅支録』などの詩文集や語録のほか、『仏語心論』『禅余或問』など多数ある。

松嶋夜話 卷之上 12

〔原文〕教乗公案曰

〔訓読〕教乗公案に曰く

※教乗公案…<https://kokusho.nijl.ac.jp/work/002353813>

〔原文〕禪録多言雪山苦行

〔訓読〕禪録に多く雪山苦行と言ふ

〔原文〕徧考藏經未見文證

〔訓読〕徧く藏經を考うるに未だ文證を見ず

〔原文〕余以近世尊八難中曰六年苦行

〔訓読〕余以（おも）ふに、近くは世尊八難の中に六年の苦行と曰ふ

〔原文〕亦偶誦佛説阿弥陀經北藏乃服字之函中

〔訓読〕亦偶たま佛説阿弥陀經の北藏乃服字の函を誦す

※北藏乃服字…全くわかりません

〔原文〕棄國財位

〔訓読〕國の財位を棄て

〔原文〕入山學道

〔訓読〕山に入つて道を學ぶ

〔原文〕次文著法服

〔訓読〕次の文に法服を着て

〔原文〕剃除鬚髮端坐樹下

〔訓読〕鬚髮を剃除し樹下に端坐す

〔原文〕勤苦六年云

〔訓読〕勤苦六年と云う

〔原文〕又近頃闇翁者一小冊引八大靈塔名號經佛偈曰

〔訓読〕又近頃闇翁といふ者一小冊、八大靈塔名號經の佛の偈を引きて曰く

※闇翁…人名？

〔原文〕二十九載處王宮六年雪山修苦行

〔訓読〕二十九載、王宮に處り、六年雪山に苦行を修す

〔原文〕觀之雪山六年苦行又有文證余曰

〔訓読〕之を觀れば雪山の六年の苦行、又文證有り。余曰く

〔原文〕只向不見文證以前見文見證

〔訓読〕只文證を見ざる以前に向かいて文を見、證を見

〔原文〕文證自顯然

〔訓読〕文證自ら顯然たらん

〔原文〕若又待明星現時八刻遲

〔訓読〕若し又明星の現れる時を待てば八刻遅る

松嶋夜話 卷之上 13

〔原文〕有客茶話曰

〔訓読〕客有り茶話に曰く

〔原文〕収茶于瓶煇炭厝上濕氣不入

〔訓読〕茶を瓶に収れ煇炭を上厝（お）けば、濕氣入らず

〔原文〕此言曰便覧群方云

〔訓読〕此の言ふこと便覧群方に云ふ

※「群覧群方」：書名？

〔原文〕余笑云

〔訓読〕余笑ひて云ふ

〔原文〕俗曰畱麴粉寔煇炭不餽

〔訓読〕俗に曰く、麴粉を畱るに煇炭を寔は餽へず

〔原文〕此言有是耶

〔訓読〕此の言是れ有るか

松嶋夜話 卷之上 14

〔原文〕有客問

〔訓読〕客有りて問ふ

〔原文〕師表號曰用里曰巴且曰蓮華

〔訓読〕師の表號用里と曰く巴且と曰く蓮華と曰く

※用里…地名？人名？

〔原文〕奚崙意

〔訓読〕奚ぞ崙意ぞ

※崙…「会」と同じ？

〔原文〕答用里東里也

〔訓読〕用里は東里なりと答ふ

〔原文〕余先住燕山

〔訓読〕余先に燕山に住す

〔原文〕從國府見之丁東村

〔訓読〕國府より之を見れば東村に丁（あた）る

〔原文〕仍曰用里道者

〔訓読〕仍って用里道者といふ

〔原文〕用音録

〔訓読〕用は音録

〔原文〕原東方星也

〔訓読〕原と東方の星なり

〔原文〕故有用里先生

〔訓読〕故に用里先生有り

〔原文〕巴且芭蕉也

〔訓読〕巴且は芭蕉なり

〔原文〕古偈世間塵事亂如毛

〔訓読〕古偈に世間の塵事亂て毛の如し

〔原文〕不入空門何處消

〔訓読〕空門に入らざれば何れの處にか消せん

〔原文〕若待境縁除蕩去

〔訓読〕若し境縁を待って除蕩し去れば

〔原文〕古人何得喻芭蕉

〔訓読〕古人何ぞ芭蕉を喻うるを得んと

〔原文〕依偈掛巴且軒示泡影夢幻也

〔訓読〕偈に依て巴且軒を掛け泡影夢幻を示すなり

〔原文〕其蓮華遠慕西方

〔訓読〕其の蓮華遠く西方を慕う

〔原文〕是本於所歸

〔訓読〕是れ歸する所に本づく

〔原文〕請盡大地人扈從吾所歸

〔訓読〕請ふ、盡大の地の人吾が歸する所に扈從せよ

松嶋夜話 卷之上 15

〔原文〕孝行為萬行宗

〔訓読〕孝行は萬行の宗為り

〔原文〕故曰佛語以孝為宗

〔訓読〕故に曰く、佛語は孝を以て宗を為す

〔原文〕佛經以孝為戒

〔訓読〕佛經は孝を以て戒と為すと

〔原文〕仍誦弥勒勸孝偈云

〔訓読〕仍て弥勒勸孝偈を誦（よ）むに云う

〔原文〕堂上有佛二尊

〔訓読〕堂上に佛二尊有り

〔原文〕懊惱世人不識

〔訓読〕懊惱せる世人識らず

〔原文〕不用金彩粧成

〔訓読〕金彩粧成を用いる

〔原文〕亦非梅檀彫刻

〔訓読〕梅檀彫刻にもあらず

〔原文〕只看現在爺嬢便是釋迦弥勒

〔訓読〕只看よ、現在爺嬢便ち是れ釋迦弥勒なり

〔原文〕若能供養得他

〔訓読〕若し能く得他を供養すれば

※「得他」の訓読がよくわかりません

〔原文〕何用別作功德

〔訓読〕何ぞ用いん、別に功德を作すを

〔原文〕是故五祖造養母堂

〔訓読〕是の故に五祖養母堂を造り

〔原文〕六祖遺母白金

〔訓読〕六祖は母に白金を遺り

〔原文〕陳睦州織履

〔訓読〕陳睦州履を織り

※陳睦州：不明

〔原文〕朗法師荷之

〔訓読〕朗法師は之を荷ふ

※朗法師：不明

〔原文〕孝行盛哉

〔訓読〕孝行盛んなるかな

〔原文〕鑑古不遠力之

〔訓読〕鑑古遠からず之を力(つと)めよ

松嶋夜話 卷之上 16

〔原文〕近刊法界具觀

〔訓読〕近ごろ法界具觀を刊(ほ)る

〔原文〕出古今人助於叢林住持

〔訓読〕古今の人を出しめ、叢林の住持を助く

〔原文〕不可舍矣

〔訓読〕舍つべからず

〔原文〕三百來年如大鑑絶海星中太白

〔訓読〕三百來年、大鑑絶海の如きは星中の太白

※大鑑、絶海…人名？

〔原文〕又近代有紫雲直指二老

〔訓読〕又近代に紫雲、直指の二老有り

〔原文〕記得其語

〔訓読〕其の語を記得すれば

〔原文〕不督其名其名顯矣

〔訓読〕其の名を督せざれば其の名顯するや

〔原文〕人焉廋哉

〔訓読〕人焉ぞ廋(もとめ)んや

松嶋夜話 卷之上 17

〔原文〕本朝圓光大師曰

〔訓読〕本朝の圓光大師曰く

〔原文〕往生者一定則一定

〔訓読〕往生は一定すれば一定す

〔原文〕此意慈照宗主十門告誡與辨臨終三疑者同厥趣矣

〔訓読〕此の意慈照宗主の十門告誡、臨終の三疑を辨する者と厥の趣を同じくす

※慈照宗主：子元。一二世紀頃、生没年不明。中国宋代の僧侶。宋代浄土白蓮宗の創始者。万事休と号した。平江崑山（現・江蘇）にて茅氏の家生まれる。幼くして父母を失い、一九歳で出家。その後、廬山慧遠の遺風を慕い、人々に三宝帰依、五戒受持を勧め、称名念仏の五声によつて五戒が修得されるとして、広く浄縁を結ぶように勧めた。さらに、『大蔵経』の要旨に基づき『蓮宗晨朝懺儀』を編集し、仏を礼拝しながら懺悔し、安楽浄土への往生を祈念した。また、淀山湖畔に白蓮懺堂を創立し浄土念仏行を修めた。四六歳のとき、彼の教えが邪教とされ、本人も江州（現・江西省九江県）に配流されたが、そこでも当地の庶民らに教化した。紹興三年（一一三三）赦免され、高宗の詔に応じて講じ、「慈照宗主」の号を賜ったという。乾道二年（一一六六）三月二三日、八一歳で普建の家で亡くなったとされるが、定かではない。著作に『円融四土三觀選仏図』『浄土十門告誡』『仏念五声』『蓮宗晨朝懺儀』『西行集』『弥陀節要』『勸人発願偈』『法華百心』『証道歌』『風月集』等がある。

〔原文〕吁參禪念仏人大師一言觀垂于世可屬於心

〔訓読〕吁、參禪念仏の人、大師の一言、世に垂るるを觀て心に属す

松嶋夜話 卷之上 18

〔原文〕四明廣壽法因法師臨終留偈云

〔訓読〕四明廣壽の法因法師臨終に偈を留めて云ふ

※佛祖統紀五十四卷、(宋) 志磐撰、日本大正新修大藏經本 「法因住四明廣壽」

〔原文〕我與彌陀本無二

〔訓読〕我と彌陀本と無二

〔原文〕二與不二並皆離我今如此見彌陀

〔訓読〕二と不二並びに皆離れ、我今此の如く彌陀を見る

〔原文〕感應道交難思議

〔訓読〕感應道交難思議と

※『続群書類従』第二十八輯上釈家部善光寺縁起 「年来念願成就。面奉拝如来。感應道交難思

議。如何不堪喜悅。同此善光寺常住之僧三人一夜同蒙示現」

※感應道交…仏と人とが融和すること。人に応じた仏のはたらきかけと、それを感じとる人の心とが相交わり合致すること。

※難思議…阿弥陀仏の異称。『浄土和讃』 讃弥陀偈讃 「光雲無碍如虚空一切の有碍にさはりなし光沢かふらぬものぞなき難思議を帰命せよ」

2 教えが深遠で、思いはかることが困難であるということ

〔原文〕余曰如此念佛如此見佛如此信得及

〔訓読〕余曰く、此の如く念佛し、此の如く佛を見、此の如く信得するに及ばざば

〔原文〕臨終往生寔不可思議人也

〔訓読〕臨終往生、寔に不可思議の人なり

〔原文〕禪者不訊

〔訓読〕禪には訊(と)はず

〔原文〕吾儕念佛人夫斯思之

〔訓読〕吾儕念佛の人夫れ斯れ之を思へ

松嶋夜話 卷之上 19

〔原文〕昔有公儀休者

〔訓読〕昔公儀休なる者有り

※公儀休…中國戰國時期初年魯國名臣、姫姓、公儀氏、名休、又稱公儀子。

〔原文〕相魯食於家

〔訓読〕魯に相として家に食す

〔原文〕圃有葵菜不茹

〔訓読〕圃に葵菜有るも茹はず

〔原文〕愠而拔去

〔訓読〕愠（いか）って抜き去る

〔原文〕且言不欲奪園夫之利

〔訓読〕且つ言ふ、園夫の利を奪うを欲せずと

〔原文〕潔哉公儀休

〔訓読〕潔かな公儀休

〔原文〕非己之有一絲一毛從人不取

〔訓読〕己れが一絲一毛も有るにあらざれば、人に從ひて取らず

〔原文〕有雖凍餒不顧所潔哉

〔訓読〕凍餓すと雖も顧みざる所有る潔なるかな

松嶋夜話 卷之上 20

〔原文〕漫録載

〔訓読〕漫録に載す

※漫録…書名？

〔原文〕石田薫禪師曰

〔訓読〕石田薫禪師曰く

※石田法薫（せきでん ほうくん）一一七一年―一二四五年、中国・南宋。『続伝灯録』

〔原文〕既入佛門喫佛飯

〔訓読〕既に佛門に入って佛飯を喫し

〔原文〕發天門戸要人扶持

〔訓読〕天門の戸を發して人の扶持を要む

〔原文〕亦須是箇漢始得況稱長老

〔訓読〕亦須らく是れ箇の漢の始めて得べし

〔原文〕名既如此實當如何

〔訓読〕名既に此の如し、實に當に如何せん

〔原文〕具向上眼目得大機用

〔訓読〕向上の眼目を具へ大機用を得て

〔原文〕可以開鑑人天饒益后學

〔訓読〕以て人天を開鑑し、后學を饒益せば

〔原文〕方不孤負出世二字

〔訓読〕方に出世の二字を孤負せざる

〔原文〕就中下機言之

〔訓読〕中下の機に就きて之を言ふ

〔原文〕亦要識因果

〔訓読〕亦因果を識らんことを要せよ

〔原文〕勤香火朝廻禪誦不懈

〔訓読〕香火を勤めて、朝廻、禪誦すること懈らず

〔原文〕勦新補舊

〔訓読〕新を勦（はじ）め舊を補し

〔原文〕一切處運真實心方有少分相應

〔訓読〕一切の處、真實の心を運び、方に少分の相應有らん

〔原文〕不可坐方丈領見成勞者責人

〔訓読〕方丈に坐し見成を領して勞するは人を責め

※方丈…『維摩經』に説く維摩居士の一丈四方の部屋。転じて、一丈四方の広さ。

※見成…一切かくすところなく目前にあらわれていること。人が造作をしないで、自然にできあがっていること。『正法眼藏』現成公案「証究すみやかに現成すといへども、密有かならずしも見成にあらず、見成これ何必なり」

〔原文〕逸者歸己

〔訓読〕逸は己に歸す

〔原文〕瞬息之間頭白齒黃

〔訓読〕瞬息の間、頭白く齒は黃

〔原文〕前頭大有事在

〔訓読〕前頭、大いに事の在る有らんと

〔原文〕石田此語可謂

〔訓読〕石田の此の語謂ふべし

〔原文〕毒藥苦口利於病也

〔訓読〕毒藥口に苦うこと病に利あるなり

〔原文〕余曰漫録一節在昔日補昔日

〔訓読〕余曰く、漫録の一節、昔日有りて昔日を補す

〔原文〕在今日亦補今日

〔訓読〕今日在れば亦今日を補す

〔原文〕夫就中下人言之不可不知因果

〔訓読〕夫れ中下人に就きて之を言へば、因果を知らざるべからず

〔原文〕若能運真實心作事實頭

〔訓読〕若し能く真實心を運んで事を作すこと實頭ならば

※實頭…頭は助字。実は確実、真実の意。実直。律義。まじめ。真剣で心のこもっているようす。

〔原文〕諸天龍神冥加増益

〔訓読〕諸天龍神、冥加増益し

〔原文〕豈舎於卿

〔訓読〕豈に卿を舎(す)てんや

〔原文〕所謂見喚好長老保一生涯

〔訓読〕所謂好長老を喚ばれて、一生涯を保つ

松嶋夜話 卷之上 21

〔原文〕寶訓曰

〔訓読〕寶訓に曰く

※寶訓：書名？

〔原文〕昔簡堂機和尚與給事吳公書曰

〔訓読〕昔簡堂機和尚、給事吳公に與る書に曰く

※簡堂機和尚：台州国清寺の簡堂行機禪師（？——一八〇）のこと？

〔原文〕夫人常情罕能無感

〔訓読〕夫れ人の常情能く感無きこと罕（な）し

〔原文〕大抵蔽於所信阻於所疑忽於所輕溺於所愛

〔訓読〕大抵信ずる所に蔽（おお）はれ、疑う所に阻まれ、輕んずる所に忽かにされ、愛する所に溺る

〔原文〕信既偏則聽言不考其實

〔訓読〕信既に偏よれば則ち言を聽いて其の實を考えず

〔原文〕遂有過當之言

〔訓読〕遂に過當の言有り

〔原文〕遂有失實之聽

〔訓読〕遂に實を失う聽有り

〔原文〕輕其人則遺其可重之事

〔訓読〕其の重んず可きの事を遺す

〔原文〕愛其事則存其可棄之人

〔訓読〕其の事を愛すれば則ち其れ棄つるべき人を存す

〔原文〕斯皆苟縱私懷不稽道理

〔訓読〕斯れ皆苟も私懷を縱（ほしいまま）にして道理を稽へず

〔原文〕遂忘佛祖之道失叢林之心

〔訓読〕遂に佛祖の道を忘れ、叢林の心を失う

〔原文〕故常情之所輕乃聖賢之所重

〔訓読〕故に常情の輕する所は乃ち聖賢の重んずる所なり

〔原文〕古徳云謀遠者先驗其近

〔訓読〕古徳に云う、遠きを謀る者は先ず其の近くを驗（こころ？）み

〔原文〕務大者必謹於微

〔訓読〕大を務むる者は必ず微を謹しみ

〔原文〕將在博採而審用其中

〔訓読〕將に博く採って審らかに其の中を用いるに在り

〔原文〕固不在慕高而好異

〔訓読〕固に高きを慕いて異を好むに在らざる

〔原文〕蔽於所信溺於所愛人情常

〔訓読〕信する所に蔽はれ愛する所に溺れるは人情の常なり

〔原文〕吁主叢林者於此二者不施私懷

〔訓読〕吁、叢林に主たる者、此の二者に於いて、私懷を施さず

〔原文〕正當督理

〔訓読〕正當（まさ）に理を督す

〔原文〕諏取中有

〔訓読〕諏（はか）って中有を取って

〔原文〕行令治衆衆中和悦上下安閑

〔訓読〕令を行い衆を治めば、衆中和悦し、上下安閑す

〔原文〕叢林之興自焉

〔訓読〕叢林の興るは焉よりす

松嶋夜話 卷之上 22

〔原文〕本邦武族信玄勝頼父子齊護法華園

〔訓読〕本邦の武族信玄勝頼父子、齋しく華園を護法し

〔原文〕天正壬午三月織田信長挑戰信州

〔訓読〕天正壬午三月織田信長信州に挑戦す

〔原文〕勝頼卒天目山

〔訓読〕勝頼天目山に卒す

〔原文〕曳戸于掩于華園

〔訓読〕戸を曳きて華園に掩ふ

〔原文〕南化国師有一火云

〔訓読〕南化国師一火有りて云う

※南化国師：南化玄興。室町時代後期（戦国時代）から江戸時代初期にかけての臨済宗の僧。南化宗興とも。別号に虚白。快川紹喜の法嗣で妙心寺五十八世を務め、同時代の多くの戦国武将の帰依を受けた。後陽成天皇の帰依も厚く、定慧円明国師と諡された。

〔原文〕合世君臣父子家

〔訓読〕世君臣、父子の家を合し

〔原文〕不思去入阿蘭耶

〔訓読〕思はざりき去って阿蘭耶に入って

※阿蘭耶：阿頼耶のこと？

1. 数の単位のひとつ。一の二〇〇垓分の一。清浄の二〇分の一。仏教用語の「阿頼耶識（あらやしき）」から。

2. 仏教用語の、阿頼耶識（あらやしき）の略。人間存在の根底をなす意識の流れ。八識の中の第8識。

〔原文〕士峯四十由旬雪吹作長安一日花

〔訓読〕士峯四十、由旬の雪 吹きて長安一日の花と作る

〔原文〕時人唱之

〔訓読〕時人乏を唱ふ

〔原文〕然勝頼約年四十有奇由此由縁

〔訓読〕然して勝頼約年四十年奇有り、此の由の縁に由る

※この文よくわかりません。特に「約年」

松嶋夜話 卷之上 23

〔原文〕古謂能自愛者未必能成人

〔訓読〕古に謂う、能く自ら愛する者は必ずしも人を成さず

〔原文〕善自欺者又必罔人

〔訓読〕善く自ら欺く者は又必ず人を罔（あざ）むく

〔原文〕亦能自儉者不能周人

〔訓読〕亦自ら儉する者は人を周くせず

〔原文〕自忍者亦必害人

〔訓読〕自ら忍ぶ者は亦必ず人を害す

〔原文〕是言不高尚其意雖小以足勉天下人之人情私矣

〔訓読〕是の言高尚ならず、其の意小なりと雖も、以て天下の人の人情の私しを勉むるに足り

〔原文〕吁自愛不成

〔訓読〕吁、自ら愛して成らず

〔原文〕獨儉不惠欺而罔彼忍而傷人

〔訓読〕獨り儉して恵まず、欺きて彼を罔むき、忍びて人を傷（そこ）なう

〔原文〕天下人情人間私欲無所可咎

〔訓読〕天下の人情、人間の私欲、咎むべき所無し

松嶋夜話 卷之上 24

〔原文〕昔呉有延陵季子者過徐

〔訓読〕昔呉に延陵の季子という者有りて除に過ぎる

※季子：中国の春秋時代の呉の季札のこと。「延陵」は中国の呉の地名。

〔原文〕徐君心欲季子所佩寶劍

〔訓読〕徐君、心に季子が佩する所の寶劍を欲す

〔原文〕季子知之還頃徐君死矣

〔訓読〕季子之を知り、還る頃徐君死せり

〔原文〕季子不忍解劍掛彼塚下樹頭而歸去

〔訓読〕季子忍びず、劍を解（と）きて彼の塚の下の樹頭に掛けて帰り去る

〔原文〕復范仲淹子堯夫者往姑蘇

〔訓読〕復た范仲淹が子堯夫は姑蘇に往く

※范仲淹：端拱二年八月二十九日（989年10月1日）―皇祐四年五月二十日（1052年6月19日）中国の北宋の政治家・文人。字は希文。諡は文正。

范純仁：天聖五年（1027）―建中靖国元年（1101）字・堯夫、諡・忠宣、范仲淹の次子。

〔原文〕収麥舟五百斛還

〔訓読〕麥舟五百斛を収め還る

〔原文〕路次丹陽見石曼卿

〔訓読〕路丹陽に次り、石曼卿に見ゆ

※石曼卿：石延年、字は曼卿、安仁。994〔淳化五〕―1041〔慶曆二〕、中国北宋の文学者。原籍は幽州の人であったが、後に宋州宋城に遷った。真宗の時に三班奉職となり、光祿大理寺丞、太子中允、同判登聞鼓院等を歴任する。

〔原文〕卿曰舉三喪欲塋如何為

〔訓読〕卿曰く、三喪を舉て如何が為す

〔原文〕無物料堯夫憶其故舊與五百斛空手歸家

〔訓読〕物料無くこと、堯夫其の故舊を憶ひ、五百斛と與へて空手にして家に歸へる

〔原文〕又明王仁傑者

〔訓読〕又明に王仁傑という者有り

※王仁傑：不明

〔原文〕其家富財寶有善行以粟貸人不圖重息

〔訓読〕其の家財寶に富て善行有り、粟を以て人に貸し、息を重ねるを圖らず

〔原文〕年豐僅取十之二三

〔訓読〕年豐なれば十の二三を取る

〔原文〕稍飢但収其本大凶則皆已之

〔訓読〕稍や飢れば但だ其の本を収め、大いに凶すれば則ち皆之を已む

〔原文〕鄉里不知字咸稱王義士

〔訓読〕郷里字を知らず、咸な王義士と稱す

※王義士：人名？

〔原文〕又明末有左溪公

〔訓読〕又明の末に左溪公というもの有り

〔原文〕其義似義士活達者也

〔訓読〕其の義義士に似て、活達なる者なり

〔原文〕曾出母金千廩穀萬借邑人

〔訓読〕曾て母の金千、廩穀萬を出さしめ邑人に借す

〔原文〕時鄉邑饑饉

〔訓読〕時に郷邑饑饉し

〔原文〕左溪取其券盡焚去

〔訓読〕左溪其の券を取りて盡く焚き去る

〔原文〕蒼頭曹不知溪之慈意

〔訓読〕蒼頭の曹、溪の慈意を知らず

※蒼頭―昔、中国で兵卒は青い頭巾ずきんをかぶったところから、兵卒。雑兵。

2 しもべ。下男。

〔原文〕疑其債負而扃戸飼云う

〔訓読〕其の債を疑いて、負いて戸を扃め買らふと云う

〔原文〕溪之惠人加義士一著子

〔訓読〕溪の人を恵、義士に加われる一著子

※一著子：いちじやくす。一つの見識、主張。

〔原文〕余以如延陵子知其心而不自欺

〔訓読〕余以へらく、延陵子の如きは其の心を知りて自ら欺かず

〔原文〕履仁廉潔者也

〔訓読〕仁を履きて廉潔なる者なり

〔原文〕如堯夫怜貧成人

〔訓読〕堯夫の如きは貧を怜れんで人と成り

〔原文〕蹈義繩道者也

〔訓読〕義を蹈んで道を繩（ただ）す者なり

〔原文〕如仁傑左溪大度調鄉民寛仁

〔訓読〕仁傑、左溪が如きは大度にして、郷民を調はす寛仁なる者なり

〔原文〕都而謂之

〔訓読〕都て之を謂う

〔原文〕知天道而不左人理者也

〔訓読〕天道を知りて人理に左せず者なり

〔原文〕君子居之

〔訓読〕君子之に居る

〔原文〕何之不可

〔訓読〕何くにか之くか不可ならん

〔原文〕是苟君子乎耶

〔訓読〕是れ苟も君子ならんや

松嶋夜話 卷之上 25

〔原文〕僧祇曰

〔訓読〕僧祇に曰く

※僧祇…

《梵 Maṇḍasāghika の音写「摩訶僧祇」の略》仏滅の約100年後、僧団分裂によつて結成された進歩的な大衆部のこと。上座部に対する。

2 仏教を修行する出家の集団。

3 《「阿僧祇」の略》無数。無量。

〔原文〕佛告諸比丘

〔訓読〕佛諸の比丘に告ぐ

〔原文〕計此一粒米用百功

〔訓読〕此の一粒を計るに百功を用ゆ

〔原文〕及奪其妻子之分求福故施

〔訓読〕其の妻子の分を奪うに及び福を求むるが故に施す

〔原文〕云何棄之

〔訓読〕云何（いか）んぞ、之を棄てんと

〔原文〕余曰人施不舍可受

〔訓読〕余曰く、人が施し捨てずして受けるべし

〔原文〕受而為彼可報於福

〔訓読〕受けて彼が為に福を報（あた）ふべし

〔原文〕不與閻王債於飯錢

〔訓読〕與へざれば、閻王飯錢を債（かり）れん

松嶋夜話 卷之上 26

〔原文〕毘尼母曰

〔訓読〕毘尼母曰く

※毘尼母…『毘尼母（びにも）經』。内容は、經というよりも、『四分律』を依用して広釈したもので、律部に属するもの。

〔原文〕不坐禪誦經不啗佛法僧事

〔訓読〕坐禪誦經せず、佛法僧事を啗む

〔原文〕為施所墮

〔訓読〕施しの為に墮ちる所なり

〔原文〕又無三業

〔訓読〕又三業無し

〔原文〕知故而施俱為施墮

〔訓読〕知りて故に施すも俱に施しを為して墮せん

〔原文〕余觀之施人見施于人

〔訓読〕余之を觀れば、人に施し人に施さる

〔原文〕善知其有功無功又知有三業

〔訓読〕善く其の無功有功を知り、又三業有るを知り

〔原文〕受其施矣

〔訓読〕其の施しを受く

〔原文〕施者亦知之施之

〔訓読〕施す者も亦之を知り之を施す

〔原文〕施者受者共不知之

〔訓読〕施す者、受くる者共に之を知らず

〔原文〕互為信施可知被負墮

〔訓読〕互いに信施の為に負墮せらるを知るべし

松嶋夜話 卷之上 27

〔原文〕客話次曰

〔訓読〕客話次に曰く

〔原文〕郷談有阿誰誰何二義

〔訓読〕郷談に阿誰、誰何の二義有り

※阿誰…何びと。「三国志、蜀、統伝」(先主)統に謂ひて曰く、今日の會、樂しと謂ふべしと。統

曰く、人の國を伐ちて以てと爲すは、仁の兵に非ずと。先うて怒る。(略)く謂ひて曰く、

向の論、阿誰を失と爲すと。統對へて曰く、君臣に失すと。

〔原文〕三国志龐統傳史秦皇本紀注解云不知也

〔訓読〕三国志龐統傳史の秦皇本紀に注解すと云う、知らざるなり

松嶋夜話 卷之上 28

〔原文〕仙臺府下有白氏希水居士

〔訓読〕仙臺府下に白氏希水居士有り

※白氏希水居士…人名？

〔原文〕本貫巖城人

〔訓読〕本貫は巖城人

〔原文〕此季寶永丁亥九月三日念佛逝矣

〔訓読〕此の季、寶永丁亥九月三日、念佛して逝く

〔原文〕引火后収舍利數十顆

〔訓読〕引火の後、舍利數十顆を収め

〔原文〕其友定源者持来視予

〔訓読〕其の友定源なる者持し来りて予に視せしむ

〔原文〕色間青金燦照人目

〔訓読〕色青金を間して燦として人目を照らす

〔原文〕大如菽豆

〔訓読〕大さ菽豆の如く

〔原文〕仍匡彼平素

〔訓読〕仍て彼の平素を正し

〔原文〕天性直心一向念佛

〔訓読〕天性直心、一向念佛

〔原文〕以此大善外無餘惡

〔訓読〕此の大善を以て外に餘惡無し

〔原文〕古徳曰直心取菩提

〔訓読〕古徳曰く。直心菩提を取る

〔原文〕且聞一念之精積以萬年則舍利塞大千

〔訓読〕且つ聞く、一念の精積むに萬年以てすれば則ち舍利大千を克塞すと

〔原文〕亦聞舍利一善有常者咸有焉

〔訓読〕亦聞く、舍利一善常有る者は咸有りと

〔原文〕今彼有舍利

〔訓読〕今彼に舍利有り

〔原文〕理則固然

〔訓読〕理則ち固（かたくな）に然り

〔原文〕不足可疑

〔訓読〕疑うべきに足らず

〔原文〕然居士学問深浄土造書乙冊

〔訓読〕然して居士の学問浄土に深く、書乙冊を造る

※書乙冊：よくわかりません

〔原文〕先年来予檢之

〔訓読〕先年予に來さしめ之を檢せしむ

〔原文〕確殫浄土理

〔訓読〕確（かた）く浄土の理を殫（つ）く

〔原文〕今年七十一無疾化去

〔訓読〕今年七十一、疾無く化して去る

〔原文〕去日把筆書遺詩而瞑目云

〔訓読〕去る日筆を把って遺詩を書き瞑目して云う

〔原文〕称名念佛其功了

〔訓読〕称名念佛、其の功了る

〔原文〕投入蓮臺七寶池

〔訓読〕蓮臺の七寶池に投入し

※蓮臺：蓮華の形に作った仏像の台座。蓮華座。転じて、阿弥陀仏の浄土に往生する者が身を托するもの

〔原文〕即得往生安樂国

〔訓読〕即得し安樂国に往生す

〔原文〕無生法忍到哉時余閱此偈太嘆息

〔訓読〕無生法忍到れるかな時、余此の偈を閲し太（はなは）だ嘆息す

※無生法忍：忍は認知の意。生じることも滅することもないという真理を認識すること。また、その真理を悟った安らぎ。

松嶋夜話 卷之上 29

〔原文〕洞宗可山禪師平生荷法牧衆

〔訓読〕洞宗の可山禪師は平生法を荷い衆を牧す

※可山禪師：瑩山紹瑾のこと？諡号：佛慈禪師、弘徳圓明国師、常済大師。日本の鎌倉時代の曹洞宗の僧侶。瑩山派（總持寺派）の派祖で、教団では第四祖とする。一般には瑩山禪師と呼ばれ、教団内では日本曹洞宗開祖で祖の道元を高祖承陽大師、瑩山を太祖常済大師とする。

〔原文〕中興城下泰心

〔訓読〕城下の泰心を中興し

〔原文〕造伽藍置經藏

〔訓読〕伽藍を造り經藏を置く

〔原文〕此年九月説偈入寂

〔訓読〕此の年九月偈を説きて入寂す

〔原文〕茶毘則得舍利數百粒

〔訓読〕茶毘すれば則ち舍利數百粒を得

※茶毘：パーリ jhāpeti あるいはこれに近い俗語の音写。焼身・焚焼の意。死体を焼いて弔うこと。火葬。

〔原文〕士民多収之

〔訓読〕士民多く之を収め

〔原文〕前年湯治青根山

〔訓読〕前年青根山に湯治す

※青根山：不明

〔原文〕禪老先來時把手款話

〔訓読〕禪老先に來り、時時手を把り款話す

〔原文〕厥后来我山見顧問

〔訓読〕厥の後、我が山に來りて顧問せらる

〔原文〕今復聽計見偈

〔訓読〕今復た計を聽き偈を見

〔原文〕感涙勿蹇

〔訓読〕感涙蹇（や）むこと勿れ

〔原文〕茲記遺偈

〔訓読〕茲に遺偈を記す

〔原文〕豎規來十方破塵出大藏

〔訓読〕規を豎（た）て十方に來り、塵を破り大藏を出る

〔原文〕末后一句

〔訓読〕末后の一句

〔原文〕手亂脚忙咄

〔訓読〕手亂れ足忙しく咄す

〔原文〕曰世壽七十一

〔訓読〕曰く世壽七十一

松嶋夜話 卷之上 30

〔原文〕昔日在于燕山日偶讀黃大史頤軒詩

〔訓読〕昔日燕山に在る日、偶たま黃大史の頤軒詩を讀む

※黃大史・頤軒詩：黃庭堅の「頤軒詩六首」のこと

〔原文〕記取四篇眎來客者

〔訓読〕四篇を記し取り、來客の者に眎（み）す

〔原文〕有憶又言之

〔訓読〕憶うこと有りて之に言う

〔原文〕枢機要發遲

〔訓読〕枢機は發することの遲きを要す

〔原文〕飲食戒味厚

〔訓読〕飲食は味の厚を戒め

〔原文〕漁人溺於波君子溺於口

〔訓読〕漁人は波に溺れ、君子は口に溺ゆ

〔原文〕又涇流不濁渭

〔訓読〕又涇流渭を濁さず

〔原文〕種桃無李實

〔訓読〕桃を種して李の實無し

〔原文〕養心去塵縁光明生虛室

〔訓読〕心を養ひて塵縁を去くれば、光明虛室に生ず

〔原文〕又百戰百勝不如一忍

〔訓読〕又百戰百勝するも一忍には如かず

〔原文〕萬言萬當不如一默

〔訓読〕萬言萬當するも一默に如かず

〔原文〕無可揀擇眼界平

〔訓読〕揀擇すべき無ければ眼界平かなり

〔原文〕不藏秋毫心地直

〔訓読〕秋毫を藏されば、心地直す

〔原文〕又辱梨莫辱多欲

〔訓読〕又辱欲多くより辱しきは莫し

〔原文〕樂無樂無求

〔訓読〕樂しみは求め無きより樂しは無し

〔原文〕人生強學耳

〔訓読〕人生強めて學ぶのみ

〔原文〕萬古一東流

〔訓読〕萬古一たび東流し

〔原文〕太史曾參晦堂仁也

〔訓読〕太史曾て晦堂に參するに仁なり

※晦堂祖…宋で活動した臨済宗黄龍派の禅傑である。天聖三年（1025年）、南雄州保昌県で誕生した。俗姓は鄔氏。10歳の時、龍山寺慧全に就いて出家。雲峰文悦ならびに黄龍慧南に師事し、黄龍慧南の法を嗣いだ。師の寂した後その衣鉢を継いで黄龍山に住し、元符3年11月16日（1100年12月18日）に示寂した。諡号宝覺禅师。その法嗣は死心悟新、靈源惟清、三聖繼昌ら24名を数える。法嗣の一人黄庭堅により塔銘が記されている。

〔原文〕其言不啻

〔訓読〕其の言啻（ただ）ならず

松嶋夜話 卷之上 31

〔原文〕論衡曰手中無錢而之市決貨

〔訓読〕論衡に曰く、手中に錢無く市に之きて貨を決す

〔原文〕貨主必不與也

〔訓読〕貨主必ず與へずなり

〔原文〕夫胸中無學亦猶手中無錢也

〔訓読〕夫れ胸中學無くも亦た手中に錢無きがごとし

〔原文〕余曰盍翅無學人耳

〔訓読〕余曰く盍ぞ翅(ただ)無学の人のみ

〔原文〕今之知識亦如此

〔訓読〕今の知識も亦此の如し

〔原文〕己眼不明生死不殫

〔訓読〕己の眼明らかならず、生死殫(つ)さず

〔原文〕且出叢社入于街市

〔訓読〕且つ叢社に出て街市に入りて

〔原文〕唆他癡男女

〔訓読〕他の癡の男女を唆し

〔原文〕借之以大悟延之以入道

〔訓読〕之に借すに大悟を以てし、之を延(ひ)く入道を以てす

〔原文〕是那昇手中無錢之市與貨者也

〔訓読〕是れ那んぞ手中に錢無くして市に之きて貨を與ふ者に昇とならんや

〔原文〕欲己不極生死而決断他生死之路

〔訓読〕己の生死を極めず他の生死の路を決断せんと欲す

〔原文〕又不可得也悲哉

〔訓読〕又得べからず、悲しいかな」

松嶋夜話 卷之上 32

〔原文〕鹽鐵論曰内無其質而外學其文

〔訓読〕塩鐵論に曰く、内に其の質無く外に其の文を學ぶ

〔原文〕雖有賢師良友若畫脂鏤冰

〔訓読〕賢師、良友有ると雖も、畫の若し脂らに冰に鏤（ちりば）むるか

〔原文〕費日損功

〔訓読〕日を費やし功を損す

〔原文〕曰今日學者亦如之

〔訓読〕曰く今日學ぶ者は之の如し

〔原文〕整日所力外内走外

〔訓読〕整日力（つと）むる所、内を外にし外に走る

〔原文〕晋意於外學溺情於詩句

〔訓読〕意を外學に晋（す）み、情を詩句に溺れる

〔原文〕徒過尚年不眷非分

〔訓読〕徒だ尚年を過ぎ、非分を眷（かえり）みる

〔原文〕可惜許

〔訓読〕

※訓読がよくわかりません。原文に送り仮名などもなし。「許」が接尾辞？

〔原文〕一生成小人儒了也悲哉

〔訓読〕一生、小人儒と成り了るなり、悲しいかな

松嶋夜話 卷之上 33

〔原文〕五十年前元禄之初掛錫峩山

〔訓読〕五十年前、元禄の初め、錫を峩山に掛け

〔原文〕端午和獨照堂頭示衆曰

〔訓読〕端午、獨照堂頭の示衆を和して曰く

※獨照堂頭…「獨照」人名？

〔原文〕喝雷匊耳可怡悦

〔訓読〕喝雷、耳を匊して、怡悦すべし

〔原文〕法雨濕衣值艾節

〔訓読〕法雨衣を濕して艾節に値す

※艾節…端午の節供のこと。＊俳諧・俳諧新式〔1698〕五月の詞「端午の類（略）艾節類書
纂要二出」＊俳諧・俳諧四季部類〔1780〕五月「艾節重午」

〔原文〕畫蛛懸虎不相關

〔訓読〕蛛を畫き虎を懸けるは相ひ關わらず

〔原文〕這裏元來無妖孽

〔訓読〕這裏元來妖孽無し

〔原文〕傍僧云偈意不問畫蛛懸虎奚由

〔訓読〕傍僧云う、偈意問はず蛛を畫き虎を懸けるは奚にか由る

〔原文〕余曰此故不督

〔訓読〕余曰く此の故督さざる

〔原文〕只見大慧頌臨濟見三僧來豎起拂子之因縁

〔訓読〕只だ大慧臨濟三僧の來るを見て拂子を豎起するの因縁を頌するを見るに

〔原文〕偈曰五月五日午時書

〔訓読〕偈に曰く、五月五日午時に書く

〔原文〕赤口毒舌盡消除

〔訓読〕赤口毒舌盡く消除す

〔原文〕更饒

〔訓読〕更に饒し

〔原文〕急急如律令

〔訓読〕急急如律令

〔原文〕不須門上畫蜘蛛

〔訓読〕須ひず、門上蜘蛛を畫くを

松嶋夜話 卷之上 34

〔原文〕諸惡莫作衆善奉行

〔訓読〕諸惡作す莫れ、衆善奉行す

〔原文〕世曰七佛通戒偈七佛禁戒偈在另外

〔訓読〕世に曰く、七佛通戒の偈、七佛禁戒の偈は另（レイ）外に在り

〔原文〕此偈阿難報答迦葉問偈也

〔訓読〕此の偈は阿難迦葉の問に報答する偈なり

〔原文〕増一阿含一卷涅槃經之十四說前後

〔訓読〕増一阿含一卷、涅槃經の十四に前後を説く

〔原文〕偈曰諸惡莫作衆善奉行自淨其意

〔訓読〕偈に曰く、諸惡作す莫れ、衆善奉行し、自ら其の意を淨す

〔原文〕是諸佛教

〔訓読〕是れ諸佛の教かと

〔原文〕余曰此語三歲童子知誦之

〔訓読〕余曰く、此の語三歳の童子も之を誦するを知る

〔原文〕然百歲老人不奉行則輸于童子

〔訓読〕然れども百歳の老人、奉行せざるは、則ち童子より輸（おと）れり

〔原文〕只能此偈奉行

〔訓読〕只能く此の偈を奉行せよ

松嶋夜話 卷之上 35

〔原文〕念佛禪士至矣

〔訓読〕念佛の禪師至る

〔原文〕問古徳曰

〔訓読〕古徳を問ひて曰く

〔原文〕念滿十萬八千徧

〔訓読〕念じて十萬八千徧に満ちて

〔原文〕徧徧入於無相定

〔訓読〕徧徧として無相定に入り

〔原文〕無相定何耶

〔訓読〕無相定は何そや

〔原文〕余曰良也

〔訓読〕余曰く良なり

〔原文〕問之

〔訓読〕問ふこと

※之を問ふこと？

〔原文〕夫無相定者一念法界法界一念

〔訓読〕夫れ無相定なる者は一念法界、法界一念

〔原文〕離念無法界離法界無念

〔訓読〕念を離して法界無く、法を離して念無く

〔原文〕是故即土淨土即身彌陀

〔訓読〕是の故に即土は淨土、即身は彌陀

〔原文〕誰言十萬億土去此不遠

〔訓読〕誰が言う、十萬億土、此を去ること遠からず

〔原文〕何遠之有

〔訓読〕何ぞ遠いことかこれ有らん

〔原文〕迹而甚迹

〔訓読〕迹きこと甚だ迹し

〔原文〕只不思耳

〔訓読〕只思わざるのみ

〔原文〕如斯觀念念佛

〔訓読〕斯の如く觀念し佛を念じ

〔原文〕念念至無念心心至無心

〔訓読〕念念として無念に至り、心心として無心に至る

〔原文〕徧徧至無徧相相至無相

〔訓読〕徧徧として無徧に至り、相相として無相に至る

〔原文〕如斯觀念念佛不岐晝夜

〔訓読〕斯の如く觀念念佛して晝夜を岐たず

〔原文〕不移坐臥

〔訓読〕坐臥を移さず

〔原文〕不阻寤寐夫名之

〔訓読〕寤寐を阻またず、夫れ之を名けて

〔原文〕曰入無相定念佛之行者也

〔訓読〕無相定に入り念佛の行者と曰く

〔原文〕亦復曰之淨土之禪

〔訓読〕亦復之を淨土の禪と曰い

〔原文〕禪之淨土夫知之

〔訓読〕禪の淨土夫れこれを知る

松嶋夜話 卷之上 36

〔原文〕出家菩薩欲行菩薩之道

〔訓読〕出家の菩薩は菩薩の路を行はんと欲し

〔原文〕只單可知謙下徳

〔訓読〕只單に謙下の徳を知るべし

〔原文〕離謙之道者弗弟子

〔訓読〕謙の道を離れる者は佛弟子に弗ず

〔原文〕故常不經菩薩修此謙下

〔訓読〕故に常不輕菩薩は此の謙下を修め

〔原文〕法華會上蒙授記矣

〔訓読〕法華會上に授記を蒙る

〔原文〕仍記

〔訓読〕仍ち記す

〔原文〕文殊佛利經説曰

〔訓読〕文殊佛利經に説きて曰く

〔原文〕謙下得四種功德

〔訓読〕謙下に四種の功德を得

〔原文〕一遠離惡趣

〔訓読〕一は惡趣を遠離し

〔原文〕不受驢駝牛馬等諸傍生身

〔訓読〕驢駝牛馬等の諸の傍生の身を受けず

〔原文〕二不被輕毀

〔訓読〕二には輕壊せられず

〔原文〕三惡友怨敵不能凌突

〔訓読〕三つには惡友怨敵、凌突するあたはず

〔原文〕四常為人天恭敬

〔訓読〕四には人天の為に恭敬せらるゝと

〔原文〕謙下道不可離

〔訓読〕謙下の道離るべからず

〔原文〕故古徳曰

〔訓読〕故に古徳曰く

〔原文〕見一切衆生而仰之如佛如来

〔訓読〕一切衆生を見て之を仰ぐこと佛、如来の如し

〔原文〕吁謙之徳可離焉非出家菩薩行也

〔訓読〕吁、謙の徳焉を離るべしは、出家の菩薩の行いには非ず

〔原文〕慎之

〔訓読〕之を慎む

松嶋夜話 卷之上 37

〔原文〕府下有篤信者

〔訓読〕府下に篤信なる者有り

※篤信…不明

〔原文〕恒診九候醫余善疾

〔訓読〕恒に九候を診て、余が善く疾(や)むを醫(なお)す

〔原文〕公退日至矣

〔訓読〕公退く日至る

〔原文〕問方書中必記目子

〔訓読〕問ふ、書中の中に必ず目子を記す

〔原文〕有𠂔字何字

〔訓読〕𠂔の字有り、何の字ぞ

〔原文〕篤云𠂔錢之俗字

〔訓読〕篤云う、𠂔は錢の俗字なり

〔原文〕見之丹鉛總録俗字考中

〔訓読〕之を丹鉛總録俗字考中に見ゆ

※丹鉛總録…(明)楊慎著、陳愷校、出版者「芸暉閣」、出版年月、乾隆五九〔一七九四〕

〔原文〕然𠂔字和訓唱文目

〔訓読〕然して𠂔の字は和訓、文目と唱ふ

〔原文〕即鑿篇曰一𠂔一錢目也

〔訓読〕即ち鑿篇に一𠂔と曰ふは一錢目なり

〔原文〕余耳篤之語疏𠂔錢字

〔訓読〕余篤の語を耳(きき)て、𠂔錢の字を疏(わか)つ

〔原文〕余又訊和語𠂔曰料足

〔訓読〕余又訊く、和語の𠂔を料足と曰ふ

※料足…ぜに(錢)、あるいは「物事にかかる費用」の異称。中世用語。料は物の代物、足は歩く義。料脚・要脚ともいう。

〔原文〕訓曰阿之奚義

〔訓読〕訓に阿之（あし）と曰ふは奚の義ぞ

〔原文〕彼曰言阿之可取料足之足義訓

〔訓読〕彼れ曰く阿之と言うは料足の足の義訓を取るべし

〔原文〕然而曰足必原魯褒錢神論無足走者乎

〔訓読〕然して而も足と曰ふは、必ず魯褒の錢神論に足無く走るに原（もと）づく者か

※錢神論…中国、西晋の風刺文学。魯褒の著。司空公子、き母先生という架空の人物の問答を通じて、錢がこの世のなかで万能であることを皮肉な調子で述べたもの。

〔原文〕又訊和語曰麻呂何意

〔訓読〕又訊く、和語に麻呂と曰ふは何の意ぞ

〔原文〕彼曰可圓字之和訓

〔訓読〕彼れ曰く、圓の字の和訓なるべし

〔原文〕漢書太公為周立九府圓法

〔訓読〕漢書に太公周の為に九府の圓法を立つと

※圓法…古圓法、中国で発行された円形の銅貨のうち最初期のもの。通常、先秦のものを指すが、異なる定義を採用する文献もある。

〔原文〕李奇注圓則錢也

〔訓読〕李奇の注に圓は則ち錢なり

〔原文〕是可由之云

〔訓読〕是れ之に由るべしと云う

〔原文〕篤之言可乎耶

〔訓読〕篤の言可なるかな

松嶋夜話 卷之上 38

〔原文〕有客問余曰

〔訓読〕客有り余に問うて曰く

〔原文〕世有信口言而人不乖其語信意為事他不碍其故者

〔訓読〕世に口を信じ言ひて人其の語に乖かず、意を信じ事を為し他其の故に碍（さえぎ）らざる者有り

〔原文〕今人見之

〔訓読〕今の人之を見る

〔原文〕是有心量有才量為之如何

〔訓読〕是れ心量有り才量有りて為するが如何（いかん）

※「為之」の「之」は読む？

〔原文〕余曰是不于心量才量只有福量為者也

〔訓読〕余曰く、是れ心量才量に于（お）からず、只だ福量有りて為する者なり

〔原文〕夫不知之強責其人則猶聾者咎他聲不及己耳

〔訓読〕夫れ、之を知らず、強ひて其の人を責むるは、聾者の他の聲の己の耳に及ばざるを咎むるがごとし

〔原文〕咎者愚也

〔訓読〕咎むる者は愚かなり

〔原文〕不可責以福量為者愚也

〔訓読〕福量を以て為する者が愚かさを責（と）がむべからざるなり

松嶋夜話 卷之上 39

〔原文〕又問心量與才量優劣有也

〔訓読〕又た問う、心量と才量、優劣有りや

〔原文〕心量原徳者才量由智者

〔訓読〕心量は徳に原づく者、才量は智に由る者

〔原文〕然徳者仁之本智者義之端也

〔訓読〕然して徳は仁の本、智は義の端なり

〔原文〕先智而后徳則仁之徑敗矣

〔訓読〕智を先にし徳を後にすれば、則ち仁の徑敗す

〔原文〕専徳弭智則義之道欽

〔訓読〕徳を専らにし智を弭（ゆる？）へるときは、則ち義の道欽く

〔原文〕心量才量仁義備者曰君子曰聖賢

〔訓読〕心量才量、仁義備わる者、君子と曰く、聖賢と曰ふ

〔原文〕欠此二者則常人才量也

〔訓読〕此の二者を欠く者は、則ち常人の才量なり

〔原文〕吁才量不足觀孔丘以言

〔訓読〕吁、才量觀るに足らず、孔丘以て言う

〔原文〕有周公之才之美

〔訓読〕周公の才の美有れども

〔原文〕使驕且吝其餘不足觀也已

〔訓読〕驕り且つ吝ならしめば、其餘觀するに足らざるのみ

〔原文〕吁才量福量之叵信也如之

〔訓読〕吁、才量福量の信じ叵（がた）きこと之の如し

松嶋夜話 卷之上 40

〔原文〕五十年前在播州龍門曰

〔訓読〕五十年前、播州の龍門に在し曰く

※龍門…龍門寺。臨濟宗妙心寺派の禅刹で、「不生禅」を説かれた盤珪国師の根本道場として寛文元年（1661）に創建され、当時の遺構をそのままに350年の法灯を持続している。開創に当たり、京極高豊侯（丸亀藩主）は、方六十間境内用地を寄付され、この地の富豪、佐々木道弥、正意、道珠の兄弟は巨資を投じて創建に尽力した。又、民衆も献身的な奉仕に依り土木の役に当たって造営に尽力する。次いで延宝元年（1673）大方丈、禅堂寺が完成して一層壮麗を加えて播州随一の大叢林となる。

〔原文〕一タ濃州江州兩僧同會

〔訓読〕一タ濃州江州の兩僧同會す

〔原文〕濃州僧曰寛永寛文間有一老宿

〔訓読〕濃州の僧曰く、寛永寛文の間、一老宿有り

〔原文〕往干關山山作詩

〔訓読〕關山の山に往干して詩を作る

※干關…地名？

干…干の間違い？「往干」で動詞？

〔原文〕此詩動一時曰

〔訓読〕此の詩一時を動かす、曰く

〔原文〕投宿夜来相見了

〔訓読〕宿に投じて夜来相見了す

〔原文〕月明本有自圓成

〔訓読〕月明自ら圓成有り

〔原文〕到今猶聽關山曲

〔訓読〕今に至りて猶お關山の曲を聴く

〔原文〕日日松風萬嶽聲

〔訓読〕日日の松風、萬嶽の聲

〔原文〕時得州僧曰所我耳與公之所記同坑有異土

〔訓読〕時に江州の僧に曰く、我が耳く所と公の記す所と同坑に異土有り

〔原文〕同坐者曰子之記如何

〔訓読〕同じ坐る者曰く、子の記すは如何

〔原文〕夜濬雲晴相見了

〔訓読〕夜濬（ふか）く雲晴れ、相い見了す

〔原文〕當空明月自圓成

〔訓読〕空に當る明月自ら圓成す

〔原文〕通宵堪听關山曲萬嶽松風樹樹聲

〔訓読〕通宵、關山の曲を听くに堪へ、萬嶽の松風、樹樹の聲

〔原文〕同坐者曰然則何證

〔訓読〕同じ坐する者曰く、然らば則ち何ぞ證せん

〔原文〕有一壁定坐老僧曰

〔訓読〕一壁に定坐する老僧有りて曰く

〔原文〕我從江僧之後詩而見其眼目矣

〔訓読〕我江僧の後詩に従ひて其の眼目を見て

〔原文〕坐者僉從之

〔訓読〕坐する者僉之に従ふ

〔原文〕工夫參禪者見處可自是別

〔訓読〕工夫參禪の者見る處、自らはれ別なるべし

〔原文〕雖此定僧曰不會學於詩而能點出此詩

〔訓読〕此の定僧曾て詩を学ばざると而も能く詩を點出す

〔原文〕看其活法苟詩意有哉學者著眼

〔訓読〕其の活法を看て、苟（まこと）に詩意有るべし。學者目を著す

松嶋夜話 卷之上 41

〔原文〕經曰千日學慧不如一日學道

〔訓読〕經に曰く千日の學慧は一日の學道に如かず

〔原文〕余曰五千餘卷無他

〔訓読〕余曰く五千餘卷他無し

〔原文〕只爲學道也

〔訓読〕只だ學道をなすなり

〔原文〕若謂爲他事説佛之妄語也

〔訓読〕若し他事の爲に説くと謂うは、佛の妄語なり

〔原文〕人天師豈有兩舌也

〔訓読〕人天師豈に兩舌有るなり

※人天師：天人師のこと？仏が如から来たという意味で如来とよばれ、供養されるべき尊い者の意味では応供ともよばれる。このほかに正遍知、明行足、善逝、世間解、無上士、調御丈夫、天人師、世尊ともよばれ、仏の十号といわれる。

〔原文〕請著眼學一日學道矣

〔訓読〕請う目を著し一日の學道を学べ

松嶋夜話 卷之上 42

〔原文〕后漢有魏昭童子師於酈泰先生

〔訓読〕后漢に魏昭童子有り、酈泰先生を師とす

※〔資治通鑑、漢紀四十七〕（桓帝、延熹七年）陳國の童子魏昭、（郭）泰に請ひて曰く、經師には
遇ひ易きも、人師には遭ひ難し。

酈泰：不明

〔原文〕供給洒掃

〔訓読〕供給洒掃す

〔原文〕泰一日命昭造粥

〔訓読〕泰一日昭を命じて粥を造る

〔原文〕粥熱進之

〔訓読〕粥熱くして之を進む

〔原文〕泰呵吒之曰

〔訓読〕泰之を呵吒して曰く

〔原文〕為長者作粥

〔訓読〕長者の為に粥を作る

〔原文〕不加可意敬謂不可飡

〔訓読〕意敬を加えざれば飡ふべからずと謂う

〔原文〕把盃擲地

〔訓読〕盃を把って地に擲つ

〔原文〕昭又改作晉之

〔訓読〕昭又た改作し之を晉む

〔原文〕泰亦吒之

〔訓読〕泰亦た之を吒す

〔原文〕如是者三

〔訓読〕是の如くする者三

〔原文〕昭顔貌不變恭敬若恒

〔訓読〕昭の顔貌變らず、恭敬恒の若し

〔原文〕吾初看子之面而今而後知子之心

〔訓読〕吾れ初めて子の面を見て而今而後、子の心を知る

〔原文〕了善之

〔訓読〕了(つい)に之を善す

〔原文〕余曰弟子盡禮當如此得

〔訓読〕余曰く弟子禮を盡す、此の如く得べし

〔原文〕張良圯上撮履

〔訓読〕張良圯上にの履を撮る

〔原文〕此是意也

〔訓読〕此の是意なり

〔原文〕公明宣三年學曾子也學曾子之操履

〔訓読〕公明宣三年曾子に学ぶは曾子の操履を學ぶなり

〔原文〕非學於學問曾子也

〔訓読〕學問を曾子に學ばざる

〔原文〕余偶為童行系此調曰

〔訓読〕余偶ま童行の為に此の調を系げて曰く

※童行：禪宗で、出家を志して寺に入り、五戒を守ってはいるが、まだ正式の僧にはなっていない
準備段階の少年。童子または童子行者ともいう。

〔原文〕鄒泰擲盞矯魏昭石公墮履試張良

〔訓読〕鄒泰盞を擲げ魏昭を矯し、石公履を墮し張良を試む

〔原文〕公明不讀學曾子半偈投身今則亡

〔訓読〕公明讀まず曾子を學ぶ、半偈に身を投げ今則ち亡ぶ

松嶋夜話 卷之上 43

〔原文〕余侍於先師松島日有榮椿侍者

〔訓読〕余先師に松島に侍する日、榮椿侍なる者有り

※榮椿侍…不明

〔原文〕油井氏子也

〔訓読〕油井氏の子なり

〔原文〕生質健強尋常无疚

〔訓読〕生質健強にして、尋常疚無し

〔原文〕偶染風邪不日而卒塋于松崎

〔訓読〕偶ま風邪に染まって日ならずして卒し、松崎に塋る

〔原文〕祖因兄過墳塔麤言曰

〔訓読〕祖因兄墳塔を過り、麤言して曰く

※祖因兄…？

〔原文〕汝不長卒出生何益

〔訓読〕汝長せずして卒す、何の益あらん

〔原文〕歸院其夕椿夢中来責因子曰

〔訓読〕院に歸する其の夕、椿の夢中に来て因子を責めて曰く

〔原文〕兄爲我發鹿言

〔訓読〕兄我が為に鹿言を發し

〔原文〕有意恨揚於手一摑胸宇

〔訓読〕意恨有りて、手を揚げ胸宇を一摑す

〔原文〕又重言我存生書法華

〔訓読〕又た重ねて言う、我存生に法華を書す

〔原文〕全部不詹

〔訓読〕全部詹(た)らず

〔原文〕諸兄弟繕寫追荐

〔訓読〕諸の兄弟繕寫し追荐す

〔原文〕満足我願無殘於意

〔訓読〕我が願いを満足させれば、意を残すこと無し

〔原文〕言了放手去矣

〔訓読〕言い了りて手を放つ去る

〔原文〕因子梦覺胸中熱沸

〔訓読〕因子梦覺め、胸中熱沸たり

〔原文〕吐血測盞時以梦白先師

〔訓読〕血を吐いて盞を測す時、梦を以て先師に白す

〔原文〕先師督其法華得方丈承塵之中

〔訓読〕先師其の法華を督し、方丈の承塵の中に得たり

〔原文〕終命子弟繕寫

〔訓読〕終に子弟に命じて繕寫す

〔原文〕鳩合山衆圓通懺摩法華轉讀靈寢追悼

〔訓読〕山に合す衆を鳩め、圓通懺摩し、法華を轉讀し、靈寢追悼す

※合山：寺中のみんな。寺全体。蔭涼軒日録「長祿二年〔1458〕五月二七日」当寺合山歎喜之由披露之」

〔原文〕因子之疾平復如本

〔訓読〕因子の疾平復すること本の如し

〔原文〕余此事現前見聞

〔訓読〕余此の事

〔原文〕人之精靈憑物為崇

〔訓読〕人の精靈物に憑いて崇りを為す

〔原文〕今猶古矣可亡乎也

〔訓読〕今猶お古や、亡びなんとすなり

松嶋夜話 卷之上 44

〔原文〕扁鵲曰

〔訓読〕扁鵲曰く

〔原文〕弱生之幹也

〔訓読〕弱は生の幹なり

〔原文〕強死之徒也

〔訓読〕強は死の徒なり

〔原文〕余曰天生柔弱者能安四大而慎平生

〔訓読〕余曰く天生柔弱なる者は能く四大を安んじ平生を謹めば

〔原文〕故必保壽命

〔訓読〕故に必ず壽命を保つ

〔原文〕形質剛強者弛七情而縱情欲

〔訓読〕形質剛強なる者は七情に弛み情欲を縱にす

〔原文〕故〔叵〕終天年

〔訓読〕故に天年を終へ〔叵〕（かた）し

〔原文〕是人間之恒也

〔訓読〕是れ人間の恒なり

〔原文〕吁不慎乎也夫不思之

〔訓読〕吁、慎まざるや、夫れ之を思はざるや

〔原文〕還遭扁鵲之科矣

〔訓読〕還って扁鵲の科に遭う

松嶋夜話 卷之上 45

〔原文〕一日閑道者元公禪師之乙套併序

〔訓読〕一日道者の元公禪師の乙套併に序を閲す

※元公禪師…？

〔原文〕蓋以五百釜嬾之无質

〔訓読〕蓋し五百の釜を以て之を嬾すれば質無し

〔原文〕道者者天下一人之道者也

〔訓読〕道者は天下の一人の道者なり

〔原文〕焉教之與他人闘矣

〔訓読〕焉んぞ之を他人と闘かはしめんや

〔原文〕然而看其言端不失旨趣

〔訓読〕然れども其の言端を見るに、旨趣を失はず

〔原文〕吁正知三昧從非因天啓者焉得之

〔訓読〕吁、正知三昧、天に因りて啓く者にあらざる從り、焉ぞ之を得んや

〔原文〕苟可貴重矣

〔訓読〕苟(まこと)に貴重すべし

〔原文〕古人所謂靜心之熟

〔訓読〕古人の所謂る靜心の熟せる

〔原文〕發為偈贊

〔訓読〕偈贊を發為す

〔原文〕自然道合者乎也

〔訓読〕自然に道と合うという者か

〔原文〕余亦於道者以之

〔訓読〕余亦道者に於いて之を以(い)ふ

松嶋夜話 卷之上 46

〔原文〕僧糧錢用僧糧造坐錢造坐料藏經錢用藏料

〔訓読〕僧糧錢は僧糧に用い、造坐錢は坐料に用い、經を藏する錢は藏料に用ふ

〔原文〕必不可互用

〔訓読〕必ず互用すべからず

〔原文〕若有餘錢作佛前供器

〔訓読〕若し餘錢有れば佛前の供器を作る

〔原文〕亦津中許之矣

〔訓読〕亦た津の中に之を許す

〔原文〕互用而作福事已無開許文

〔訓読〕互用し福事を作ることは、開許の文無し

※開許：許す、許可する

〔原文〕犯之則有犯僧錢而作僧堂受火枷之報

〔訓読〕之を犯せば則ち僧錢を犯し僧堂を作り火枷を受くるの報い有れば

〔原文〕後有折僧堂數齋僧火枷漸減之明徴

〔訓読〕後、僧堂を折（ひら）いて數しば僧を齋しめ、火枷漸く減するの明徴有り

〔原文〕吁先賢明教燦也

〔訓読〕吁、先賢の明教燦（あざや）かなり

松嶋夜話 卷之上 47

〔原文〕客士問亡靈丁三日之設齋何義理

〔訓読〕客士問ふ、亡靈三日に丁りての設齋、何の義理ぞ

〔原文〕答此追薦謂之見王齋

〔訓読〕答ふ、此の追薦、之を見王齋と謂う

※追薦…仏語。死者の冥福を祈って善根を修めること。特に死者の年忌などに仏事供養をいとなむこと。追福。追修。

※見王齋…仏語。人の死後三日に僧を請じて齋（とき）を設けること。俗に「しあげ」という。この齋によって死者は閻魔王にまみえて罪を免れるという。

〔原文〕冥報記舉北齊梁氏事曰

〔訓読〕冥報記に北齊の梁氏の事を舉げて曰く

※『冥報記』…中国唐代の唐臨撰述の仏教説話、靈驗譚を集めた説話集である。

〔原文〕此人死經三日家之妻子佛僧供養

〔訓読〕此の人死して三日を経て、妻子佛僧供養す

〔原文〕依此功德獄中鐵梁火枷盡折免壓脂罪曰

〔訓読〕此の功德に依り、獄中の鐵梁火枷盡く折れ油を壓する罪を免れ曰く

〔原文〕觀之三日當齋不可闕矣矧乎

〔訓読〕之を觀れば三日の當齋闕べからず、矧（は）ぐや

〔原文〕累七七之設齋欠之乎也

〔訓読〕累の七七の設齋之を欠くや

〔原文〕中陰經曰中有極命於七日

〔訓読〕中陰經に曰く、中有は命を七日に極め

※中陰經…一、人の死後、初七日から四九日まで七日ごとに読経、供養すること。二、仏書。二卷。後秦の竺仏念訳。仏が中陰に入って大光明を放ち、一切中陰の衆生を集めて大乘の法を説いたもの。

※中有…仏語。衆生が死んでから次の縁を得るまでの間。四有の一つ。無限に生死を繰り返す生存の状態を四つに分け、衆生の生を受ける瞬間を生有、死の刹那を死有、生有と死有の中間を本有とし、死後次の生有までを中有とする。中陰。

〔原文〕故中陰之間作諸善根衆供養

〔訓読〕故に中陰の間は、諸の善根、衆くの供養を作して

〔原文〕要令中陰中不轉展生惡道之義也

〔訓読〕中陰中に轉展として惡道に生じさせざしめんと要するの義なり

〔原文〕知父母家祖者不思乎哉

〔訓読〕父母の家の祖を知る者は思はざらんかな

松嶋夜話 卷之上 47

〔原文〕智論曰

〔訓読〕智論に曰く

〔原文〕常一心破一切處心不著

〔訓読〕常に一心なれば一切の處を破り、心著せず

〔原文〕入不動三昧

〔訓読〕不動三昧に入る

〔原文〕夫人不運三昧者無事不辨何故

〔訓読〕夫れ不運三昧に入る者、事として辨せずということ無しは何の故ぞ

〔原文〕常一心故破一切處故心不著者故

〔訓読〕常に一心なるか故に、一切の處を破るが故に、心物に著せざるが故に

〔原文〕是故曰制心一處矣

〔訓読〕是れ故、心を一處に制すと曰く

〔原文〕古人復曰暫時離念如同死人

〔訓読〕古人復た曰く、暫時念を離れて死人と如同し、

〔原文〕是為求常一心也

〔訓読〕是れ常一心を求むるが為なり

松嶋夜話 卷之上 48

〔原文〕為人教誨強勿面折

〔訓読〕人の教誨を為す。強（あなが）ち面折すること勿れ

〔原文〕有面折發愠者

〔訓読〕面折せられて愠りを發する者有り

〔原文〕昔陳忠肅公與人議論

〔訓読〕昔陳忠肅公、人の與（た）めに議論す

※陳瓘（ちんかん、嘉祐五年（1060）－宣和六年（1125））…中国・北宋後期の政治家。字は瑩中、諡は忠肅。南劍州沙県の人。

〔原文〕未嘗面折惟微示意警之

〔訓読〕未だ嘗て面折せずして、惟だ微しく意を示して之を警しむ

〔原文〕人多退省愧服矣

〔訓読〕人多く退省、愧服す

〔原文〕吁以宋朝美非獎今世也

〔訓読〕吁、宋朝の美を以て今の世を獎むるに非ず

松嶋夜話 卷之上 50

〔原文〕昔至正中有張旺者

〔訓読〕昔、至正中に張旺なる者有り

※至正…中国・元の順帝の治世で用いられた元号。1341年－1370年。1368年に元が大都を追われた後も、北元の元号として使用された。

〔原文〕因事愧于田父而恨不釋

〔訓読〕異に因りて田父に愧かしめられ、恨みて釋さず

〔原文〕其夜欲燒彼屋宅且進于路

〔訓読〕其の夜、彼の屋宅を焼かんと欲し、且つ路に進む

〔原文〕友人吳碧石竊見張之往

〔訓読〕友人吳碧石竊かに張の往くを見て

〔原文〕殤鬼百數踵其後

〔訓読〕殤鬼百數、其の後を踵(つぐ)

〔原文〕又見張之歸

〔訓読〕又た張が歸するを見る

〔原文〕則却青衣童子二人前導

〔訓読〕則ち却つて青衣の童子二人、前導す

〔原文〕吳氏詰旦往告其事於張

〔訓読〕吳氏、詰旦に往きて、其の事を張に告ぐ

〔原文〕張感悟曰

〔訓読〕張感悟して曰く

〔原文〕余初往時欲燒其家而遂所憤

〔訓読〕余、初めて往く時、其の家を焼いて憤を遂げんと欲す

〔原文〕登時翻轉惡心

〔訓読〕登時(すなわち)惡心を翻轉して

※登時…〔副詞〕「登」は「スナハチ(名義抄)」の意。漢語。直ちに。すぐさま。即座に。

例 「水路より県家に向かひて去く。登時、開元寺の僧元昱来たり。筆言して情を通ず」〔入唐求法巡礼行記・一〕例 「座主登時参入」〔小右記・永延二・一〇・二八〕

〔原文〕外冤報而棄火歸矣

〔訓読〕冤報を外れて火を棄て歸ると

〔原文〕殤鬼青衣夫所之致乎

〔訓読〕殤鬼青衣、夫れこれの致る所ならん

〔原文〕吁觀之一念之頃可不謹哉

〔訓読〕吁、之を觀れば、一念の頃、謹みざるべけんや

〔原文〕終捨俗出家

〔訓読〕終いに俗を捨て家を出

〔原文〕從是咸稱張道人曰

〔訓読〕是れより咸な張道人と稱して曰く

〔原文〕蓋殤鬼相繞惡其暴惡

〔訓読〕蓋し、殤鬼相い繞（めぐ）るは、その暴惡を惡むなり

〔原文〕二子前導美翻其惡念

〔訓読〕二子の前導、その惡念を翻するを美しとするなり

〔原文〕曰昔宋景公一時出至德之一言

〔訓読〕曰く、昔宋の景公一時、至徳の一言をい出す

〔原文〕退熒惑星三舍

〔訓読〕熒惑星を退きて三舍す

〔原文〕又大曆中喬龜年者不孝之一言聞於上天

〔訓読〕又大曆中の喬龜年という者の不孝の一言、上天に聞く

〔原文〕忽神人出而呵責曰

〔訓読〕忽ち神人出でて呵責して曰く

〔原文〕今日一言罪已深矣

〔訓読〕今日の一言已に深し

〔原文〕夫觀之發一言于茲

〔訓読〕夫れ之を觀れば、一言を茲に發す

〔原文〕聞上天天道豈遠乎也賁也君子

〔訓読〕上天を聞ふ、天道豈に遠からんや、賁しまんや、君子

松嶋夜話 卷之上 51

〔原文〕余在瑞巖

〔訓読〕余瑞巖に在り

〔原文〕拈成道忌香曰

〔訓読〕成道忌の香を拈(つま)みて曰く

〔原文〕入山不欠羈提行

〔訓読〕山に入りて、羈提の行を欠かず

※羈提…シャンティ(サンスクリット: *prati* (santi), サンスクリット語発音 [ca:nti]、ヒンディー語: *priti* (sam)、英語: Shanti) の、本来の意味は憎悪の感情のない友愛に満たされた状態。

〔原文〕雪苦六年雪滿肩

〔訓読〕雪苦六年、雪肩に滿つ

〔原文〕八十種好雖圓具

〔訓読〕八十種好、圓具すと雖も

※八十種好…仏の身体に備わる八十の付随的な特徴。三十二相が顕著であるのに対し、微細で見分けにくい特徴。

〔原文〕被為妖星雙眼穿傍僧曰

〔訓読〕妖星の為に雙眼傍僧を穿たれる

〔原文〕八十音聲不叶如何

〔訓読〕八十の音聲叶わざるは如何

〔原文〕余曰十若為平聲則有謚句二韻

〔訓読〕余曰く、十若し平聲と為すは、則ち謚句の二韻有り

※謚句…よくわかりません

〔原文〕楊升庵曰唐詩十字有作平音者

〔訓読〕楊升庵曰く、唐詩に十字平音と作す者有り

※楊升庵…楊慎(1488-1559)中国、明の著述家。字は用修、升庵と号す。四川新都の人。宰相楊廷和の子。正徳6年(1511)の進士第一。翰林院編修・經筵講官となったが、大礼の議において世宗(嘉靖帝)にさからったため、雲南に流され、生涯許されなかった。この政治的失脚を活用して、彼はあらゆる書物を読破し、著述の多さは明代随一といわれるが、好んで異を唱え、

奇をてらうため、その博大な学問は、創見に富むにもかかわらず、ずさんで精緻に欠ける点も併せもっている。著に《楊升庵集》《丹鉛綰錄》など、数百巻がある。

〔原文〕如三十六所春宮殿一一香風透管弦

〔訓読〕三十六所の春宮殿、一一の香風管弦を透るが如し

※升菴詩話十二卷補遺二卷、(明)楊慎撰、「十字平音」唐詩三十六所春宮殿一一香風透管絃又綠波東西南北水紅闌三百九十橋又春城三百九十橋夾岸朱樓隔柳條又煩君一日殷勤意示我十年感遇詩陳郁云十音當爲謚也謂之長安語音律詩不如此則不叶矣

〔原文〕又春風三百九十橋夾岸朱樓隔柳條

〔訓読〕又春風三百九十橋、岸を夾み朱樓柳條を隔つ

〔原文〕又煩君一日慇懃意示我十年感遇詩

〔訓読〕又君を煩す一日慇懃の意、我に示す十年感遇の詩

〔原文〕陳郁曰十音當爲謚也

〔訓読〕陳郁曰く、十音當に謚と為すべし

※陳郁…宋、崇仁の人。字は仲文。號は藏一。官は理宗の時、東宮講堂掌書。著に藏一話腴がある。四庫提要には臨川の人に作る。

〔原文〕謂之長安語音

〔訓読〕之を長安の語音と謂ふ

〔原文〕律詩不如此則不叶矣

〔訓読〕律詩此の如くならずば、則ち叶わず

〔原文〕又十詳倫切音句

〔訓読〕又十詳倫切音句

※この句、よくわかりません。書名？

〔原文〕顧氏説略唐詩三十六所臨春殿

〔訓読〕顧氏の説略の唐詩に三十六所春殿に臨み

※説略…書名。三十卷。明、顧起元撰。其の書説部の書を摘録して分門編次たもの。但く言を纂して事を記してゐない。〔四庫提要、子、類書類〕。

〔原文〕白樂天赤蘭三百九十橋

〔訓読〕白樂天、赤蘭三百九十橋

※白居易、正月三日間行詩「綠浪東西南北水、紅欄三百九十橋」

〔原文〕劉禹錫示我十年感遇詩

〔訓読〕劉禹錫、我に示す十年感遇の詩

〔原文〕陳郁曰十當音為謚非也

〔訓読〕陳郁曰く、十當に音謚と為るは非なり

〔原文〕十當音旬

〔訓読〕十、當に音旬なるべし、

〔原文〕古人以十日為旬故如此讀云云

〔訓読〕古人十日を以て旬と為し、故に此の如く讀む、云云

〔原文〕余臨時作拗體偈語

〔訓読〕余時に臨んで拗體の偈語を作る

※拗體：漢詩の律詩や絶句で、一定の平仄のきまりに合わないところのあるもの。

〔原文〕適假八十平聲不為莫判矣

〔訓読〕適たま八十の平聲を假りて、判はり莫と為ず

松嶋夜話 卷之上 52

〔原文〕肥后州熊本僧澄公來于山

〔訓読〕肥后熊本の僧澄公山に来る

※澄禪?…1631-1680 江戸時代前期の僧。慶長10年生まれ。真言宗。京都智積院の運敵に師事。悉曇(したん)学を研究。梵字の書にすぐれ、書は澄禪流といわれた。仏画や山水画もよくした。延宝8年(1690)12月死去。88歳。肥後出身。俗姓は菱刈。字は悔焉。号は知等庵。著作に「悉曇愚鈔」「悉曇字母表並釈」など。

〔原文〕余聞於海國之風物

〔訓読〕余海國の風物を聞く

〔原文〕偶及人魚之事

〔訓読〕偶たま人魚の事に及ぶ

〔原文〕現有其人化魚也

〔訓読〕現に其の人有り魚と化すなり

〔原文〕其家富有有嗣子起家

〔訓読〕其の家富有、嗣子有りて家を起す

〔原文〕道有喜而家産悉屬之

〔訓読〕道有喜びて家産悉く之に屬す

〔原文〕因退而居別室

〔訓読〕因て退きて別室に居す

〔原文〕單樂無事

〔訓読〕単に無事を樂しむ

〔原文〕鄉人皆曰真道有也

〔訓読〕郷人皆曰く真の道有なりと

〔原文〕齒余六十設一人妾

〔訓読〕齒六十を余り、一人の妾を設ける

〔原文〕竟産子

〔訓読〕竟に子を産む

〔原文〕道有於于此妄念頻起

〔訓読〕道有此において妄念頻りに起き

〔原文〕世間利養業世俗不法事無不為之

〔訓読〕世間の利養の業、世俗の不法の事、之を為さずということ無し

〔原文〕戚戚積日

〔訓読〕戚戚として日を積む

〔原文〕職由渥寵妾與初發無事安間太戾矣

〔訓読〕職（もと）、妾を渥寵するに由りて、初發無事安間と太だ戾れり

※初發無事安間…よくわかりません

〔原文〕地獄之罪業載于此

〔訓読〕地獄の罪業、此に載る

〔原文〕吁一念之愚益愚

〔訓読〕吁、一念の愚益ます愚かなり

〔原文〕道有内主併家督睹父之隣死地再営渡世為一婢使結罪過

〔訓読〕道有の内主併に家督、父が死地に隣（となりあ）い再び渡世を営み、一婢使の為に罪過を結ぶを睹る

〔原文〕不忍悲悶然而勿奈之何

〔訓読〕悲悶に忍びず、然れども之を如何ともすること勿れ

〔原文〕道有或時為産業携金銀徂于大坂

〔訓読〕道有或時産業の為に金銀を携え大坂に徂く

〔原文〕數日之後濟事歸國

〔訓読〕數日の後、事を済して國に歸す

〔原文〕途中明石海灘忽中颶風覆其船

〔訓読〕途中の明石の海灘に忽ち颶風に中り、其の船を覆す

〔原文〕道有投身

〔訓読〕道有身を投げる

〔原文〕熊本家督聆父之厄難

〔訓読〕熊本の家督、父が厄難を聆（き）きて

〔原文〕趨明石之歩雇漁者潜女

〔訓読〕明石の歩（う）らに趨り漁者、潜女を雇う

〔原文〕刺網海中欲得其死骸

〔訓読〕網を海中に刺し、其の死骸を得んと欲す

〔原文〕不意網中得一箇人魚

〔訓読〕不意に網の中に一箇の人魚を得る

〔原文〕稔看頸首全道有之顔貌

〔訓読〕稔（つらつ）ら看るに、全く道有の顔貌なり

〔原文〕自頸以下方為魚形耳

〔訓読〕頸より以下、方に魚の形と為るのみ

〔原文〕漁人皆曰道有現成魚去寔魚返也

〔訓読〕漁人皆曰く、道有現に魚に成りて去る、寔に魚返るなり

〔原文〕自此措網無搜海者

〔訓読〕此より網を措て海を搜す者無し

〔原文〕家督不忍見不忍聞く

〔訓読〕家督見るに忍びず、聞くに忍びず

〔原文〕含愧歸于郷

〔訓読〕愧を含みて郷に歸す

〔原文〕京都大坂庶人無隠其故

〔訓読〕京都、大阪の庶人其の故を隠すこと無し

〔原文〕門門戸戸十字街頭歌之

〔訓読〕門門戸戸、十字街頭に之を歌う

〔原文〕是近在於元祿初年事

〔訓読〕是れ近くは元祿の初年の事に在り

〔原文〕道有將此一念之差異類中受魚報之身

〔訓読〕道有此の一念之差を將て、異類の中に魚報の身を受ける

〔原文〕百千萬劫沉淪苦海

〔訓読〕百千萬劫、苦海に沉淪す

〔原文〕來生來來生可知

〔訓読〕來生來り來生知るべし

※この訓読、よくわかりません

〔原文〕然人人所可戒者只此色欲貪悋耳

〔訓読〕然れども人人戒むべき處の者、只だ此の色欲貪悋のみ

〔原文〕先聖故曰

〔訓読〕先聖故に曰く

〔原文〕戒之有色戒之在得

〔訓読〕之を戒むること色有り、之を戒むること得るに在りと

〔原文〕吁財色二者有其一

〔訓読〕吁、財色二者、其の一有り

〔原文〕則其二必繼之

〔訓読〕則ち其の二必ず之を繼ぐ

〔原文〕是故圓覺曰

〔訓読〕是れ故に圓覺に曰く

※圓覺…『円覺經』、正式名称『大方広円覺修多羅了義經』一卷は、唐代中国で撰述された仏典の

一つで、「大円覺心」を得るための方法を説く。唐の仏陀多羅訳とされる。訳者の仏陀多

羅については『宋高僧傳』『續古今譯經圖紀』『開元釋教錄』にそれぞれ小伝があるが、

記述内容は何れも類似で漢訳時期等の詳細は不明である。

〔原文〕衆生欲脱生死免諸輪廻

〔訓読〕衆生生死を脱し諸の輪廻を免れんと欲す

〔原文〕先斷貪欲及除愛渴

〔訓読〕先に貪欲を断じ、愛渴を除き

〔原文〕

〔訓読〕

※菩薩戒經：『梵網經』下巻の別称。『菩薩戒經』ともいう。大乘の立場に基づく十重四十八輕戒を説き、後の菩薩戒思想に大きな影響を与えた。智顗が『菩薩戒義疏』に「梵網大本一百一十二卷六十一品。唯だ第十菩薩心地品を什師が誦出す。上下兩卷。上に菩薩の階位を序し、下に菩薩戒法を明す。大本より出たる序及び流通を皆欠く。即ち別部を外し菩薩戒經と称す」（正蔵四〇・五六九中々下）と提示し鼓吹して以来、多くの注釈書が作られている。特に湛然の『授菩薩戒儀』（『十二門戒儀』）は円頓戒授受の基本として今日まで用いられている

〔原文〕習近欲時無惡不造

〔訓読〕欲に習近する時、惡んぞ造らざらんこと無く

〔原文〕受彼果時無苦不受

〔訓読〕彼の果を受ける時、苦（ひと）く受けざること無し

〔原文〕又復經中以著色故則生貪心

〔訓読〕又た復た經中、色を著するを以ての故に、則ち貪心を生ず

〔原文〕生貪心故為色繫縛

〔訓読〕貪心を生ずるが故に、為に色の繫縛せらる

〔原文〕如八師經曰閨門媼亂遠佛違法

〔訓読〕八師經に曰ふが如き、閨門媼亂、佛に遠かり法に違ひて

〔原文〕不親賢衆常懷恐怖

〔訓読〕賢衆に親しまず、常に恐怖を懷く

〔原文〕多危少安

〔訓読〕危を多くして安少なし

〔原文〕今又有在家一壁妻子中室妾嬖縱欲者

〔訓読〕今又在家に妻子を一壁にし、妾嬖を中室にし、欲を縦にする者有り

〔原文〕正有問者曰

〔訓読〕正に問う者有りて曰く

〔原文〕不孝無后為大

〔訓読〕不孝、后無くは大と為す

〔原文〕夫借孟子之口塞人之兌

〔訓読〕夫れ孟子の口を借りて人の兌（くち）を塞ぐ

〔原文〕是為無后不可乎

〔訓読〕是れ后無か爲にせば、不可ならず

〔原文〕不也不善之大者也

〔訓読〕不ならずや、不善の大なる者なり

〔原文〕朱丹溪色欲箴曰

〔訓読〕朱丹溪の色欲箴に曰く

※朱丹溪：中国元代の医家。義烏（現、浙江義烏）の人。代々義烏の丹溪に居住したので世に丹溪先生と尊称された。60歳のとき医学を志して《素問》を読み、会得したところがあった。60歳で再び読み返し、さらに4年後、羅知弟に師事し、また劉完素、張子和、李杲、王好古らの著書を読んで、初めて湿熱相火が病氣の多くの原因であることを悟ったという（《格致余論》序）。当時は簡明な《和剂局方》（宋の国定处方集）が濫用され、辛燥の薬剤による弊害が多く、これに疑念を抱いて「陽は常に余りあり。陰は常に不足す」と説き、今日でもよく用いられる滋陰陰火湯などの補陰剤を創製し多用して治療を行った。よって養陰派と称される。医学における金元四大家の一人に数えられ、明清の医学に大きな影響を及ぼした。弟子に明代初期の名医として知られた戴思恭、王履、劉純、徐彦純らがいる。

〔原文〕閨房之肅門庭之和士之耽兮

〔訓読〕閨房の肅、門庭の和、士、之に耽る

〔原文〕其家自廢

〔訓読〕其の家自ら廢す

〔原文〕閑道有之事

〔訓読〕道有の事を閑し

〔原文〕耳道有之花報不肅之歟

〔訓読〕道有の花報を耳（き）いて、之を肅（つつ）しまず

松嶋夜話 卷之上 53

〔原文〕府下信士夜話次問

〔訓読〕府下の信士の夜話、次いで問ふ

〔原文〕古来公候武官革於父祖舊館

〔訓読〕古来、公候武官父祖の舊館を革めて

〔原文〕建立佛宇精舎以置牌位

〔訓読〕佛宇、精舎を建立し、以て牌位を置き

〔原文〕供於佛僧是乎也

〔訓読〕佛僧に供す、是れ是なるか

〔原文〕余曰職有謂

〔訓読〕余曰く職(もと)謂い有り

〔原文〕佛世之昔周多尊者歸故里

〔訓読〕佛世の昔、周多の尊者、故里に歸す

〔原文〕父母舊宅地立佛堂

〔訓読〕父母の舊宅の地に佛堂を立つ

〔原文〕其夜父母受供養来梦中告曰

〔訓読〕其の夜、父母供養を受け、夢中に來り、告げて曰く

〔原文〕汝出家時以其功德我已生天矣

〔訓読〕汝出家する時、其の功德を以て我已に天に生ず

〔原文〕今又以古宅立佛宇供養於我

〔訓読〕今又た古宅を以て佛宇を立て我を供養す

〔原文〕是天我生天

〔訓読〕是の天我天に生ず

〔原文〕之所寓宮殿光明動揺

〔訓読〕之の所に寓する宮殿、光明動揺し

〔原文〕是故来下于此

〔訓読〕是の故に此に來り下し

〔原文〕告此事而我示生天成佛之憑由云云

〔訓読〕此の事を告げ我天に生じ佛に成る憑由を示す、云云

〔原文〕余觀之古人有由知之爲之

〔訓読〕余之を觀るに、古人之を知るに由りて之を爲す

〔原文〕今人知之不由不爲

〔訓読〕今人之を知り、由らざれば爲さず

〔原文〕我可言殫孝行之人乎也悲哉

〔訓読〕我孝行の人と殫（つくす）と言うべけんや、悲しいかな

松嶋夜話 卷之上 54

〔原文〕自宋景德間道原大師始爲景德傳燈錄

〔訓読〕宋の景德の間、道原大師、景德傳燈録を爲してより

※『景德伝灯録』：中国北宋代に道原によって編纂された、禅宗を代表する灯史。過去七仏から天台徳韶門下に至る禅僧その他僧侶の伝記を収録している。多くの禅僧の伝記を収録しているため、俗に「1,700人の公案」と呼ばれているが、実際に伝のあるものは765人である。

〔原文〕諸師嗣之有廣燈續燈聯燈普燈之四套之作

〔訓読〕諸師之を嗣ぎて、廣燈、續燈、聯燈、普燈の四套の作有り

〔原文〕厥后大川濟公合之爲五燈會元

〔訓読〕厥の後、大川濟后、之を合わせて五燈會元を爲す

※大川普濟：南宋後期に活動した臨済宗大慧派の禅伯である。大慧下4世。

※五灯会元：中国南宋代に成立した禅宗の灯史である〔1〕。1252年、大川普濟撰、20巻。総称

「五灯録」を改編して集大成した禅宗通史としたもの。『景德伝灯録』『天聖広灯録』『建中靖国続灯録』『聯灯会要』『嘉泰普灯録』

〔原文〕始終聿一貫矣

〔訓読〕始終聿（つと）に一貫す

〔原文〕然而元紹定以后諸尊宿會元未及収者

〔訓読〕然して元の紹定以後の諸尊宿、會元に未だ収るに及ばざる者あり

〔原文〕系増集續燈録六卷

〔訓読〕増集續燈録六卷に系ぐ

〔原文〕又自元半今日四百來歲之諸師傳遠門桂輯之五燈續略中

〔訓読〕又元の半ばより今日四百來歳の諸師の傳、遠門の桂公之を五燈續略中に輯す

〔原文〕繼略闕不詳永覺撰繼燈録六写

〔訓読〕繼略詳らかならざるを閲て、永覺繼燈録六写を撰す

※繼灯録：明の永覚元賢の撰。禅宗の史伝の書の一。永暦五年（1651）に成る。『五灯会元』および『五灯統略』を継承増補して、南宋末曹洞下十六世天童如浄、臨済下十八世浄慈悟明より、明の成化年間（1465-87）に至る禅宗の伝灯相承を録したものの。元賢には、同系統のものとして別に『補灯録』の著があるという。

〔原文〕又重詹補燈錄補五燈會元闕

〔訓読〕又た重ねて補燈錄を詹して、五燈會元の闕を補す

〔原文〕

〔訓読〕

※覺印義諦…義諦字は覺印、聖僕と號した。法を天倫宗忽に嗣いだ。【天倫和尚の俗弟】即ち天倫の俗弟で、法弟大心義統の舅である。（大心和尚墓記）黃檗に參學すること多年、京都の市街に乞食した。天倫座視するに忍びず、之を紫野に招いて詩文の友とし、終に法衣及び正脈圖を嗣がしめた。（天倫和尚語錄）【佛在菴創建】義諦後堺不盡菴（後の禪樂寺）内に佛在菴を建てゝ之に住した。（龍寶山祖師傳五）【禪樂寺二世】即ち禪樂寺第二世である。（増補正燈世譜）【著書】天澤東胤錄、禪籍志、佛在文集等の著を残してゐる。義諦深く自ら踏晦して、大いに其技倆を試みるの機なく、終に出世せずして徳禪位を以て終り、（龍寶山祖師傳五）元祿二年示寂した。（大心和尚墓記）【辭偈】辭世の偈あり、曰く、「生亦好レ生、滅亦好レ滅、掘レ地七尺、埋ニ却明月一。」と。（天倫和尚語錄）

〔原文〕近年泉州佛在菴覺印撰東胤錄一写

〔訓読〕近年泉州の佛在菴の覺印、東胤錄一写を撰す

〔原文〕燦大應門下大燈關山之門風

〔訓読〕大應門下の大燈、關山の門風を燦（あざやか）にす

〔原文〕而示于天下后世

〔訓読〕天下后世に示す

〔原文〕夫不讀者有哉也

〔訓読〕夫れ讀まざる者有らんや

松嶋夜話 卷之上 55

〔原文〕一朝一日切心猛利功德無邊

〔訓読〕一朝一日、切心猛利なるは、功德邊無し

〔原文〕苟匪因循二字擔閣一生者所量知

〔訓読〕苟も因循二字、一生を擔閣する者、量り知る所に匪らず

〔原文〕昔佛在世僧法言曰

〔訓読〕昔佛在世の僧法の言に曰く

〔原文〕我苦痛不忍難過刹那

〔訓読〕我が苦痛すること忍びず、刹那を過ぎ難し

〔原文〕非一日猛利行法修持難遁此苦

〔訓読〕一日猛利の行法修持にあらずんば、此の苦を遁れ難し

〔原文〕遂傭四十人手筆一日間頓寫法華一部

〔訓読〕遂に四十人の手筆を傭ひ、一日の間に法華一部を頓寫す

〔原文〕仍此功德生忉利天云云

〔訓読〕此の功德に仍て、忉利天に生ず、云云

〔原文〕觀之會廣大一乘歸猛利之一念者不可疑

〔訓読〕之を觀れば廣大の一乘を會（あつ）めて、猛利の一念に歸する者の疑うべからず

松嶋夜話 卷之上 56

〔原文〕有大道行有大福德一言垂世

〔訓読〕大道の行い有り、大福の徳有り、一言世に垂る

〔原文〕引導衆生夫具四弘誓願人之風情也

〔訓読〕衆生を引導し、夫れ四つの弘誓願を具する人の風情なり

〔原文〕惟常人之以為人力起化度思

〔訓読〕惟だ常人の人と為りの力を以て化不度の思いを起す

〔原文〕只能見其人質督其難事助發善惡

〔訓読〕只だ能く其の人質を見て、其の難事を督し、善惡を助發す

〔原文〕與其人擇同道同唱同和之者差之

〔訓読〕其の人のために、同道、同唱、同和の者を選び、之と差はす

〔原文〕和會教訓則不欠救濟

〔訓読〕和會、教訓すれば則ち救濟を欠かず

〔原文〕克成褫厥人

〔訓読〕克く厥の人を成褫す

〔原文〕是為人底一手段也

〔訓読〕

※この文章はよくわかりません

〔原文〕是故先賢有言

〔訓読〕是れ故に先賢言有り

〔原文〕禁童子之暴謔

〔訓読〕童子の暴謔を禁ず

〔原文〕則師友之誠不如傳婢之指歸

〔訓読〕則ち師友の誠めも傳婢の指歸に如ばず

〔原文〕止凡人之鬪鬩

〔訓読〕凡人の鬪鬩を止めることは、

〔原文〕則堯舜之道不如寡妻之誨諭矣

〔訓読〕則ち堯舜の道、妻の誨諭に如かず

〔原文〕是此謂也乎

〔訓読〕是れ此の謂ひなり

松嶋夜話 卷之上 57

〔原文〕佛言嗔恚之害破諸善法破好名聞

〔訓読〕佛言う、嗔恚の害は諸の善法を破り、好名聞を破る

〔原文〕昔睿山正算之徒有法性寺道乗者

〔訓読〕昔睿山の正算の徒に法性寺の道乗なる者有り

※道乗：平安時代中期の僧。天台宗。比叡山の正算にまなび、京都の法性寺にはいる。夢のなかでひとりの老僧から道乗がこれまでとなえた膨大な量の経典が、怒りの心がおきると一瞬にしてもえてしまうとの話をきく。以後短気で怒りっぽい自分の性格をあらためたという。

〔原文〕常誦持法華

〔訓読〕常に法華を誦持す

〔原文〕只天質多嗔發露懺悔不止

〔訓読〕只天質嗔多く、發露懺悔すれども止めず

〔原文〕或對人謂麤言怒罵童僕

〔訓読〕或いは人に對して麤言を謂ひて、童僕を怒り罵る

〔原文〕一タ夢登睿山頂

〔訓読〕一タ、夢に睿山の頂に登る

〔原文〕入金殿中所積經卷無筭

〔訓読〕金殿中に入れば積む所の經卷筭（かぞ）う無し

〔原文〕傍有老僧問之曰

〔訓読〕傍らに老僧有りて曰（ちなみ）に之を問ひて曰く

〔原文〕是汝比年所讀之經卷也

〔訓読〕是れ汝の比年讀む所の經卷なり

〔原文〕言未了

〔訓読〕言未だ了らず

〔原文〕忽有火起

〔訓読〕忽ち火有りて起る

〔原文〕經閣共鳥有矣

〔訓読〕經閣共に鳥有す

〔原文〕問何故老僧曰

〔訓読〕何か故ぞと問ふ、老僧曰く

〔原文〕是汝時時起嗔時平生所持經功空遭焚燒

〔訓読〕是れ汝時時嗔を起す時、平生所持の經功空しく焚燒に遭ふ

〔原文〕已后息嗔持誦則安養淨土之生又曷疑也

〔訓読〕已に后、嗔を息めて持誦すれば、則ち安養淨土の生又た曷にか疑はん

〔原文〕乘覺愧悔誓佛前

〔訓読〕乘覺愧悔し佛前に誓ふ

〔原文〕堅輟嗔忿

〔訓読〕堅く嗔忿を輟む

〔原文〕嗚觀之嗔恚之害破善法

〔訓読〕嗚、之を觀らば、嗔恚の害善法を破る

〔原文〕安不愼也

〔訓読〕安んぞ愼まざるや

〔原文〕又華嚴經曰

〔訓読〕又華嚴經に曰く

〔原文〕菩薩起一嗔心能生百萬障門是以此知之

〔訓読〕菩薩一嗔心を起し、心能く百萬の障門を生じ、是れ此を以て之を知る

松嶋夜話 卷之上 58

〔原文〕城下一士持先師親澤

〔訓読〕城下の一士、先師の親澤を持し

〔原文〕來謂余曰

〔訓読〕來りて余に謂ひて曰く

〔原文〕開山和尚在世指示某

〔訓読〕開山和尚在世に某に師事し

〔原文〕底一昏無心是道無事是貴人

〔訓読〕底の一昏、無心是れ道、無事はれ貴人

〔原文〕某舉家多饒

〔訓読〕某の舉家饒多し

〔原文〕如何使得十二時

〔訓読〕如何にか十二の時を得さしめ

〔原文〕今日得無事余語曰

〔訓読〕今日無事を得て、余語りて曰く

〔原文〕止事事無心心心無事

〔訓読〕止(た)だ事事心無く、心心事無し

〔原文〕則為十二時不見使

〔訓読〕則ち十二時に為に使われず

〔原文〕却使得十二時

〔訓読〕却て十二時を使い得ん

〔原文〕恁地時曰之無事底

〔訓読〕恁地(かか)る時、之を無事の底と曰ふ

〔原文〕非道墮在無事甲裏活計鬼窟裏者之知此之謂

〔訓読〕無事甲裏に墮在し鬼窟裏に活計する者の此れを知ると道ふの謂いに非ず

〔原文〕修行不如斯久遠却不得無事

〔訓読〕修行斯の如くならずば、久遠却すれど無事を得ず

〔原文〕焉至無心地

〔訓読〕焉んぞ無心の地に至らん

〔原文〕故古徳曰

〔訓読〕故に古徳に曰く

〔原文〕無心于事無事于心自然虚而靈空而妙

〔訓読〕心に事無く、事に心無けば、虚しく靈にして、空しく妙たり

〔原文〕然今求無心于事者了不可得也

〔訓読〕然れども今心に事無き者を求めるに、了(あきら)かに得べからず

〔原文〕更有古偈説破去

〔訓読〕更に古偈有りて説破し去る

〔原文〕曰大道分明絶覆藏

〔訓読〕曰く大道分明にして覆藏を絶す

〔原文〕惟人篤信自支當

〔訓読〕惟だ人篤く信じ自ら支當す

〔原文〕轉一朵芙蓉徧界香

〔訓読〕轉じて一朵の芙蓉徧界に香る

〔原文〕他時異日卿得無事時看此一偈

〔訓読〕他時異日卿無事を得た時、此の一偈を見る

〔原文〕成得卿之出身捷徑

〔訓読〕卿が出身の捷徑を成得し

〔原文〕又奉不孤先和尚之意也

〔訓読〕又奉るに先の和尚の意に孤(そむ)かず

〔原文〕客聆余之閑譚信受而退

〔訓読〕客余の閑譚を聆(き)き、信受して退く

松嶋夜話 卷之上 59

〔原文〕夢有六夢

〔訓読〕夢に六夢有り

〔原文〕吉相之夢亂不可告矣

〔訓読〕吉相之夢は亂りに告くすべからず

〔原文〕告之夢破也

〔訓読〕之を告げれば夢破るなり

〔原文〕是古者之辭也

〔訓読〕是れ古者の辭なり

〔原文〕密宗有禁綴有秘密

〔訓読〕密宗に禁綴有り、秘密有り

〔原文〕是秘密有道也復先賢不舍夢相云

〔訓読〕是れ秘密に道有れば、復た先賢は夢相を捨てずと云う

松嶋夜話 卷之上 60

〔原文〕客問叢林造壽藏古有此故也

〔訓読〕客問ふ、叢林に壽藏を造る、古此の故と有りや

〔原文〕余曰漢有於公士民慕德

〔訓読〕余曰く漢に公士有り、士民徳に慕う

〔原文〕造生祠祭之

〔訓読〕生祠を造り之を祭る

〔原文〕是今之壽藏生塔之義則也

〔訓読〕是今の壽藏、生塔の義、則ち（これ）なり

〔原文〕又問今有自撰塔銘等又有此事也

〔訓読〕又問ふ、今自撰の塔銘等有り、又此の事有りや

〔原文〕曰建仁中岩有自曆譜鼓山永覺有自序塔銘

〔訓読〕曰く、建仁の中岩に自曆譜有り、鼓山の永覺に自序の塔の銘有り

〔原文〕近年長崎卽非説自之裏事法語

〔訓読〕近年長崎の卽非自らの裏事の法語を説く

※卽非…卽非如一（そくひによいつ、万曆_{マカ}年_{マカ}五月_{マカ}十四日（1616年6月27日）－寛文二年_{マカ}五月_{マカ}20日（1671年6月26日））は、江戸時代前期中国の明から渡来した臨済宗黄檗派（黄檗宗）の僧。俗姓は林氏。字は卽非。福建省福州府福清県の出身。

〔原文〕間有之

〔訓読〕間に之有り

〔原文〕可從其機變矣言不欲莫

〔訓読〕其の機變に従ふべし。言莫を欲せず

松嶋夜話 卷之上 61

〔原文〕有一僧偶讀恕中山庵雜錄

〔訓読〕一僧有りて、偶たま恕中の山庵雜錄を讀む

※恕中…无愠禅师（1309-1386）为台州临海陈氏子、少时有出世之志、后从径山元叟行端禅师落发、并于昭庆律寺受具足戒〔3〕。初参元叟行端禅师、后于紫箴山妙道禅师处悟道、以“狗子无佛性”公案得印可。住持灵岩、瑞岩期间提出“心生种种法生、心灭种种法灭”的禅学思想、设“稳坐家堂”、“掀翻大海”、“眼光烁破”、“三关勘验参学者、批判禅林玩弄话头公案之风”〔1-2〕。应安七年（1374年、明洪武七年）、日僧古剑妙快曾奉师命邀请其东渡出任日本寺院住持、但无愠禅师固辞未果。语录卷一载有“入门一句”、“祖堂”等场景言论、晚年退隐著有《二会语录》《三庵杂录》、所著《山庵杂录》为禅宗“宗门七书”之一、临终留下“末后一句、露柱饶舌”偈语〔3-4〕。

〔原文〕於中以問

〔訓読〕中に於いて以て問ふ

〔原文〕元至正中張嗣誠侵江渚

〔訓読〕元の至正中に張嗣誠、江渚を侵す

〔原文〕丞相課化城寺惠恭與鄉民戰之

〔訓読〕丞相、化城寺の惠恭、郷民と之と戦うことを課す

※化城寺…中華人民共和国安徽省池州市青陽県九華山にある仏教寺院。

〔原文〕賊敗走獲四十餘人送官

〔訓読〕賊敗走し、四十餘人を獲て観に送る

〔原文〕先宿置西湖鳥窠寺住持大猷其夜經行廊廡間

〔訓読〕先ず西湖の鳥窠寺に宿置し、住持大猷、其の夜廊廡の間に經行し

〔原文〕囚者見師齊聲乞云長老救我

〔訓読〕囚者師を見て聲を齊しくして乞ひて云ふ、長老我を救へ

〔原文〕師曰我救汝等不得

〔訓読〕師曰く、我汝を救う得ず

〔原文〕汝等至心至誠称念南無救苦救難阿弥陀佛

〔訓読〕汝等の至心至誠に南無救苦救難阿弥陀佛を称念せよ

〔原文〕却救得你

〔訓読〕却つて你を救い得ん

〔原文〕其中有三人信受師言

〔訓読〕其の中に三人有りて師の言を信受す

〔原文〕高聲念佛不輟口

〔訓読〕高聲に佛を念じ、口を輟めず

〔原文〕既而官司取發衆囚俱加枷鎖

〔訓読〕既にして官司、衆囚を取發し、俱に枷鎖を加す

〔原文〕偶至此三人缺刑具

〔訓読〕偶たま此の三人に至つて刑具缺く

〔原文〕但繫以繩耳

〔訓読〕但（つた）なく、繋ぐに繩を以てす

〔原文〕既至審囚官司獨勘此三人

〔訓読〕既に囚を審らかにするに到りて、官司獨り此の三人を勘すれば

〔原文〕一人供給職治麥畦者也

〔訓読〕一人供給するは職（もっぱ）ら麥畔を治める者なり

〔原文〕錯囚于此

〔訓読〕錯て此に囚はる

〔原文〕二人供給是鋸匠也

〔訓読〕二人供給するは是れ鋸匠なり

〔原文〕來此傭作又成虜

〔訓読〕此に來りて傭作し、又虜と成る

〔原文〕官司以此遂免罪

〔訓読〕官司此を以て遂に罪を、免る

〔原文〕自非彌陀誓願不出此間

〔訓読〕彌陀の誓願に非ざるよりは、此の間を出づ

〔原文〕稱念者非獨臨終得驗

〔訓読〕稱念する者は獨り臨終に驗を得るのみに非ず

〔原文〕而現世遭大辟刑者亦可頼免

〔訓読〕而も現世に大辟刑に遭う者は、頼免すべし

〔原文〕人而不信吾未如之何也已

〔訓読〕人而も信ぜずば、吾之を如何するのみや

〔原文〕然則信之也余曰然不信已乎

〔訓読〕然らば則ち之を信じんや、余曰く然も信ずるのみ

〔原文〕經曰夫念阿弥陀佛者現在菩薩并護法諸天龍鬼神等晝三夜三擁護此人

〔訓読〕經曰く、夫れ阿弥陀佛を念ずる者は、現在の菩薩並びに語法の諸天、龍、鬼、神等晝三夜三に此の人を擁護す

〔原文〕惡事惡難悉令離之

〔訓読〕惡事惡難悉く之を離れしむ

〔原文〕焉臨終得正念往生蓮國耳

〔訓読〕焉んぞ臨終に正念を得て蓮國に往生するのみ

〔原文〕人皆錯以現在與未來為二

〔訓読〕人皆な錯ちて現在と未來を二と為す

〔原文〕詎矧曰己身淨土即土淨土

〔訓読〕詎矧(いすくん)ぞ己身淨土、即土淨土と曰ふや

〔原文〕則現在則極樂極樂則現世何有二

〔訓読〕則ち現在は則ち極樂、極樂は則ち現世、何ぞ二有らん

〔原文〕愚蒙之者迷之在此

〔訓読〕愚蒙の者は迷うこと此に在り

〔原文〕直心之者悟之在此

〔訓読〕直心の者は悟ること此に在り

〔原文〕以彌陀之左右有觀音至勢至爲補處

〔訓読〕彌陀の左右を以て觀音至勢有りて補處を爲す

〔原文〕且起現世安穩後生善所之大誓願

〔訓読〕且つ現世安穩の後生の大誓願を起す

〔原文〕優遊穢土與淨土

〔訓読〕穢土と淨土に優遊す

〔原文〕是繼彌陀之願力

〔訓読〕是れ彌陀の願力を繼げば

〔原文〕故知三尊一體一體三尊

〔訓読〕故に三尊一體、一體三尊を知る

〔原文〕於乎救前三人厄難不足疑

〔訓読〕前の三人の厄難を救ふ、疑うに足らず

〔原文〕吁卿等不信已乎

〔訓読〕吁、卿等信ぜざるのみ

松嶋夜話 卷之上 62

〔原文〕或問

〔訓読〕或いは問ふ

〔原文〕梁武帝始製水陸道場施食儀文三十卷

〔訓読〕梁の武帝始めて水陸道場施食の儀文三十卷を製して

※水陸法會：漢傳佛教的超度儀式，又稱水陸道場、水陸大會、水陸大齋或水陸供齋〔二〕：196，全

稱「法界聖凡水陸普度大齋勝會」

〔原文〕以十六名位盡三千界

〔訓読〕十六の名位を以て三千界を盡す

〔原文〕事類所引經論已一十一本

〔訓読〕事類引く所の經論已に一十一本

〔原文〕誌公應詔曰

〔訓読〕誌公詔に應じて曰く

※誌公：中国齊の宝誌（四一八―五一四）のこと？

〔原文〕此齋會宜於深山幽谷要津處

〔訓読〕此の齋會、宜しく深山幽谷要津の處に於いてす

〔原文〕遂指金山寺

〔訓読〕遂に金山寺を指し

〔原文〕甫修水陸會

〔訓読〕甫めて水陸の會を修せんとす

〔原文〕今日域諸刹不相攸

〔訓読〕今日、域の諸刹、相攸（とお）からず

〔原文〕或佛舍或家館設此冥齋

〔訓読〕或いは佛舍、或いは家館、此の冥齋を設くる

〔原文〕理乎哉

〔訓読〕理なるかな

〔原文〕曰先道定法

〔訓読〕曰く先ず定法を道ふ

〔原文〕觀所可山澤曠野清淨境界堪會神靈通幽顯之處作之

〔訓読〕山澤曠野清淨の境界、神靈を會するに幽顯に通す可きの處を觀て

〔原文〕若如法莊嚴壇場則不可限山澤曠野

〔訓読〕若し如法壇場を莊嚴にせば、則ち山澤、曠野に限らず

〔原文〕如瑜伽焦要救阿難陀羅尼焰口儀軌經曰

〔訓読〕瑜伽焦要救阿難陀羅尼焰口儀軌經に曰ふが如きは

〔原文〕精苑大舍閑靜圓相鬼神愛樂流泉浴池江河山澤福德之地

〔訓読〕精苑大舍、閑靜圓相、鬼神愛樂の流泉浴池、江河山澤福德の地

〔原文〕堂舍亦得如法

〔訓読〕堂舍亦た如法を得

〔原文〕塗摩用香水沉

〔訓読〕塗摩するに、香水沉を用ふ

〔原文〕随施主力方圓大小四角豎幬

〔訓読〕施主の力に随ひて、方圓大小、四角、幬を豎て

〔原文〕如法莊嚴用五色綵

〔訓読〕如法莊嚴にして五色の綵を用い

〔原文〕安火焰珠

〔訓読〕火焰の珠を安（お）き

〔原文〕又於珠内安置佛頂大悲随求尊勝

〔訓読〕又た珠内に於いて佛頂大悲随求尊勝を安置し

〔原文〕又於四柱如法莊嚴殊特妙好名吉祥幢

〔訓読〕又四柱に於いて如法莊嚴殊特妙好、吉祥の幢と名く

〔原文〕令百由旬無諸衰患

〔訓読〕百由旬をして諸の衰患を無からしむ

〔原文〕即成結界風吹影拂土散水露露地

〔訓読〕即ち結界を成す、風吹けば影土を拂ひ、水に散すれば露地に露(うるお)す

〔原文〕罪障消亡獲大福利

〔訓読〕罪障消亡し、大福利を獲

〔原文〕眼見耳聞皆利濟

〔訓読〕眼見耳聞、皆利濟す

〔原文〕次復周圍懸繪幡蓋寶扇白拂布列次位

〔訓読〕次に復た懸繪、幡蓋、寶扇、白拂を周圍し、次位を布列す

〔原文〕其於壇法聖衆位次別在于教文

〔訓読〕其れ壇法において聖衆の位次、別に教文に在り

〔原文〕阿伽香水妙華燈塗

〔訓読〕阿伽香水、妙華燈に塗り

※阿伽…闍伽。本尊または墓前に供える浄水。◎arṇhaの音写。功德水と訳す。阿伽とも書き、

阿伽水、阿伽の水ともいう。闍伽は、塗香ぞう・華鬘けまん・焼香・飯食ぼんじき・灯

明と共に本尊に献供する六種供養の一つ

〔原文〕飲食湯藥種種果味及餘物等

〔訓読〕飲食、湯藥種種の果の味、及び餘物等なり

〔原文〕以法淨除勿令觸穢

〔訓読〕法を以て浄除し、觸穢せしむることなかれ

〔原文〕莊嚴若了手執香鑪

〔訓読〕莊嚴若し了れば、手に香鑪を執り

〔原文〕諸弟子香湯洗浴著新浄衣

〔訓読〕諸弟子、香湯で洗浴して新浄衣を着て

〔原文〕如法莊嚴名三昧耶壇

〔訓読〕如法莊嚴なるを三昧耶壇と名づく

※三昧耶(samaya…サマヤ)…サンスクリット語で「約束」や「契約」を意味。

〔原文〕又曰於淨地上或大石上或所淨瓦盆或泉池江海長流水中捨淨食淨水

〔訓読〕又た曰く淨地の上、或いは大石の上、或いは淨る所の瓦盆、或いは泉池江海、或いは長流の水中に於いて淨食淨水を捨てよ

〔原文〕不得瀉於石榴桃木下

〔訓読〕石榴桃木の下に瀉ぐことを得ず

〔原文〕鬼神懼怕不食

〔訓読〕鬼神懼怕して食さず

〔原文〕是日域所以不限水陸於精舍家館也

〔訓読〕是れ日域水陸に限らず精舍家館に於いてする所以なり

松嶋夜話 卷之上 63

〔原文〕復曰

〔訓読〕復た曰く

〔原文〕施食節分皆以夜分

〔訓読〕施食の節分、皆夜分を以てす

〔原文〕日域諸刹或晨朝或晩間不剋時然也否曰是不然

〔訓読〕日域の諸刹、或いは晨朝、或いは晩間、時を剋まざるは然らんや、否や。曰く是れ然らざる

〔原文〕然只順救拔餓口經說並遵式法師施食法以可不擇時分

〔訓読〕然ども只だ救拔餓口經の説並びに遵式法師の施食の法に順ひ、以て時分を擇はざるべし

※救拔焰口餓鬼陀羅尼經のこと?…一卷。唐・不空訳。餓鬼(ḡpeta)を救済するための修法と陀羅尼を説く。施餓鬼会はこれにもとづいて行われる。

※遵式法師…宋・乾徳二年(九六四)―明道元年(一〇三二)―一〇月一〇日。字あざなは知白、俗姓は葉氏。諡おくりなは法宝大師、懺主禪慧法師。慈雲尊者ともいう。中国浙江台州寧海の人。はじめ禪を学び、二二歳のときに義通について天台を学び、同門の知礼と親交を結んだ。

〔原文〕此經曰施食若晨朝及一切時悉無障礙

〔訓読〕此の經曰く、施食、晨朝及び一切の時の若くは悉く障礙無し

〔原文〕日域觀之順之

〔訓読〕日域之を觀て之に順ふ

〔原文〕又只如瑜伽集要經曰

〔訓読〕又た只だ瑜伽集要經に曰ふが如き

〔原文〕若供養諸佛聖衆

〔訓読〕若し諸佛聖衆を供養せば

〔原文〕於上五更晨朝日出是供養時

〔訓読〕上五更晨朝の日出づるに於いてす。是れ供養の時なり

〔原文〕若作餓鬼施食之法當於亥時

〔訓読〕若し餓鬼施食の法を作さば、亥の時に當るべし

〔原文〕是施食時

〔訓読〕是れ施食の時なり

〔原文〕若於齋時施餓鬼者徒設功勞終無功也

〔訓読〕若し齋時に於いて餓鬼を施こす者は徒だ功勞を設ける

〔原文〕是只指夜分不曰一切時

〔訓読〕是れ只だ夜分を指して一切の時を曰ず

〔原文〕又毘羅三昧經早起諸天食

〔訓読〕又た毘羅三昧經には、早起は諸天の食

〔原文〕日中三世諸佛食日西畜生食日暮鬼神食云

〔訓読〕日中は三世の諸佛の食

〔原文〕此二經并見梁王水陸會皆用夜分

〔訓読〕此の二經并に梁王の水陸會を見るに、皆夜分を用いる

〔原文〕遵式不限夜分用一切時

〔訓読〕遵式夜分を限らず一切の時を用ゆ

〔原文〕宜隨義理隨其意修之

〔訓読〕宜しく義理に隨い其の意に隨い之を修すべし

〔原文〕一向道之又違教意

〔訓読〕一向に之に道へば、又た教意に違ふ

〔原文〕教意不可不詳

〔訓読〕教意詳からにすべからず

松嶋夜話 卷之上 64

〔原文〕有客問

〔訓読〕客有りて問ふ

〔原文〕

〔訓読〕

※等持…心を一境に住して平等に維持することをいふ。三昧のこと。〔俱舍論、二十八〕等持者爲定、名異體同、故契經説心定等定、名正等持、此亦爲心一境性。

〔原文〕等持原古公選注日邦通誦大施餓鬼中有此阿弥陀大咒

〔訓読〕等持の原古公の選注に日邦通誦の大施餓鬼の中に此の阿弥陀の大咒有り

※原古…人名？

〔原文〕自餘施食文亦載之也

〔訓読〕自餘施食文も亦之を載せるなり

〔原文〕曰瑜伽集要經焰口餓鬼經及宗曉法師施食通覽等無此大咒

〔訓読〕曰く、瑜伽集要經、焰口餓鬼經及び宗曉法師の施食通覽等に於いては、此の大咒無し

※宗曉…四明(現、浙江寧波)の人。俗姓、王氏。一〇歳で具足戒を受け、具菴強公、雲菴洪公に謁す。四明の昌国翠蘿寺で住持となるが、〇年後西山に隱退し、法華經の読誦を日課とする。浙西の諸刹に〇年ほど遊んだ後、参秀寺の住持となる。後に延慶寺第一座となる。天台、浄土の教えに通じ、諸經の講説に力を注いだ。浄土教に関するものとしては、西方極樂世界(樂邦)に関する文献を集めた《樂邦文類の卷》の編纂が有名である。『主著』四明教行録、一巻。宝雲振祖集、一巻。三教出興頌註、一巻。樂邦遺稿、一巻。金光明照解、一巻。施食通覽、一巻。法華顯応録、一参考。〔参考〕仏祖統紀一〇(続蔵本)。

〔原文〕

〔訓読〕

※施食心…『法蒲寿庚の事蹟』一七四ページ東洋文庫、如二度詞り莫ヒ可ヒ曉。自題二其後一云。臣思肖嘔二三斗血一方能書。此。後当下有二巨眼一識ウ之。又著二釈氏施食心法一卷。

〔原文〕在于施食心法并如居士施食文或今黄檗禪林課誦蒙山施食中誦此咒

〔訓読〕施食心法并に如居士の施食文或いは今の黄檗禪林が課誦の蒙山施食の中に於いて此の咒を誦ふ。※蒙山施食…書名？

〔原文〕此大咒別見所出也

〔訓読〕此の大咒別に出す所を見るなり

〔原文〕陀羅尼雜集經之中載之

〔訓読〕陀羅尼雜集經の中に之を載す

〔原文〕又有多名或名往生咒或名淨土咒

〔訓読〕又た多名有り、或いは往生咒と名づけ、或いは淨土咒と名づく

〔原文〕具云無量壽佛説往生淨土咒

〔訓読〕具には無量壽佛説往生淨土咒と云ひ

〔原文〕又名拔一切業障根本得生淨土咒

〔訓読〕又た拔一切業障根本得生淨土咒と名づく

〔原文〕微妙廣大

〔訓読〕微妙廣大にして

〔原文〕功德不可思議之大明咒也無等等咒也

〔訓読〕功德不可思議の大明の咒なり、無等等咒なり

〔原文〕日國効此意

〔訓読〕日國此の意を効つて

〔原文〕津送之間從龕前赴山頭時大衆齊唱此大咒

〔訓読〕津送の間、龕の前より山頭に赴く時、大衆齊（ひとし）く此の大咒を唱ふ

※津送：津送儀（しんそうぎ） 禅宗では、住職または閑栖（かんせい）…住職を次の代に譲り隠居した禅僧）和尚がなくなったことを遷化（せんげ）といい、その葬儀を、津送儀といいます

〔原文〕吁欲往生樂邦人此大咒

〔訓読〕吁、樂邦に往生せんと欲する人は、此の大咒なり

〔原文〕安可不誦持

〔訓読〕安んぞ誦持せざる

〔原文〕看四明宗曉師所輯之樂邦文類第一卷載曰

〔訓読〕看よ、四明の宗曉師が輯る所の樂邦文類第一卷に載せて曰く

〔原文〕此咒宋元嘉年中求那跋陀羅三藏譯

〔訓読〕此の咒、宋の元嘉年中に求那跋陀羅三藏譯す

※求那跋陀羅：中国南朝宋代の訳経僧。中インドの人。バラモン出身であるが、出家して就いた小乗の師を辞して後、大乘を学ぶ。海路セイロンを経由して、広州に入る〔435元嘉一〕。文帝(南朝宋)に厚遇され、顔延之や彭城王義康、南譙王義宣なども師事した。建康(現、南京)の祇洹寺や荊州の辛寺に住し、《雜阿含經》や如来藏經典《勝鬘經》、禪宗所依の經典《楞伽經》、仏伝《過去現在因果經》、初めての瑜伽系經典である《相續解脫經》などを漢訳。

〔原文〕合計五十九字一十五句

〔訓読〕合計五十九字一十五句

〔原文〕若人能誦此咒者阿弥陀佛

〔訓読〕若し人能く此の咒を誦える者は阿弥陀佛

〔原文〕住其頂日夜擁護

〔訓読〕其の頂きに住みて日夜擁護す

〔原文〕無令怨家而得其便

〔訓読〕怨家をして其の便を得せしむ

〔原文〕現世常得安穩臨命終時任運往生

〔訓読〕現世常に安穩を得て、命終るに臨む時に任運に往生す

※任運：法が自ずと運ぶのに任せて、誰の作為も加えていないこと。「にんぬん」とも読む。禅門では、任運無作、任運騰騰などと、「あるがまま」の意でも用いられる。聖光は『徹選択集』下において、「不離仏値遇仏」の義を明らかにしていく中で、「真位の菩薩の漏尽通は任運自在の漏尽通なり。いわゆる、無明の惑を断じ法性の理を顕し、自然に薩波若海に流入す任運無窮の遊戲神通なり」(聖典三・二九五／浄全七・九九下)と述べ、真位の菩薩の漏尽通が任運自在である、と示している。

〔原文〕龍樹菩薩願生安穩梦感此咒

〔訓読〕龍樹菩薩、安穩に生じるを願ひ、夢に此の咒を感ず

〔原文〕若欲受持當嚼楊枝

〔訓読〕若し受持せんと欲せば、當に楊枝を嚼む

〔原文〕澡豆漱口燃香

〔訓読〕豆を澡ひ口を漱ぎ香を燃やす

〔原文〕於佛像前胡跪合掌

〔訓読〕佛像の前において、胡跪合掌す

〔原文〕日夜六時各誦三七遍

〔訓読〕日夜六時各々三七遍を誦へよ

〔原文〕所有四重五逆十惡謗法等罪悉得滅除

〔訓読〕有する所の四重五逆十惡謗法等悉く滅除を得

〔原文〕現世所求皆得不為諸惡鬼神之所惑亂

〔訓読〕現世の求むる所皆諸惡鬼神の為に惑する所を得て

〔原文〕若誦滿二十萬遍即感得菩提芽生

〔訓読〕若し誦うることを二十萬遍に滿ちれば、即ち菩提の芽生ずるを感得す

〔原文〕若至三十萬遍即面見阿弥陀佛

〔訓読〕若し三十萬遍に至れば、即ち面に阿弥陀仏を見ゆ

〔原文〕然則慕淨土人一朝一夕間不可欠

〔訓読〕然らば則ち淨土を慕う人は一朝一夕の間も欠くべからず

〔原文〕此誦持

〔訓読〕此れ誦持せよ

〔原文〕眞阿弥陀佛眞說大明咒也

〔訓読〕眞の阿弥陀佛が眞に説く大明咒なり

〔原文〕夫思之

〔訓読〕夫れ之を思へ

松嶋夜話 卷之上 65

〔原文〕日東聲明傳來前言聞命

〔訓読〕日東の聲明の傳來は前言に命を聞く

〔原文〕支那濫觴審聞之

〔訓読〕支那濫觴審らかに之を聞く

※濫觴：揚子江のような大河も源は觴さかずきを濫うかべるほどの細流にすぎないという「荀子」

子道にみえる孔子の言葉から物事の起こり。始まり。起源。

〔原文〕答梵唄蓋天竺曰唄

〔訓読〕答ふ、梵唄、蓋し天竺には唄と曰く

〔原文〕支那曰贊

〔訓読〕支那贊と曰ふ

〔原文〕名異實同

〔訓読〕名は異なるも実は同じ

〔原文〕所謂梵天音也

〔訓読〕所謂梵天の音なり

〔原文〕諸天聞梵唄心則歡喜

〔訓読〕諸天、梵唄を聞けば、心則ち歡喜す

〔原文〕故作之

〔訓読〕故に之を作す

〔原文〕在佛世比丘跋提於唄聲中第一也

〔訓読〕佛世に在りて、比丘跋提、唄聲の中に於いて第一なり

〔原文〕然炳發道聲

〔訓読〕然れども道聲を炳發し

〔原文〕移易俗聽以作外道歌聲

〔訓読〕俗聽を移易し、以て外道の歌聲を作す

〔原文〕令不得亂梵音

〔訓読〕梵音を亂すことを得ざらしむ

〔原文〕故佛説五過患

〔訓読〕故に佛五過患を説く

〔原文〕苟教中稱深遠雷音此在是梵唄者乎

〔訓読〕苟(まこと)に教中に深遠な雷音と稱する者は、此れ是の梵唄に在る者か

〔原文〕支那發端可依康僧會

〔訓読〕支那の発端は康僧會に依る

※康僧會：中国三国時代，呉の仏僧。康居(中央アジアの古代民族)出身。父の代にインドから安南国の交趾(現ハノイ付近)に移住。呉の都建業(南京)に入り，仏道を行じて不審に思われ疑われたが，靈驗のある仏舍利を感得して孫権に認められ，建初寺を賜った。江南の仏教は康僧會によって興隆したとされる。仏教に厳しかった孫皓(そんこう)に授戒した。《六度集經》を編訳，又一種の經典を六波羅蜜の順に配列して収めている。《安般守意經序》《法鏡經序》を残す。

〔原文〕會吳孫権赤烏四年自康居國創達江表

〔訓読〕會は呉の孫権赤烏四年、康居國より創(はじ)めて江表に達す

〔原文〕權感發感於舍利立建初寺請之

〔訓読〕權、舍利に感するに發感し、建初寺を立て、之を請う

〔原文〕鮮通三藏慧貫五明善梵音

〔訓読〕三藏を鮮通し、慧は五明を貫き、梵音を善す

〔原文〕傳泥沮咀

〔訓読〕泥沮咀を傳ふ

※泥沮(でいそ)：涅槃(ねはん)を指す古代の漢訳表現。法顯訳の『大般泥洹經』や、初期の『泥洹經』に関連する？

この文よくわかりません

〔原文〕音聲之學悉則於世

〔訓読〕音聲の學、悉く世に則とる

〔原文〕是此人本朝空海甫如置聲明度耳

〔訓読〕是れ此の人本朝の空海、甫めて聲明度を置くのみ

〔原文〕尋之管有支曇籥

〔訓読〕尋(ついで)に管に支曇籥有り

※支曇籥：【佛光大辭典】東晉僧。月氏人。生卒年不詳。寓居建業，少年出家，棲止於吳之虎丘山。戒行清卓，眾所欽服。東晉孝武帝初，敕請人建初寺，為帝授五戒，帝以師禮敬之。師特稟妙聲，善於轉讀，嘗夢天神授其聲法，覺而裁製新聲，成六言梵唄，為後學所法。世壽八十一。

〔原文〕月氏人晉孝武初勅請畱建初寺

〔訓読〕月氏の人、晉の孝武の初め勅請し、建初寺に畱む

〔原文〕妙善於轉讀

〔訓読〕妙に轉讀を善す

〔原文〕夢天神授其聲法覺製新梵

〔訓読〕夢に天神其の聲法を授くと、覺めて新梵を製す

〔原文〕始終循環

〔訓読〕始終循環して

〔原文〕未有如支曇之妙聲

〔訓読〕未だ支曇の妙聲の如く有らず

〔原文〕后人莫不由此音傳

〔訓読〕后人此の音傳に由らざるなし

〔原文〕所作六言梵唄傳于今

〔訓読〕作る所の六言の梵唄、今に傳ふ

〔原文〕壹聲明中興此人也

〔訓読〕壹へに聲明の中興は此の人なり

〔原文〕又齊安樂寺有僧辯好讀經

〔訓読〕又齊の安樂寺に僧の辯有りて、讀經を好む

〔原文〕折衷還弄獨步齊初

〔訓読〕折衷に還弄し齊初に獨歩す

〔原文〕后傳古維摩一契瑞應七言偈一契

〔訓読〕后に古維摩一契、瑞應七言の偈一契を傳へ

〔原文〕最是命家之作也

〔訓読〕最も是れ命家の作なり

〔原文〕辯以齊永明十一年卒

〔訓読〕辯、齊の永明十一年を以て卒す

〔原文〕又曰一契義猶曰一節一科

〔訓読〕又曰く一契は猶一節一科と曰ふ

〔原文〕曰之

〔訓読〕之を曰ふ

〔原文〕又曰支曇后有道安法師

〔訓読〕又た曰く支曇の後、道安法師有りて

〔原文〕能作梵契集製三科

〔訓読〕能く梵契を作し、集めて三科を製し

〔原文〕上經上講布薩等也洎為天下法則

〔訓読〕上經、上講、布薩等や、洎びて天下の法則となる

〔原文〕道安與羅什同時世云

〔訓読〕道安と羅什は時世同じうして云う

〔原文〕后至魏時陳思王曹子建出魏武帝第四子

〔訓読〕后魏の時に至り、陳思王曹子建、魏武帝の第四子より出づ

〔原文〕十歲屬文或每讀佛經輒流通嗟翫

〔訓読〕十歳に文を屬し、或いは佛經を讀む毎に、輒ち流通嗟翫す

〔原文〕以為轉贊七聲升降曲折之響

〔訓読〕以て轉贊七聲、升降曲折の響きを為る

〔原文〕嘗遊魚山忽聞空中梵天之響

〔訓読〕嘗て魚山で遊び、忽ち空中の梵天の響きを聞く

※魚山：中国山東省にある山。魏の曹植が空中に梵天の声を聞いて、梵唄を作ったという伝説の地。

〔原文〕其聲動心侍御皆聞

〔訓読〕其の聲、心を動かし、侍御皆聞く

〔原文〕子建深感神理

〔訓読〕子建深く神理を感じ

〔原文〕彌悟法應

〔訓読〕彌ます法應を悟る

〔原文〕乃摹其聲節寫爲梵唄

〔訓読〕乃ち其の聲節を摹（うつ）して寫して梵唄を為る

〔原文〕仍撰文製音傳爲后式

〔訓読〕仍ち文を撰び音を製し、傳へて后式と為す

〔原文〕梵聲起世甫於此

〔訓読〕梵聲世に起こる此に甫まる

〔原文〕其所傳唄凡有六契曰

〔訓読〕其の傳ふる所の唄は凡そ六契有りて曰く

〔原文〕曰是此人本朝有良忍

〔訓読〕曰く是れ此の人本朝に良忍有りて

※良忍…一〇七三—一三二（延久の長承）平安後期の比叡山の僧で融通念仏宗の開祖。尾張の人。

叡山東塔常行堂の堂僧（不断念仏衆）として天台声明を学ぶ一方、無動寺明王堂に二〇〇日間はだし参りを行う苦行を行った。のち大原に隱棲し、音楽声明の才を生かして念仏の合唱の作曲をし、これを集団で合唱する融通念仏を行った。またこの融通念仏による結縁勸進を勧める勸進活動も行った。後年、聖応大師の号が贈られた。

〔原文〕如興起聲明一家者也正録大氏

〔訓読〕聲明の一家を興起するが如し者や、正に大氏を録す

〔原文〕示支那唄賛之端原云

〔訓読〕支那の唄賛の端原を示すと云う

松嶋夜話 卷之上 66

〔原文〕一日有禪客問曰

〔訓読〕一日禪客有り、問ひて曰く

〔原文〕禪門道見性成佛淨土門説一心不亂

〔訓読〕禪門は見性成佛を道ひ、淨土門には一心不亂と説く

〔原文〕禪與淨土有差別也

〔訓読〕禪と淨土に差別有りや

〔原文〕對曰差別在汝心為之

〔訓読〕對へて曰く、差別は汝の心に有りて之を為す

〔原文〕不在佛祖心客曰

〔訓読〕佛祖の心に在らず、客曰く

〔原文〕然則如何了知

〔訓読〕然らば則ち何か了知せん

〔原文〕曰能入正定聚念佛故一心不亂也

〔訓読〕曰く能く正定聚に入りて念佛するが故に一心不亂なり

※正定聚…仏になれることが正まさしく定まっている人々、あるいはその境地のこと。

◎ samyakta-niyata-rāsi などの訳語。定聚、正定之聚とも同義。「聚(rāsi)」とは「(人々の)集まり」の意味。ただし実際には、仏となれることが定まっている「境地・位」を指す場合が多い。淨土教において正定聚は、四十八願の第一住正定聚願、およびその願成就文(聖典一・二四九／淨全一・一九)に説かれるとおり、極樂に往生したなら自ずと得られるものとされる。

〔原文〕一心不亂故見性成佛見性成佛故本性彌陀也

〔訓読〕一心不亂の故に見性成佛、見性成佛の故に本性彌陀なり

〔原文〕客曰聽命則禪與淨土莫有二致耶

〔訓読〕客曰く命を聴けば則ち禪と淨土、二致有る莫んや

〔原文〕曰不道無二致

〔訓読〕二致無しと道はず

〔原文〕只是不較多

〔訓読〕只だ是れ多くを較らべず

〔原文〕必竟如何直指

〔訓読〕必ず竟に如何が直指せん

〔原文〕余拈起手中數珠曰

〔訓読〕余手中の數珠を拈起して曰く

〔原文〕一二三三二一

〔訓読〕一二三、三二一

〔原文〕客唯唯信受而去

〔訓読〕客唯唯信受して去る

松嶋夜話 卷之上 67

〔原文〕夫極樂界者去此不遠

〔訓読〕夫れ極樂界なる者は此を去ること遠からず

〔原文〕即土即淨土即心即彌陀彌陀即心即心即淨土

〔訓読〕即土即ち淨土、即心即ち彌陀、彌陀即ち即心、即心即ち淨土

〔原文〕不等來世今生如是境界現前時謂之彌陀佛國去此不遠矣

〔訓読〕來世を等（また）ず、今生の是の如く境界現前する時、之を彌陀佛國、此を去ること遠からずと謂ふ

〔原文〕若不如此在娑婆受娑婆苦

〔訓読〕若し此の如くせざれば、娑婆に在て娑婆の苦を受く

〔原文〕入六道迷六道津

〔訓読〕六道に入りて六道の津に迷ふ

〔原文〕夫又如此雖在穢土不見穢土

〔訓読〕夫れ又此の如くならば、穢土に在れども穢土を見ず

〔原文〕居五濁離五濁

〔訓読〕五濁に居りて五濁を離る

〔原文〕原極樂娑婆二會一致矣

〔訓読〕原と極樂娑婆は二會して一致す

〔原文〕是心境不間住念佛定

〔訓読〕是れ心境間せずして念佛定まるを住するか

〔原文〕又云十方淨穢卷懷同在刹那

〔訓読〕又云う、十方の淨穢卷き懷（ふところ）にし、同じく刹那に在り

〔原文〕一念色心羅列徧收於法界

〔訓読〕一念の色心羅列し、徧へに法界を収むと

〔原文〕斯此謂也

〔訓読〕斯れ此の謂ひなり

〔原文〕丁亥孟陽三日有所思書于觀堂

〔訓読〕丁亥孟陽三日、思ふ所有りて觀堂に書す

松嶋夜話 卷之上 68

〔原文〕有客話次謂

〔訓読〕客有りて話の次謂へらく

〔原文〕聞師尚年有脚弱之疾

〔訓読〕聞く、師尚年脚弱の疾有り

〔原文〕權時出門則不徒行

〔訓読〕權の時、門を出てて則ち徒行せず

〔原文〕蓋僧騎車馬名教中有原也

〔訓読〕蓋し僧車馬に騎る、名教の中に原(ゆるすこと)有りや

〔原文〕余曰良也

〔訓読〕余曰く良きなり

〔原文〕問之是佛所呵

〔訓読〕之を問ふ、是佛の呵する所

〔原文〕奚不知之

〔訓読〕奚ぞ之を知らざらん

〔原文〕遺教法律曰

〔訓読〕遺教、法律に曰く

〔原文〕若出家人乘車馬

〔訓読〕若し出家した人車馬に乗りて一日すれば

〔原文〕除五百日齋

〔訓読〕五百日の齋を除く

〔原文〕一歳三百六十日乗計除却十八萬日齋

〔訓読〕一歳三百六十日の乗計、十八萬日の齋を除却す

〔原文〕舍利弗問佛何故比丘乘騎除五百日齋者佛言比丘是知禁律人

〔訓読〕舍利弗佛に問ふ、何故ぞ比丘騎に乗りて五百日の齋を除く者なる、佛言ふ、比丘は是れ禁律を知

る人なり

〔原文〕他見生謗

〔訓読〕他見て、謗を生ず

〔原文〕令他得罪除老病暫乘不犯

〔訓読〕他をして罪を得さしめ、老病暫く乗せて犯せざるは除く

〔原文〕余觀之除老病者

〔訓読〕余之を觀れば老病の者を除く

〔原文〕我老而病則已

〔訓読〕我老ひて病せば則ち已む

〔原文〕不尔此責不已

〔訓読〕尔らせずんば、此の責已まず

松嶋夜話 卷之上 69

〔原文〕明袁中即集中擬古樂府者數十章

〔訓読〕明の袁中即の集中に古樂府に擬する者數十章

〔原文〕皆盡妙法

〔訓読〕皆妙法を尋す

〔原文〕中有祝雨一篇

〔訓読〕中に祝雨の一篇有り

※《祝雨》是明代文学家袁宏道创作的一首诗作。袁宏道字中郎，号石公，荊州公安（今属湖北公安）人。

〔原文〕可膾炙衆人口者

〔訓読〕衆人の口に膾炙すべき者か

〔原文〕餘皆麟脯鳳炙不可知味

〔訓読〕餘皆な麟脯、鳳炙、味を知るべからず

〔原文〕祝雨曰雲縷縷山絮絮

〔訓読〕祝雨曰く、雲縷縷として山絮絮たり

〔原文〕寒欲来暖先據

〔訓読〕寒来らんと欲し、暖先ず據る

〔原文〕洗山山骨新洗花花色故

〔訓読〕山を洗えば山骨新たに、花を洗えば花色故ふる

〔原文〕句行綺麗意味深重

〔訓読〕句行は綺麗、意味深深

〔原文〕取而讀之言言字字如欲飛者

〔訓読〕取りて之を讀めば、言言字字飛ばんと欲する者の如し

〔原文〕然句法宜見

〔訓読〕然して句法宜しく見るべし

〔原文〕至樂府之體處誰得知之

〔訓読〕樂府の體處に至りては、誰か得て之を知る

〔原文〕大都樂府之類歌曲等本土人不可聞得

〔訓読〕大都樂府の類、歌曲等、本土の人聞き得べからず

〔原文〕少時觝明人閑詩套

〔訓読〕少き時明人に觝して詩套を閑す

〔原文〕有所不可得之處不體認

〔訓読〕得るべからざる所の處を得て體認せず

〔原文〕學者不會之

〔訓読〕學者之を會せず

〔原文〕見如此樂府歌行

〔訓読〕此の如き樂府の歌行を見れば

〔原文〕樂府只知輒如此者

〔訓読〕樂府只輒ち此の如き者と知り

〔原文〕容易操筆

〔訓読〕容易に筆を操って

〔原文〕効輦杜撰

〔訓読〕輦を効（いた）って杜撰す

〔原文〕閱其杜撰

〔訓読〕其の杜撰を閱るに

〔原文〕葉公之龍趙昌之花

〔訓読〕葉公の龍、趙昌の花

〔原文〕此花此龍元自不眞

〔訓読〕此の花、此の龍、元より自から眞とせず

〔原文〕矧蹈不眞之祖迹者乎

〔訓読〕矧（いはん）や眞ならざるの祖迹を蹈む者をや

〔原文〕李杜元白即便遠矣

〔訓読〕李杜白元は即便（すなわ）ち遠し

〔原文〕令中即聞之

〔訓読〕中即をして之を聞かしめば

〔原文〕發何等之呵笑

〔訓読〕何等の呵笑を發せん

松嶋夜話 卷之上 70

〔原文〕古書曰

〔訓読〕古書に曰く

〔原文〕古人當言而懼發言而憂又曰

〔訓読〕古人當に言ふべきにして懼れ、言を發して憂ふ、又曰く

〔原文〕止沸莫若去薪

〔訓読〕沸を止めるは、薪を去る若くは莫し

〔原文〕息過莫若無語

〔訓読〕過ちを息むるには、無語に若くは莫し

〔原文〕所以道口是禍門

〔訓読〕所以へに道ふ、口は是れ禍門

〔原文〕杜禍門莫如無言

〔訓読〕禍門を杜（とぎ）すは、無言に如くは莫し

〔原文〕莫勝不語

〔訓読〕語らずに勝る莫し

松嶋夜話 卷之上 七一

〔原文〕康僧會其先康居國人

〔訓読〕康僧會は、其の先は康居國の人なり

※康居…かつて中央アジアに在ったとされる遊牧国家。大宛の西北に在り、シル川の中・下流からシベリア南部を領していたと思われ、現在のカザフスタン南部にあたる。

〔原文〕世居天竺

〔訓読〕世よ天竺に居す

〔原文〕吳孫權赤鳥十年達建業

〔訓読〕吳の孫權、赤鳥十年建業に達す

〔原文〕吳國初見沙門孫權信之

〔訓読〕吳國初めて沙門を見て、孫權之を信ず

〔原文〕權見舍利威靈立塔寺曰建初寺

〔訓読〕權舎利の威靈を見て、塔寺を立つ、建初寺と曰ふ

〔原文〕江左法大興

〔訓読〕江左法大いに興る

〔原文〕孫皓即位法令苛虐

〔訓読〕孫皓即位し、法令苛虐なり

〔原文〕僧會對孫皓曰

〔訓読〕僧會、孫皓に對へて曰く

〔原文〕明主以孝慈治天下則赤鴉翔而老人見

〔訓読〕明主、孝慈を以て天下を治めば、則ち赤鴉翔びて老人見ゆ

〔原文〕以仁徳育萬物則醴泉冽而嘉禾茁

〔訓読〕仁徳を以て萬物を育すれば、則ち醴泉冽して嘉禾茁(さつ)す

〔原文〕善既有應惡亦如之

〔訓読〕善既に應有り、惡も亦之の如し

〔原文〕故為惡於隱鬼得而誅之

〔訓読〕故に惡を隱に為し、鬼得て之を誅す

〔原文〕為惡於顯人得而誅之

〔訓読〕惡を顯に為し、人得て之を誅す

〔原文〕易称積善餘慶

〔訓読〕易に積善の餘慶と称し、

〔原文〕詩美求福不回

〔訓読〕詩に福を求め回（たが）はずと美（ほ）む

〔原文〕雖儒典之格言即佛教之明訓云

〔訓読〕儒典の格言と雖も、即ち佛教の明訓に云う

〔原文〕今見天下國下明主在于上

〔訓読〕今天下國下を見るに、明主上に在り

〔原文〕行仁徳戒殺信法

〔訓読〕仁徳を行い、殺を戒め法を信ず

〔原文〕又非深元元之愛省慘酷之科者也

〔訓読〕又元元の愛を深め慘酷の科を省く者に非ず

〔原文〕然見國下變化曰之國家運數哉

〔訓読〕然れども國家の變化を見るに、之を國家の運數と曰ふ

〔

松嶋夜話 卷之上 72

〔原文〕元文天祥曰樂人之樂者憂人之憂

〔訓読〕元の文天祥曰く、人の樂を樂しむ者は人の憂いを憂う

〔原文〕此言雖小説一言以蔽天下人事

〔訓読〕此の言、小説と雖も、一言以て天下の人事を蔽ふ

〔原文〕蓋不樂樂人之樂者不系人之憂

〔訓読〕蓋し人の樂を樂しむことを樂しまざる者は人の憂いに系らず

〔原文〕此故一生克聊吾生

〔訓読〕此の故に一生克く吾が正を聊(やす)んず

〔原文〕樂樂人之樂者必憂憂人之憂

〔訓読〕人の樂を樂しむことを樂しむ者は必ず人の憂いを憂うことを憂う

〔原文〕此故不易安

〔訓読〕此の故に安し易しからん

〔原文〕以賊一生

〔訓読〕以て一生を賊(そこ)なふ

〔原文〕天祥此言雖微言教知人情大節

〔訓読〕天祥、此の言微と雖も、人情の大節を知らしむ

〔原文〕吁可誦

〔訓読〕吁、誦(そら)んずるべし

松嶋夜話 卷之上 73

〔原文〕本朝源顕基卿有雅言言

〔訓読〕本朝源顕基卿、雅言有りて言ふ

※源顕基（みなもとの あきもと）…平安時代中期の公卿。醍醐源氏高明流、権大納言・源俊賢の子。官位は従三位・権中納言。後一条天皇の側近として仕えた。

〔原文〕願無罪

〔訓読〕罪無きを願ふ

〔原文〕見配所月其心疼厭榮華耽眞隱者乎

〔訓読〕配所の月を見れば、其の心疼き榮華を厭ふ、眞隱に耽（ふけ）る者か

〔原文〕其人渥受寛仁帝寵愛

〔訓読〕其の人渥く寛仁の帝の寵愛を受く

〔原文〕長元九年當帝升遐無其間而出家

〔訓読〕長元九年帝の升遐に當り、其の間無く出家す

〔原文〕上横川師延殷

〔訓読〕横川に上りて延殷に師す

※延殷（968―1050）…平安時代中期の僧。安和元年生まれ。比叡山で慈仁僧正について出家。宋にいこうとするが朝廷の命でとどめられ、数年多武峰にかくれたのち、比叡山にもどる。長暦2年天台座主をめぐる延暦寺と園城寺の争いをきらい、真言宗の醍醐寺にうつり仁海に師事。永承2年法橋。永承5年11月11日死去。83歳。但馬出身。

〔原文〕諱曰圓照

〔訓読〕諱して圓照と曰ふ

〔原文〕後入大原山間修練

〔訓読〕後、大原に入りて山間に修練す

〔原文〕又住醍醐

〔訓読〕又醍醐に住す

〔原文〕末后患疽

〔訓読〕末后は疽を患らふ

〔原文〕自言萬病中心氣不亂而逝者癰疽而已

〔訓読〕自ら言う、萬病の中、心氣亂れず逝く者は癰疽のみ

〔原文〕患也幸也

〔訓読〕患うや幸いなり

〔原文〕終謝鑒治

〔訓読〕終いに鑒治を謝す

〔原文〕觀念佛吉祥而往生矣

〔訓読〕佛の吉祥を觀念し往生す

〔原文〕后有卜部兼好戀斯人

〔訓読〕后ち卜侮兼好有り、斯の人を戀ふ

※卜部兼好（うらべのかねよし）→うらべのけんこう）∴鎌倉時代末期から南北朝時代にかけての
官人・遁世者・歌人・随筆家。出家後の法名の兼好法師が良く知られ、俗名を音読みしたと
考えられる。鎌倉および京都に足跡を残す。著作は、日本三大随筆の一つとされる『徒然草』、
私家集に『兼好法師家集』がある。

〔原文〕謂曰

〔訓読〕謂ひて曰く

〔原文〕不達憂沈染衣避世

〔訓読〕不達憂沈して、衣を染め世を避く

〔原文〕吾得不爲寥寥送日

〔訓読〕吾得て爲さず、寥寥として日を送る

〔原文〕無傒杜門

〔訓読〕傒つこと無くして門を杜（と）じ

〔原文〕我是尼之

〔訓読〕我是れ之に尼（ちか）づく

〔原文〕吁顯基卿之願無罪而見配所月者底心可哉

〔訓読〕吁、顯基卿の罪を無くして配所の月を見んと願う者は底心可なるかな

〔原文〕余也而今必不事兼好言

〔訓読〕余や而今必ずしも兼好の言を事にせず

〔原文〕只慕斯人無此苦惱此心不亂念佛往生者

〔訓読〕只斯の人此の苦惱なく、此の心亂れず、念佛往生する者を慕う

〔原文〕仍至讀公傳贊者

〔訓読〕仍ち公の傳贊を讀む者に至る

松嶋夜話 卷之上 74

〔原文〕天龍開山夢窓國師昔日有垂世警語

〔訓読〕天龍の開山夢窓國師、昔日垂世の警語有り

※夢窓疎石〔1275～1351〕：南北朝時代の臨済宗の僧。伊勢の人。一山一寧・高峰顯日に師事。

後醍醐天皇・足利尊氏らの篤信を受け、京都嵯峨に天竜寺を開山。天竜寺船による貿易を促し、

また造園芸術を發展させた。門派は夢窓派といい、五山文学の最盛期をつくった。著「夢中問

答」「臨川寺家訓」「西山夜話」「夢窓国師語録」など。正覚国師。心宗国師。普济国師。夢窓国師。

〔原文〕曰勞心於相似之閑語

〔訓読〕曰く、心を相似の閑語に勞す

〔原文〕粉念於滑稽之浮華憶之

〔訓読〕念を滑稽の浮華に粉すと

〔原文〕三百年前閱叢林詩偈文墨之家風

〔訓読〕三百年前、叢林の詩偈文墨の家風を閱し

〔原文〕意氣高明辭理精鬯

〔訓読〕意氣高明、辭理精鬯

〔原文〕苟泰山可仰者也

〔訓読〕苟とに泰山は仰ぐべき者なり

〔原文〕后二百年交雖多有其人

〔訓読〕後の二百年の交、多く其の人有ると雖も

〔原文〕費於禪語大誇之辯口

〔訓読〕禪語大いに誇る辯口を費やす

〔原文〕縱遊談不根之機關

〔訓読〕遊談の不根の機關を縱にす

〔原文〕家風日衰耗矣

〔訓読〕家風日に衰耗す

〔原文〕又見其句法意法

〔訓読〕又其の句法、意法を見るに

〔原文〕詩偈且如文章文章還如詩偈

〔訓読〕詩偈且つ文章の如く、文章は還って詩偈の如し

〔原文〕無可判断

〔訓読〕判断すべき無し

〔原文〕近来適有正法正當正知見之人

〔訓読〕近来適たま正法正當正知見の人有り

〔原文〕漸漸回於古道

〔訓読〕漸漸として古道に回る

〔原文〕世有高明人繼武

〔訓読〕世に高明の人有りて武を繼ぎ

〔原文〕又繩之到今日

〔訓読〕又之に繩して今日に到る

〔原文〕寔所謂奚時奚世無奇人乎也

〔訓読〕寔に所謂奚れの時、奚れの世にか奇人無きならんと

〔原文〕此謂也

〔訓読〕此の謂いなり

〔原文〕諸君子請著眼看也

〔訓読〕諸君子請う、眼を著して看よ

〔原文〕莫井中落於鎚

〔訓読〕井中に鎚を落とす莫し

松嶋夜話 卷之上 75

〔原文〕來客以三世因果応報有問之者

〔訓読〕來客、三世因果応報を以て之を問ふ者有り

〔原文〕余告近代武族遺事曰

〔訓読〕余、近代武族の遺事を告げて曰く

〔原文〕永正之頃北条早雲殺三浦道寸父子

〔訓読〕永正之頃、北条早雲、三浦道寸父子を殺し

※三浦義同（みうらよしあつ）…戦国時代初期の武将。東相模の大名。一般的には出家後の「三浦道寸」の名で呼ばれることが多い。相模三浦氏の事実上の最後の当主である。

〔原文〕早雲歴四代至氏政

〔訓読〕早雲四代を歴て氏政に至る

〔原文〕氏政爲秀吉滅亡矣

〔訓読〕氏政、秀吉の爲に滅亡せらる

〔原文〕其間九十三年氏政與道寸父子同月同日亡

〔訓読〕其の間九十三年、氏政と道寸父子、同月同日に亡ぶ

〔原文〕天下皆言道寸怨讎之報應矣

〔訓読〕天下皆言ふ、道寸の怨讎の報應せんと

〔原文〕又天正之頃信長戰于甲州

〔訓読〕又天正の頃、信長甲州に戦い

〔原文〕燒慧林山門

〔訓読〕慧林の山門を燒き

〔原文〕同年其月同日信長爲明智於本能寺見燒亡

〔訓読〕同年其月同日信長明智の爲に本能寺に於いて燒亡せらる

〔原文〕是現在因果即時報應

〔訓読〕是現在の因果、即時の報應

〔原文〕豈待三世

〔訓読〕豈に三世を待たん

〔原文〕若問涉數百來年者

〔訓読〕若し數百來年に渉る者を問えば

〔原文〕唐韓昌黎交友張籍其前身

〔訓読〕唐の韓昌黎の交友張籍の其の前身

〔原文〕為鹿入泉千戸王某之夢

〔訓読〕鹿と為て、泉千戸王の夢に入る

〔原文〕求免于殺不得

〔訓読〕殺を免れるを求めども得ず

〔原文〕竟入官見烹殺

〔訓読〕竟に官に入りて烹殺せらる

〔原文〕蓋泉千戸萬曆之人

〔訓読〕蓋し、泉千戸は萬曆の人

〔原文〕與張籍相去數百年

〔訓読〕張籍と相去ること數百年

〔原文〕觀之未知張籍之三世因果報應之艾

〔訓読〕之を觀れば張籍の三世の因果報應の艾（おさ）むことを知らず

〔原文〕吁聞者不追傷乎也

〔訓読〕吁、聞く者は追傷せずんや

〔原文〕夫三世因果在今日

〔訓読〕夫れ三世の因果は今日に在り

〔原文〕今之因果涉於三世

〔訓読〕今の因果は三世に渉る

〔原文〕報應不唐

〔訓読〕報應唐（おお）からず

〔原文〕因果不寢

〔訓読〕因果寢（や）まず

〔原文〕客聆余談柄默然語塞退於席

〔訓読〕客余が談柄を聆き、默然として語塞ぎ、席に退ぞく

松嶋夜話 卷之上 76

〔原文〕來客曰密家曰合殺之語

〔訓読〕來客曰く、密家、合殺の語曰く

〔原文〕宗門使此語何義

〔訓読〕宗門にも此の語を使う、何の義ぞ

〔原文〕余曰合殺法曲子之関之調子也

〔訓読〕余曰く、合殺は法曲子が関（や）むことの調子なり

〔原文〕宗門也爲折合之義

〔訓読〕宗門や折合の義を爲す

〔原文〕折合合殺之義也是末上之意

〔訓読〕折合、合殺の義や是れ末上の意なり

〔原文〕必竟之理取極則之義者也又可知

〔訓読〕必竟の理、極則の義を取る者や知るべき

松嶋夜話 卷之上 77

〔原文〕靈芝元照大師曰化當世無如講説

〔訓読〕靈芝元照大師曰く當世を化すれば講説に如くは無し

※元照（1058年―1126年）：俗姓唐，字湛然，號安忍子，又稱靈芝尊者，浙江餘杭人，宋朝律宗高僧。他起初跟隨慧鑒律師專學律宗，後跟從神悟禪師學習天台宗。之後改學南山律宗。住靈芝寺三十年，宋徽宗政和六年圓寂。其著有《觀無量壽經》及《阿彌陀經》的注釋，並以天台宗教旨注釋《四分律刪繁補闕行事鈔》、《四分律含注戒本疏》、《四分律刪補隨機羯磨疏》，撰有《四分律行事鈔資持記》、《四分律戒本疏行宗記》、《四分律羯磨疏濟緣記》。因為《行事鈔資持記》內容與允堪注釋的《行事鈔會正記》立場相左，四分一宗由此分派，其法係為資持派。

〔原文〕垂将来無如著書

〔訓読〕将来に垂るは書を著するに如くは無し

〔原文〕因憶此言誠正當也

〔訓読〕因て憶へらく、此の言誠に正當なり

〔原文〕在昔義堂絶海仍相公促

〔訓読〕在昔、義堂、絶海は相公が促すに仍って

※義堂周信：南北朝時代から室町時代の臨濟宗の僧である。「義堂」は道号、「周信」は法名であり、別に「空華道人」とも号する。

絶海中津…建武元年（1123）1月13日（1334年12月9日）―応永12年4月5日（1405年5月3日）は、南北朝時代から室町時代前期にかけての臨濟宗の禅僧・漢詩人。道号は絶海のほかに要関、堅子、蕉堅道人など多数ある。中津は諱。義堂周信と共に「五山文学の双壁」と併称されてきたが、20世紀後半から義堂より詩風の高さを評価され、五山文学ひいては中世文芸史の頂点を為すと論じられている。

〔原文〕講説諸經論

〔訓読〕諸の經論を講説す

〔原文〕近來還所講説異古僧也

〔訓読〕近來還た講説する所は古僧と異なり

〔原文〕東西禪叢惟多講禪録

〔訓読〕東西の禪叢、惟た多くは禪録を講す

〔原文〕是可嘉尚也

〔訓読〕是れ嘉尚すべし

〔原文〕然以説法涉文句者報身化身之説教也

〔訓読〕然ども以へらく、説法文句に渉る者は報身化身の説教なり

〔原文〕自曹溪門下見之

〔訓読〕曹溪の門下より之を見れば

〔原文〕所謂俗談也

〔訓読〕所謂俗談なり

〔原文〕禪門説法無文無句

〔訓読〕禪門の説法、文無く、句無し

〔原文〕常説熾然説而無間歇者曰之禪家説法而離俗談者

〔訓読〕常説熾然にして、説ひて間歇無き者、之を禪家の説法而も俗談を離るる者といふ

〔原文〕故古徳曰公案者須參得

〔訓読〕故に古徳に曰く、公案は須らく參得すべし

〔原文〕不可講習

〔訓読〕講習すべからず

〔原文〕今之謂碧岩虛堂者皆公案底也

〔訓読〕今の碧岩虛堂を謂う者は皆公案の底なり

〔原文〕是可講可乎也不講可乎也

〔訓読〕是れ講すべきこと可ならんや、講ぜずこと可ならんや

〔原文〕縱雖曰可講未得未證

〔訓読〕縱へ講すべきと曰へども、未だ得ず未だ證せず

※未得未證…「未だ得ざるを得たりと謂い、未だ証せざるを証せりと謂えり」という「未得謂得
未証謂証」は、未だ悟りを得ていないのに得たと思ひ込むこと

〔原文〕不俱正知見

〔訓読〕正知見を具せず

〔原文〕只向公案上兼言滯句

〔訓読〕只だ公案上に向かい言を兼(と)って句を滞って

〔原文〕情識中尋覓則與祖師之心

〔訓読〕情識中に尋覓すれば、則ち祖師の心に與ふ

〔原文〕千里萬里顧厥講何益矣

〔訓読〕千里萬里、厥の講を顧みるに何の益ぞや

〔原文〕似醫衆盲却曳衆盲也

〔訓読〕衆盲を醫するに似て、却って衆盲を曳くなり

〔原文〕若或欲瞻揆不厭常住法質強設大會鳩烏合衆為人說法底者無如講說教諭而称經師為坐主

〔訓読〕若し或いは揆(はかりごと)せんと常住の法質を厭はず、強ひて大會を設けて烏合の衆を鳩めて、人と為りの說法底を瞻んと欲する者は、教諭を講説して經師を称して坐主と為るに如し

〔原文〕惟經講談祖録而称禪師我不善

〔訓読〕惟だ輕しく祖録を講談し禪師と称することは、我善とせず

〔原文〕吁叢林諸大士有頂門開聰言外識旨人

〔訓読〕吁、叢林の諸大士頂門、聰を開き、言外に旨を識る人有らば

〔原文〕請屬意於于此

〔訓読〕請ふ、意を此に屬して

〔原文〕別調開眼而勿負脚跟下矣

〔訓読〕別調に眼を開き、脚跟の下に負う勿れ

〔原文〕希莫為以吾於無智無才無道無德

〔訓読〕希くは、吾を以て智無く才無く道無く徳無く

〔原文〕死鬼為隣

〔訓読〕死鬼隣と為り

〔原文〕七十老孱且倣孟軻空言唐施于世而鳴蟬梟梟

〔訓読〕七十の老孱且つ孟軻に倣ひて空言唐(おな)しく世に施して鳴蟬梟梟たり

〔原文〕將薄夕陽尚未知止啼時者矣

〔訓読〕將た夕陽に薄し尚を未だ啼くを止める時を知る者や

〔原文〕蓋另外講說一套啓紀譚之上題

〔訓読〕蓋し另外の講說一套、紀譚の上題を啓く

〔原文〕著書訣別詳同書后集中弓

〔訓読〕著書の訣別は同書后集の中弓に詳しくす

※弓：一巻の一同じ。弓は巻の借字。道經に用ひた語。〔楊慎、轉注古音〕弓音膠、即說文糾字、道經借爲卷帙之卷。

〔原文〕往而督之

〔訓読〕往きて之を督せ

松嶋夜話 卷之上 78

〔原文〕我聞烏卯國土宇内有佛氏梵摩者凡四十八萬二千七百三十六箇寺
〔訓読〕我聞く、烏卯國土宇内に佛氏の梵摩有る者二千七百三十六箇寺

※摩：ヨウ《字義》みどころ

〔原文〕苟支竺之多不過之

〔訓読〕苟も支竺多きも之に過ぎず

〔原文〕幸聆目今有旨

〔訓読〕幸いにも目今旨有るを聆く

〔原文〕購於法貲此天下法社

〔訓読〕法貲を此の天下の法社を購って

〔原文〕而修於天王寺廢址

〔訓読〕天王寺の廢址を修す

〔原文〕必有成日也

〔訓読〕必ず成る日あり

〔原文〕是匪太子之徳玃天照阿每郷者乎也

〔訓読〕是れ太子の徳、天照の阿毎の郷を玃（たす）くる者に匪ずなり

〔原文〕吁衆生誓願度央劫不寢

〔訓読〕吁、衆生の誓願の度、央劫にも寢ず

松嶋夜話 卷之上 79

〔原文〕洞宗了道老宿其来由長崎玄光肉姪僧

〔訓読〕洞宗了道老宿、その来由は長崎の玄光の肉姪の僧

〔原文〕幼庵侍玄師人也

〔訓読〕幼きより玄師に庵侍する人なり

〔原文〕能學能書幸東遊

〔訓読〕學を能くし、書くを能くす、幸いに東遊す

〔原文〕余款之天神臺蟠龍塔院令行樂

〔訓読〕余之を天神臺の蟠龍塔院に款きて行樂せしむ

〔原文〕其交三四年

〔訓読〕其の交わり三四年

〔原文〕余一日相訪問

〔訓読〕余一日相い訪ふ

〔原文〕茶話次出乙本軸之焦者示余

〔訓読〕茶話の次、乙本の軸の焦る者を出しめて余に示す

〔原文〕睹之辯天焦像也

〔訓読〕之を睹れば辯天の焦像なり

〔原文〕問由曰

〔訓読〕由を問ひて曰く

〔原文〕東奥伊達領保原邑有石川善信士

〔訓読〕東奥の伊達領の保原邑に石川善信士有り

〔原文〕常信高野大師護摩辯天画像

〔訓読〕常に高野大師の護摩辯天の画像を信ず

〔原文〕享保六年此日一邨浮火延燎

〔訓読〕享保六年、此の日、一邨、浮火延燎す

〔原文〕石川藏庫家居共一時為焦土

〔訓読〕石川の藏庫、家居共に一時焦土と為る

〔原文〕翌早待火之竿往而見之

〔訓読〕翌早、火の竿を持ち、往きて之を見る

〔原文〕天像有灰燼中上題下題皆焼

〔訓読〕天像、灰燼の中に有り、上題下題皆焼ける

〔原文〕本尊及十五童子画様一點不焦

〔訓読〕本尊及び十五童子の画様一點も焦げず

〔原文〕見者生希有想

〔訓読〕見る者は希有の想を生ず

〔原文〕余聞了道語感歎不艾

〔訓読〕余、了道の語を聞きて、感歎艾(おわま)らず

〔原文〕作其記授于石川

〔訓読〕其の記を作り石川に授く

〔原文〕又系于此為世之闡提慢心不信佛不知法誣於神天者俾起信心云

〔訓読〕又、此れを系げて、世の闡提慢心、佛を信ぜず法を知らず神天を誣る者の為に、信心を起さしむ、云う

※闡提…仏の教えを信じず、成仏する因縁をもたない者。◎icchantikaの音写。一闡提の略。一

闡提伽・一顛迦・一闡底柯とも音写し、信不具足・断善根と訳す。阿闡底迦・阿顛底迦・

阿闡提は同類の語の訛音写とみられている。

松嶋夜話 卷之上 80

〔原文〕余在播州龍門之會日遇長崎笠卿

〔訓読〕世蕃龍の龍門の會に在る日、長崎の笠卿に遇う

〔原文〕茶話次出書片示余

〔訓読〕茶話次、書片を出だして余に示す

〔原文〕按摩導引法唐人所授之手記也

〔訓読〕按摩導引の法、唐人の授ける所の手記なり

〔原文〕煩記之為善病者助之云

〔訓読〕煩しく之を記して、善く病む者の為に之を助けて云う

〔原文〕蓋人間世有一日入門治法矣

〔訓読〕蓋し人間の世、一日入門の治法有り

〔原文〕已夜半子刻陽氣興時又或早晨欲起牀頃先端身靜坐

〔訓読〕已に夜半子の刻、陽氣興る時、又た或いは早晨牀を起きんと欲する頃、先ず身を端へ靜坐し

〔原文〕塞眼閉口

〔訓読〕眼を塞ぎ口を閉じる

〔原文〕以舌之尖著上之齶叩齒三十六度

〔訓読〕舌の尖を以て、上の齶に著け、齒を叩くこと三十六度

〔原文〕復以兩手塞兩片耳

〔訓読〕復た兩手を以て兩耳を塞ぐ

〔原文〕暫澄精氣放手一所

〔訓読〕暫く精氣を澄して、手を一所に放つ

〔原文〕摩閉目上撫摺顔貌

〔訓読〕閉目の上を摩（こす）りて、顔貌を撫摺する

〔原文〕兩手組合舉於手臂展張手指

〔訓読〕兩手を組み合わせ、手臂を舉げて、手指を展張す

〔原文〕又下其手於膏肓之骨所行會

〔訓読〕又其の手を膏肓の骨の所に下にし行會す

〔原文〕以右手著地少屈於躬固握左手

〔訓読〕右手を以て地に著け、少し躬を屈めて、固く左手を握る

〔原文〕擊背面十四椎之左方除除十六度

〔訓読〕背面の十四の椎の左方を撃つこと、除除として十六度

〔原文〕又握右拳擊右旁十四十六度

〔訓読〕又右拳を握り右旁の十四を撃つこと十六度

〔原文〕后以其兩手心胸腹脇摩下數番

〔訓読〕后、其の兩手を以て、心胸腹脇を摩（さす）り下すこと數番

〔原文〕又左右兩脚縱橫按摩

〔訓読〕又左右の兩脚縱橫に按摩し

〔原文〕又卓兩膝置頤膝頭

〔訓読〕又兩膝を卓（たか）くして、頤を膝頭に置く

〔原文〕又組兩掌揚足之心

〔訓読〕又兩掌を組んで足の心（うら）を揚げて

〔原文〕牽合兩足而二三回

〔訓読〕兩足を牽合すること二三回

〔原文〕后揺摩兩脛直展兩足

〔訓読〕后、兩脛を揺摩し、直に兩足を展じ

〔原文〕舉頸仰身

〔訓読〕頸を挙げて身を仰ぎ

〔原文〕手臂擴兩旁靖氣斂心

〔訓読〕手臂を兩旁に擴げ、氣を靖（し）ずめ、心を斂（おさ）める

〔原文〕優優倒臥

〔訓読〕優優として倒臥す

〔原文〕緩緩地起於床

〔訓読〕緩緩たる地に床を起きて

〔原文〕盥面毎盥點燒鹽少許於楊枝舒浣牙齒

〔訓読〕盥の面は、盥毎に、燒鹽、少許（すこし）楊枝に點し、舒（おもむ）ろに牙齒を浣う

〔原文〕以其含水清於兩目

〔訓読〕其の含める水を以て兩目を清む

〔原文〕濕於面貌則一生間眼力爽朗

〔訓読〕面貌を濕すれば、則ち一生の間、眼力爽朗

〔原文〕牙齦堅硬面癱不茁

〔訓読〕牙齦堅硬にして、面癱茁ず

〔原文〕顔半溫潤

〔訓読〕顔半溫潤

〔原文〕以此按摩導引之功作

〔訓読〕此の按摩導引の功作を以て

〔原文〕自然四體輕康衆病悉除

〔訓読〕自然と四體輕康にして、悉病悉く除く

〔原文〕老而益壯

〔訓読〕老いて益ます壯ならん

〔原文〕所謂換骨妙法頤神仙術是也

〔訓読〕所謂換骨妙法、頤神の戰術、是れなり

〔原文〕舍之他之求

〔訓読〕之を捨て他に之きて求むれば

〔原文〕則非所吾之識也云云

〔訓読〕則ち吾の識る所に非ざるなり、云云

松嶋夜話 卷之上 81

〔原文〕近代督藥劑者批古醫曰

〔訓読〕近代、藥劑を督する者、古醫を批して曰く

〔原文〕陳根白朮新根蒼朮

〔訓読〕陳（ふる）い根は白朮、新しい根は蒼朮

〔原文〕還以陳為蒼以新為白

〔訓読〕還って陳きを以て蒼と為し、新しきを以て白と為す

〔原文〕裏内叨叨皆從之

〔訓読〕裏内叨叨として、皆之に従う

〔原文〕余聞而不決

〔訓読〕余聞きて決せず

〔原文〕近頃見新渡醫編

〔訓読〕近頃、新渡の醫編を見る

〔原文〕方中記白朮則旁下小注曰冬朮也

〔訓読〕方中に白朮を記する、則ち旁に小注を下しめ、冬朮と曰ふ

〔原文〕蓋冬朮指歷四時之陳根

〔訓読〕蓋し冬朮は四時えお歴るの陳根を指す

〔原文〕所謂陳根白朮者明矣

〔訓読〕所謂陳根は白朮の明や

〔原文〕見之古醫不誤

〔訓読〕之を見れば古醫誤らず

〔原文〕今人易批古醫不考之過知之

〔訓読〕今人易しく古醫を批す、考えざるの過之を知る

松嶋夜話 卷之上 82

〔原文〕人恒好吃百沸湯

〔訓読〕人恒に好んで百沸湯を吃す

〔原文〕是必有益奥於胃口乾於濕冷

〔訓読〕是必ず益有り、胃口を奥（あた）め濕冷を乾かず

〔原文〕如言大經也

〔訓読〕大經に言が如しなり

〔原文〕子五十遂前在于洛日閱淺井周伯之一家治病

〔訓読〕子五十遂（さい）前、洛に在る日、淺井周伯の一家が病を治すを閱し

※淺井周伯…1643—1705 江戸時代前期の医師。寛永20年生まれ。京都の人。味岡三伯にま

なび、井原道閑、小川朔庵、岡本一抱とともに味岡門下の四傑といわれた。宝永8年10月死去。66歳。名は正純。号は策庵。通称は周璞ともかく。著作に「切紙之弁」「藥性記」など。

〔原文〕有疾者一頓吃熱湯不頼醫藥

〔訓読〕疾有れば一頓に熱湯を吃ましめ、醫藥に頼らず

〔原文〕余于時有急痺痛

〔訓読〕余時に急な痺痛有り

〔原文〕發則絶氣

〔訓読〕發すれば則ち氣を絶す

〔原文〕老湯一啜其痛即已

〔訓読〕老湯一たび啜れば、其の痛み即ち已む

〔原文〕斯年艾試之

〔訓読〕斯の年艾（おわ）るまで之を試す

〔原文〕不知乎也

〔訓読〕知らざらんや

松嶋夜話 卷之上 83

〔原文〕世諺曰遮三不得一

〔訓読〕世諺に曰く、三を遮ぎれば一を得ず

〔原文〕覓之都盧失

〔訓読〕之を覓(うかが)へば都盧(すべて)て失ふ

※都盧…すべて。ことごとく。中国の俗語的用法。

〔原文〕余曰人得其一則萬事不欠

〔訓読〕余曰く、人其の一を得ば、則ち萬事欠かず

〔原文〕失其一則萬事敗矣

〔訓読〕其の一を失はば、則ち萬事敗す

〔原文〕所以一以貫之云

〔訓読〕所以、一を以て之を貫く、云う

〔原文〕是苟嘗一嚮而識一鼎之味者乎

〔訓読〕是れ苟とに一嚮を嘗めて一鼎の味を識る者か

〔原文〕吁一徳偉哉

〔訓読〕吁、一徳偉なるかな

松嶋夜話 卷之上 84

〔原文〕有識者讀書以書照心

〔訓読〕有識の者は書を讀む、書を以て心を照らす

〔原文〕有道者讀書以心照書

〔訓読〕道有る者は書を讀む、心を以て書を照らす

〔原文〕蓋以書照心則光明生虛室

〔訓読〕蓋し、書を以て心を照らすは、則ち光明虛室に生ず

〔原文〕以心照書則萬象光通達

〔訓読〕心を以て書を照らすは、則ち萬象の光通達す

〔原文〕由一回非心眼開者不可知之

〔訓読〕一回心眼を開く者に非ざるに由りて、之を知るべからず

〔原文〕力乎君子

〔訓読〕力めよ。君子

松嶋夜話 卷之上 85

〔原文〕太平廣記百三十六引宣室志曰

〔訓読〕太平廣記百三十六に宣室志を引きて曰く

※宣室志…中国、唐の文語伝奇小説集。張詠の著。もと一〇巻あったと思われるが、散逸して現在には『稗海』『重校説郛』などに一部が収録されている。著者は『靈怪集』を書いた張薦の孫で、礼部侍郎まで進んだ。

〔原文〕唐初有金製神像

〔訓読〕唐の初めに金製の神像有り

〔原文〕丁則天當宁厝之宮中

〔訓読〕則天に宁に当たるに丁(あた)りて、之を宮中に厝く

※当宁…宁の所に立つ。宁は、門と屏との間で、天子は此處に立つて諸侯の朝見を受ける。〔禮、曲禮〕天子當宁而立、諸公東面、諸侯西面、日朝。〔疏〕字者、爾雅云、門屏之間、謂之

〔原文〕有是像占王者在位幾年庚之說

〔訓読〕是の像、王者の在位幾年ばくの年庚を占う説有り

〔原文〕仍天后將三人太子命之占之

〔訓読〕仍りて天后、三人の太子を將ひて、之に命じて之を占わしむ

〔原文〕後在位時濟考之

〔訓読〕後在位の時、濟ち之を考えるに

※「濟」がよくわかりません

〔原文〕世數盡契其占

〔訓読〕世數、盡く其の占いに契る

〔原文〕又山庵雜錄昔日天帝評定徑山四十八代住持

〔訓読〕又、山庵雜錄に昔日天帝四十八代の住持を評定す

※山庵雜錄…明代、怒中無愠(1309-86)の編。天童の山庵に隱退ののち、宋の『羅湖野録』『雲臥紀談』にならって、当代の禪宗の逸話を集録したもの。洪武八年(1375)に成る

※徑山(きんざん)…中国五山の一つ。浙江省北部、杭州西方の臨安県にある天目山の東北峰。

※住持…一寺の主僧となること。また、その僧。住職。

〔原文〕觀之二太子之在位先已天上所定

〔訓読〕之を觀れば、二太子の位に在ること、先に已に天上の定むる所

〔原文〕徑山住持復是先定

〔訓読〕徑山住持も復た是れ先に定むる

〔原文〕陽界之在位住持苟非一朝一夕之權時所以面面鑑之

〔訓読〕陽界の位に在る住持、苟とに一朝一夕の權時に、以てする所に非ず、面面之を鑑よ